

研究報告集録

第48号

はしがき

<こども園 表現>

- 「豊かな感性」を育むための環境構成と援助の工夫
- 幼児のイメージが広がるような素材等を使った造形遊びを通して —

浦添市立浦添こども園
山里 逸子

<小学校 特別活動>

- 自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成
- キャリア教育の要である特別活動「学級活動」の実践を通して —

浦添市立宮城小学校
根間 成美

<中学校 数学>

- 数学的な見方・考え方を働かせた思考力、判断力、表現力等の育成
- ICTを活用した数学的活動を通して —

浦添市立神森中学校
金城 史

<自立支援>

- 不登校のケアとサポートの工夫
- 学校・地域・関係機関の機能を活かした連携を通して —

浦添市立港川小学校
仲西 謙

<適応指導>

- 不登校児童生徒への理解と援助のあり方
- 開発的教育相談によるリレーションづくりを通して —

浦添市立港川中学校
屋富祖 貴子

は し が き

今の子供たちが社会で活躍する頃には、グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化等により、社会は大きく、急速に変化しており、予測が困難な時代となっています。このような中、文部科学省は、子供たち一人一人が持続可能な社会の担い手となる力としての「生きる力」を教育課程全体を通して育成するために目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」と明確にしております。また、幼小中学校においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教育を推進することが求められています。本市においても、幼児児童生徒がこれからの社会をたくましく生き抜くことができるよう、基礎的な知識・技能を身につけ、豊かな人間性や健やかな体力などの「生きる力」の育成を基本とした教育の充実を目指しています。本研究所は、これまで長期教員研修事業を通して、学校教育の充実に資する人材の育成に努めております。昨年度の第47期までに幼稚園43名、小学校105名、中学校62名、合計210名の先生方が研修を終え、その成果を学校現場に還元しております。また、特別研究員研修事業として、平成2年から17名の先生方が実践研究を終え、多くの子供たちを成長へと導いています。

本年度、浦添こども園の山里逸子教諭は、「豊かな感性を育むための環境構成と援助の工夫ー幼児のイメージが広がるような素材を使った造形遊びを通してー」をテーマとし、のびのびと造形遊びを楽しみ、イメージを広げながら自分なりの豊かな感性を働かせて、自己発揮できる子を目指し研究実践に取り組みました。宮城小学校の根間成美教諭は、「自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成ーキャリア教育の要である特別活動「学級活動」の実践を通してー」をテーマとし、目指す資質・能力における三つの視点を意識した振り返りカードを活用し、学びをつなぐフィードバックの工夫を図り研究実践を進めました。神森中学校の金城史教諭は、「数学的な見方・考え方を働かせた思考力、判断力、表現力等の育成ーICTを活用した数学的活動を通してー」をテーマとし、図形領域において、数学的活動の中で、思考の可視化等を取り入れたICTを効果的に活用し研究実践を深めました。特別研究員適応指導教室「いまあじ」担当港川中学校の屋富祖貴子教諭は、「不登校児童生徒への理解と援助のあり方ー開発的教育相談によるリレーションづくりを通してー」をテーマに実践研究を進めてきました。また、特別研究員自立支援室「ひなた」担当港川小学校の仲西謙教諭は、「不登校のケアとサポートの工夫ー学校・地域・関係機関の機能を生かした連携を通してー」をテーマに実践研究に取り組みました。研究に専念できました5名の教諭にとって、理論を実践につなげ研究を深めることで、幼児児童生徒理解や授業改善につながったものと思います。その研究成果をこれからのこども園・幼稚園・学校現場で生かしていくことを期待します。

本研究報告書の理論研究や実践研究が、多くの先生方の保育及び幼稚園教育や授業改善・教育相談の質的向上の一助になれば幸いに存じます。結びに、本研究に対し、ご指導・ご助言を賜りました関係教職員の皆様方に深く感謝申し上げます。ご支援、ご協力いただきました校長先生や職員、学校教育課指導監はじめ指導主事の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

浦添市立教育研究所 所長 長濱 京子

令和2年3月

浦添市立教育研究所

目次

はしがき

<こども園 表現>	1
● 「豊かな感性」を育むための環境構成と援助の工夫 ー 幼児のイメージが広がるような素材等を使った造形遊びを通して ー	
	浦添市立浦添こども園 山里 逸子
<小学校 特別活動>	17
● 自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成 ー キャリア教育の要である特別活動「学級活動」の実践を通して ー	
	浦添市立宮城小学校 根間 成美
<中学校 数学>	33
● 数学的な見方・考え方を働かせた思考力,判断力,表現力等の育成 ー ICTを活用した数学的活動を通して ー	
	浦添市立神森中学校 金城 史
<自立支援>	49
● 不登校のケアとサポートの工夫 ー 学校・地域・関係機関の機能を活かした連携を通して ー	
	浦添市立港川小学校 仲西 謙
<適応指導>	57
● 不登校児童生徒への理解と援助のあり方 ー 開発的教育相談によるリレーションづくりを通して ー	
	浦添市立港川中学校 屋富祖 貴子

〈 こども園 表現 〉

「豊かな感性」を育むための環境構成と援助の工夫

— 幼児のイメージが広がるような素材等を使った造形遊びを通して —



浦添市立 浦添こども園

山里 逸子





目次



I	テーマ設定理由	1
II	目指す子ども像	2
III	研究の目標	2
IV	研究仮説	2
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
1	領域「表現」について	3
2	豊かな感性について	3
3	好奇心や探究心の芽生え	3
4	造形遊びとは	4
5	素材との出会い	5
6	環境構成と援助の工夫	6
VII	保育実践	7
1	題材名	7
2	ねらい	7
3	題材について	7
4	豊かな感性を捉える指標	7
5	造形遊びに関する保育計画表	7
6	本時までの取り組み	9
7	検証保育 保育指導案	10
8	本時後の様子	12
VIII	研究の考察	13
1	作業仮説(1)の検証	13
2	作業仮説(2)の検証	14
IX	研究の成果と課題	16
	主な参考文献・引用文献	16



【要約】

本研究は、幼児のイメージが広がるような絵の具や壁紙、廃品の素材等を使った造形遊びにおいて、幼児の興味関心に即した環境構成と、幼児の思いに寄り添った援助を工夫し、好奇心や探究心を高め、豊かな感性を育むことを試みるものである。

キーワード □表現 □素材等 □造形遊び □環境構成 □援助の工夫 □好奇心 □探究心

I テーマ設定理由

近年、核家族化、地域社会とのつながりの希薄化が進み、子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら互いに影響し合って活動する機会が減ってきている。また、幼児を取り巻く社会環境が大きく変化したことでテレビゲームや動画サイト等、一人遊びが増え、友達や家族と身近な素材や道具を使った造形遊びや物を見立てて遊ぶ体験が減少し、自分の思いを表現することが苦手な子どもが増えてきた。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下教育・保育要領）解説「表現」において、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と明記されている。幼児が身近な環境と関わる中で、のびのびと表現する楽しさを味わえるよう、幼児の発達に応じた素材等の工夫や造形遊びに関する保育計画を立て、保育教諭が丁寧に援助していくことが求められている。

本学級の幼児の実態として、好きな友達と一緒に同じ遊びをして楽しむ姿やクレヨン、絵の具を使って絵を描いたり、保育教諭とスタンプ遊びを楽しんだりする姿が多く見られる。これらのことを踏まえ、幼児がイメージを広げ、豊かな感性を育むためには、造形遊びを取り入れ、今まで以上に造形遊びが楽しいと思えるような環境構成を工夫していく必要がある。

これまでの私自身の保育を振り返ってみると、一人一人の幼児の思いや願い、欲求に十分寄り添えずにあらかじめ計画された活動を計画通り

に進めることに意識が向かい、幼児が活動に十分関心を持てなかったり、夢中になって遊ぶ時間が不十分になったりすることが多かった。

そこで本研究では、様々な表現の中から、絵の具や壁紙、廃品等を使った感触遊びを中心に、色や形の組み合わせの美しさや面白さに気付き、幼児が「なぜだろう」「もっとやってみたい」と好奇心や探究心が高まるような造形遊びに焦点を当てる。幼児にとって造形遊びとは、全身を使って描いたり作ったりすることで気持ちが解きほぐされ、開放感を味わいながら身体感覚を豊かにするものである。また、自分の気持ちを伝える手段が少ない幼児にとって自分で作った作品を通して友達や保育教諭、保護者等に伝える為の手段として活用することができる。幼児は作品を作っていく中で、今まで体験してきたことを思い出し、自分が経験したことをもとに作品として表現することで、誰かに伝えたいという思いが高まると思われる。

幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画を立て、幼児一人一人の思いや願い、欲求に寄り添い、夢中になって遊べるような経験を積み重ねていけるよう環境構成と援助を工夫する。そうすることで、幼児一人一人がその幼児なりに探究することを保障し、夢中になって素材等と関わって遊ぶようになり、好奇心や探究心が高まり、ひいては、豊かな感性が育まれていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 目指す子ども像

のびのびと造形遊びを楽しみ、イメージを広げながら自分なりの豊かな感性を働かせて、自己発揮できる子

III 研究の目標

幼児のイメージが広がるような造形遊びを通して、幼児の好奇心や探究心を高め、豊かな感性を育むための環境構成と援助の工夫を行う。

IV 研究の仮説

1 基本仮説

幼児のイメージが広がるような絵の具や壁紙、ローラー、廃品の素材等を使った造形遊びを通して、自分の興味を持ったことにじっくりと取り組むことができる環境構成や幼児の思いに寄り添った保育教諭の援助をするこ

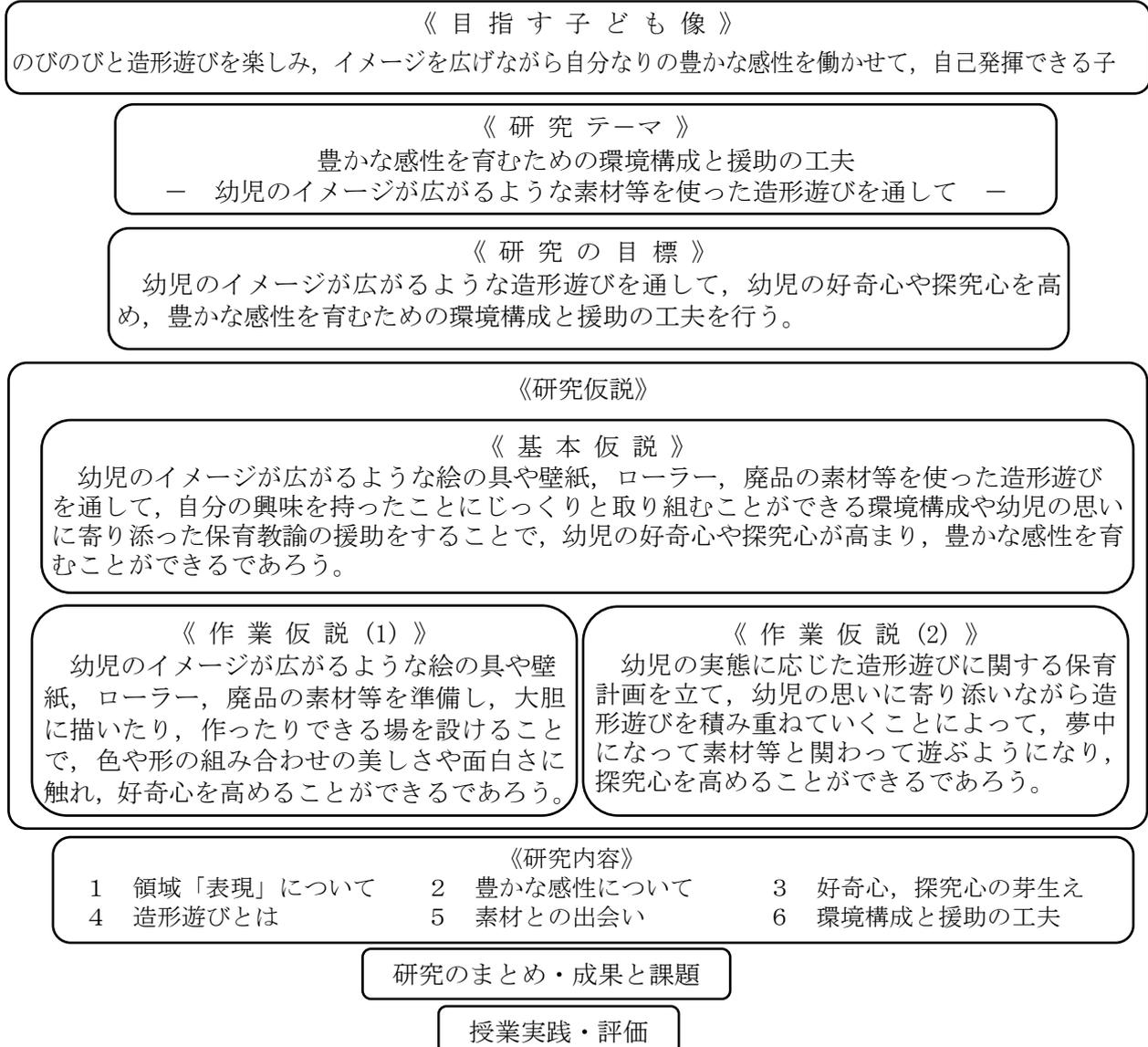
とで、幼児の好奇心や探究心が高まり、豊かな感性を育むことができるであろう。

2 作業仮説

(1) 幼児のイメージが広がるような絵の具や壁紙、ローラー、廃品の素材等を準備し、大胆に描いたり、作ったりできる場を設けることで、色や形の組み合わせの美しさや面白さに触れ、好奇心を高めることができるであろう。

(2) 幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画を立て、幼児の思いに寄り添いながら造形遊びを積み重ねていくことによって、夢中になって素材等と関わって遊ぶようになり、探究心を高めることができるであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 領域「表現」について

(1) 「表現」とは

幼児は、日々の生活の中で心揺さぶられる出来事に出会い、発見したことや気付いたことを物や体、言葉を使って表現している。花原（2017）によると「表現」は、「自分が感じたり思ったりしたことを、身振りや言葉など様々な方法や手段を用いて、自分以外の他者にも感じられるような形に置きかえる活動である。」とされ、表現するには、「それに先立つイメージが心のなかで蓄えられていることが必要である。」と示されている。幼児は大人に比べて、自分の気持ちを十分に伝える方法や手段が少ないため、「表出」という形で表れることが多い。「表出」は、「表現する自覚や意図がなく、顔の表情、身振りや動作、話や歌などが無意識のうちに表れたもの」とされている。

幼児のまだ「表現」とは言えない気持ちの表れ、「表出」を保育教諭は受け止め、幼児の発達や育ちの特性を理解することが重要になると考える。

(2) 「表現」の意味するもの

幼児の伝えたい、わかってほしいという願いの込められた表現は、受け取る側の判断によって時にわがままに見えたりすることがある。保育教諭は幼児の思いや背景をイメージし、なぜこのような表現をしているのか深く考える必要がある。岡（2015）によると、幼児の「表現」を受け止める際には、幼児の行為や言葉を表面的に捉えるのではなく、行為の背景にある心情や小さな動作などを読み取ることが大切であるとされている。領域「表現」の視点において、その活動が計画通りに進んだかではなく、「幼児にとって」どのような意味を持つのかを保育教諭は考えなくてはならない。つまり、保育教諭の意図に沿わない行為をする幼児自体を「困った子ども」として扱う

のではなく、その幼児なりの興味の示し方や参加したくない理由や思いを認めていくということである。

このような「表現」という視点を持つことで、幼児一人一人を、意思を持った主体的な存在として受け止めていくことができるのではないかと考える。

2 豊かな感性について

(1) 「豊かな感性」とは

豊かな感性とは、教育・保育要領の中で「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」と明記されている。「感性」とは、様々なものや出来事に気付き、感じる事ができる心の動きである。豊かな感性とは、幼児が自分のまわりの様々な世界や身近な環境と十分に関わる中で、美しいものや優れたものに敏感に気付き、感じる事ができる心の動きである。つまり、日常生活の中で、不思議だな、きれいだなと思う心、友達や保育教諭が嬉しい時に一緒に喜んだり相手の気持ちになって物事を考えたりできることなど、友達の考えを受け入れながら新たな発見に気付き、幼児なりに表現している姿を感性が豊かだと捉える（図1）。

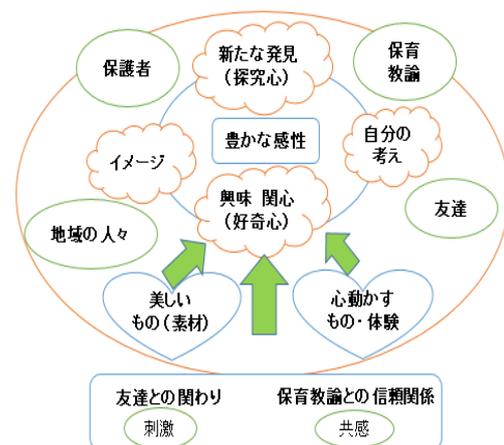


図1 豊かな感性の図

3 好奇心や探究心の芽生え

幼児期はどの幼児も好奇心旺盛で、毎日様々な体験を通して、大人が気付かないような発見を繰り返し楽しんでいる。森上

(2001)は、好奇心とは幼児らしい一つの特徴であり、未知のものや新奇なものに興味関心を持ち、そうした新たな刺激や情報を求める欲求であると述べている。つまり、幼児の身の回りの世界について「おもしろそう」「やってみよう」と思う心を支える大きな原動力となるものであり、幼児がこれらの環境に関わり、豊かな体験ができるよう、保育教諭は意図的、計画的に環境構成することが大切である。例えば、幼児の好奇心を刺激するようなざらざらした触手の壁紙、ローラー、身近な廃品の素材等を準備することで、幼児のイメージを広げ、一人一人が素材等に興味を持って遊ぶことができると思われる。

また「不思議だな」、「どうしてだろう」ということ等があれば、自分が納得するまで物事と向き合い、探究する姿も見られる。幼児が「困ったな」、「どうしよう」、「不思議だな」という出来事に出会った時、保育教諭は温かく見守り、どのようにしたら解決できるのか一緒に仮説を立て、試していくことで学びが深まり、気づきや発見が生まれる。好奇心をもとにして何度も試したり、考えたり、工夫したりすることで、探究する態度が育つであろう。

このことから、様々な素材等を使って遊ぶなかで、自分の考えや新しい発見に気づき、イメージを広げながら作品を作っていくことで豊かな感性が育まれると考える。

4 造形遊びとは

(1) 幼児の造形的な遊びの分類

造形遊びには様々な方法がある。村内(1993)を参考に造形遊びを「感覚的遊び」、「構成遊び」、「材料体験(素材を使った遊び)」の3つの遊びとしてまとめた。

① 感覚的遊び

物を見たり、触ったりして楽しむ等、主に感覚器官を使って楽しむ遊びである。(水遊び、粘土遊び、砂遊び等)。感触

を味わうことができ、幼児の心を解放することが期待できる。

② 構成遊び

積み木、粘土、折り紙、プラモデル、絵を描くことなど、構成したり、創造したりする遊びである(身の回りにある物を積んだり、並べたり、構成したりすることを楽しむ)。幼児にとって夢中になれる遊びであり、イメージを広げることが培われている。

③ 材料体験(素材を使った遊び)

材料には、土、砂、石、粘土、木の枝、木の実、葉、花、流木、貝殻等の自然物や新聞紙、包装紙等の紙類、空き箱、発砲スチロール、プラスチック製品等の日常生活の中で使われなくなった廃材がある。素材には多様な材質、形体、色彩があり、幼児の発達段階や興味や関心に対応した素材の選択ができる。

これらを踏まえ、本研究では3歳児でも楽しめる①感覚的遊び(絵の具を使った造形遊び)を取り上げ、じっくりと素材と関わって遊べるようにする。その中で幼児が見つけた遊び(目的を持った遊び)を③材料体験(素材を使った遊び)の中で道具を使いながら表現し、夢中になって遊ぶことができるよう環境構成と援助を行う。

(2) 幼児にとっての造形遊びとは

石上(2015)によると、幼児にとって「描くこと・つくること」とは、自分の気持ちを形にして伝える手段、つまりコミュニケーションの一つであると述べている。幼児は造形遊びをしていく中で心が解放され、作る楽しさを味わっていると云える。幼児の造形遊びには幼児の「心の今」が表現されており、保育教諭等は幼児の感動する心に寄り添い、その感動をつないでいくことが最も重要

である。

本研究においても、幼児の心の動きをもとに、「今」の表現を保育教諭が大切な育ちとして受け止め、何が育っているのか、何を楽しんだのかを読み取り、幼児の一つの表現として、幼児が表現した作品やその過程を保護者等に写真や掲示物などで知らせていく。今日あった出来事を保護者等に知らせ、幼児と保護者等のコミュニケーションの一つとして、幼児の育ちを共に分かち合える環境をつくっていききたい。

幼児にとって作品は、言葉にならない思いを友達や保育教諭、保護者等に伝えている。受け取る側は作品の仕上がりだけを評価するのではなく、その背景にある幼児の思いや考えをくみ取っていくことが大切である。幼児は作品を通して人と共感したり、思いを伝えたりしながら、他者との関わりを深めていく。視点が違えば、新たな発見も出てくるであろう。自分とは考えが違う人もいることに気づき、自然と他者を受け入れることができるようになると思う。このように作品や掲示物、遊びの経緯を表示していくことで会話が生まれ、言語も豊かになる。また、友達と共通するところや違ったところを見つけ、認め合うことでいろいろな考えに触れ、新たな発見や考えを生み出すきっかけにもなる（図2）。

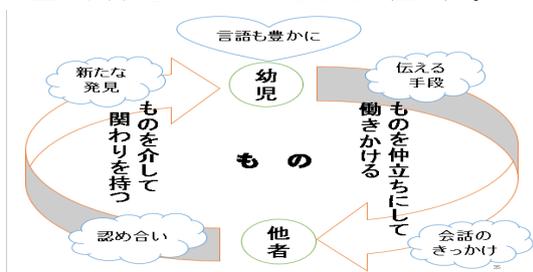


図2 ものを通して育まれるもの

造形遊びは伝える手段が少ない幼児にとって、感性を豊かに育むために最適な活動の一つであると思われる。

5 素材との出会い

(1) 素材及び材料との出会い

造形遊びは「もの」との関わりから生まれる活動である。様々な「素材」（もの）と初めて出会う幼児期だからこそ、ワクワクするような素材を準備し、多様なイメージを広げられるよう工夫していきたい。中井(2019)によると「幼児期に出会う素材は、可塑性に富み、自由に変化するものが幼児の心を開放する。」と述べている。幼児には絵の具・粘土・フィンガーペインティング等の素材と魅力的な出会いをすることで、感触を味わい、形にこだわることなく、のびのびと全身で表現する喜びを感じることができると考える。また、大きさや質感の違う紙、ペットボトルの蓋等、いつも身近にある廃品も幼児にとって新鮮な材料となる。これらの他にも布素材やザラザラした感触の素材等、幼児の心情を表すことができる柔らかい素材を準備することで幼児のイメージを最大限に引き出すことができるであろう。素材を使ってイメージを広げ、表現する喜びを味わうには様々な素材を保育教諭は準備する必要があると言える。

(2) 素材の置き方について

幼児が素材に心を惹かれ、「使ってみたい、何かを作ってみたい」とワクワクドキドキするような環境構成を保育教諭等は工夫する必要がある。様々な素材を種類別に置き、色鮮やかに美しくデザインして置くことで幼児の心を惹きつけ、幼児の創造性を豊かにし、自分のイメージに合った素材を選ぶことができるであろう。魅力的な素材の置き方にも配慮し、「作ってみたい」と思える環境構成を工夫する必要があると考える（図3）。



図3 種類別に置いた素材

6 環境構成と援助の工夫

(1) 環境構成

教育・保育要領には、第1章総則のなかで、「環境を通して行う教育及び保育が基本となる」と記されている。保育教諭が、環境構成を工夫することは、幼児の遊びを深め、幼児同士が学び合い、豊かな経験を積み重ねることにつながる。幼児が主体となり、夢中になって遊ぶことができるよう、保育教諭は造形遊びの見通しを持ち、個々の実態や発達段階に応じた援助を行うことが必要である。その上で、素材等とじっくり関わることができる時間と空間等の確保も重要であると考え。幼児一人一人がのびのびと造形遊びが楽しめるよう、広い空間(遊戯室)を利用し、様々な素材等を準備する。中には広い空間が落ち着かない幼児もいるので、一人でゆっくり過ごせる空間も確保し、環境構成を行っていく。

(2) 保育内容の展開

素材等を使って遊びを展開していく中で、その遊びに意味のある体験ができるよう、意図的かつ計画的に環境構成を行っていく必要がある。花城・田島(2019)は「幼児とのかかわりを通して、その対象の潜在的な学びの価値を引き出すことができる」と述べている。素材等の特性を活かし、どの場面でどのような素材等を提供すれば幼児の興味関心が高まり、意欲へとつながるのかを吟味するための教材研究を行う必要がある。

(3) 造形遊びがより深まっていくために

造形遊びの過程を写真等で掲示することで、幼児はその遊びを振り返ることができ、「もっと〇〇してみたい」と想像を膨らませ、期待を持って遊びを展開していくことができると思われる。また、保護者にも知らせていくことで、幼児とのコミュニケーションの一つとなり、言語が豊かになっていくと考えられる。さらに造形遊びで育ま

れた資質・能力が表出した幼児の姿を、写真や文字、エピソードを添えて個人の保育記録として作成し、教育・保育要領の「幼児教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見た幼児の育ちを細かく伝えていくようにする。

保護者等が造形遊びの良さを実感し、家庭でも造形遊びができる環境を作っていくことによって、幼児の造形遊びへの興味関心がさらに高まると思われる。家庭での遊びが、ものを作る遊びへとつながっていくよう工夫を図る。

(3) 幼児の表現を高めるために、保育教諭が果たす様々な役割

幼児が興味を持っている造形遊びをより楽しい遊びにするために、日々の生活における感動体験を創り出していくことは重要である。幼児の豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするための保育教諭の援助の在り方について中井(2019)の保育者の役割を参考にまとめてみた(表1)。

表1 保育教諭の援助の視点と工夫

<p>【援助の視点】</p> <ul style="list-style-type: none">・いつもと違う非日常的な空間(幼児の作品を壁に飾り、素材を色彩や種類別に置く、ICT機器を使って風景等を映し出す等)を創り出すことで表現を誘い出す豊かな生活環境を設定する。・発達に応じた素材や道具を提供する。・作品が完成した時には、どんな思いで作ったのか言葉で伝えられるよう援助し、自分の表現を受け止めてもらう機会を設けることで、表現意欲を高め、幼児なりの表現を育む。・幼児の表現内容を丁寧に読み取り、幼児の自由な発想を引き出していく。 <p>【環境の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none">・幼児がのびのびと表現できるよう、広い空間(場所)を用意し、みんなで造形遊びができるようにする。・幼児のイメージが広がるような素材等を準備し、色彩を意識しながら種類別に置き、「使ってみよう」と思うような素材の置き方を工夫する。・汚れても大丈夫なよう、遊戯室の床全体にビニールシートを敷いておく。

このような役割を保育教諭が行っていくことで、幼児の豊かな感性が育まれていくと考えられる。心が躍動する素材等との出会いを大切に、発見する喜びを仲間と共に分かち合いながら造形遊びができるようしめるよう、援助していく。

Ⅶ 保育実践

1 題材名 『様々な素材等で好きなものを作ってみよう！』

2 ねらい

(1) 様々な素材等を使って友達や保育教諭と一緒にイメージを共有し、作る楽しさを味わう。

3 題材について

(1) 本学級の実態

本学級の幼児の実態として、好きな友達と一緒に同じ遊びをして喜ぶ姿やクレヨンや絵の具を使って絵を描いたり、保育教諭とスタンプ遊びを楽しんだりする幼児が多く見られる。幼児の「もっと作ってみたい」という気持ちを大切に、今まで以上に造形遊びが楽しいと思えるような環境構成や幼児の思いに寄り添った保育教諭の援助、幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画を立て、造形遊びの経験を積み重ねていくことが必要である。

(2) 題材を取り上げた理由

本学級の幼児は絵本や図鑑が好きな幼児が多く、イメージを広げて遊ぶ様子が見られる。また、造形遊びが好きで自らハサミやクレヨンを持ち、作品を作ったり、絵を描いたりする幼児もいる。保護者等のアンケートや園での遊びの様子からものを作って遊ぶ経験が少ないように感じられたので、園でも想像力が育まれるような造形遊びを取り入れ、のびのびと自己発揮できる環境構成の工夫や個に応じた援助の必要があると感じていた。そこで保育教諭の手立てとして体を思いっきり動かし、大胆に描くことができる遊戯室を利用し、幼児のイメージを広げられるような絵の具やローラー、廃品(素材)等を使うことで好奇心や探究心を育み、幼児の思いに耳を傾け、幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画を立て、造形遊びの経験を積み重ねていくことで、豊かな感性を育むことができるのではないかと考え、この題材を取り上げた。

4 豊かな感性を捉える指標

検証保育を行う際に、保育教諭が幼児の姿をどのように捉えるかという具体的な視点を持って保育を行うことにする。そこで保育教諭が造形活動への関わりにおける環境構成と援助の工夫について3つの視点で捉える。

・一人一人にあった身近な素材等を用意することができていたか。	・幼児がのびのびと造形遊びを楽しんでいたか。	・自分なりのイメージを言葉で表し、遊ぶことを楽しんでいたか。
--------------------------------	------------------------	--------------------------------

5 造形遊びに関する保育計画表

検証保育の実践にあたり、下記のような全体計画を立てた(表2)。

表2 造形遊びに関する保育計画表

実践	日程	題材及び調査等	ねらい	活動内容
1	6月	○保護者へ聞き取り調査	・幼児の家庭での実態を調査し、保育実践に活かす。	・保護者への聞き取り調査①
2	12/11	○好きな色をつくってみよう！	・目で色が混ざる不思議さを楽しみ、手と指で絵の具の感触を味わう。 ・大きな壁紙を使って描く開放感を味わう。 ・イメージを膨らませながら、遊ぶ楽しさを味わう。	・違う色の絵の具を混ぜるとどうなるのか試し、色の変化に気付く。 ・壁紙の触り心地を手や足で確認しながら、大胆に描く楽しさを味わう。 ・素材等からイメージを広げ

				て遊ぶ。 ・遊びを振り返り、楽しかったことを発表する。
3	12/12	○ローラーを使って遊んでみよう！	<ul style="list-style-type: none"> ローラーを使って、絵の具でのびやかに描くことを楽しむ。 全身を大きく動かし、大胆に描く楽しさや開放感を味わう。 ローラーで描いた絵が何に見えるのか、見立て遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ローラーも使って大きな壁紙に好きな色をつけて遊ぶ。 ローラーで手に色を付けたり、思いっきり全身を使って線をひいたりして、形・色・手触り・質感などに気付く。 ローラーで絵の具を重ね、壁紙の模様が浮き出てくることを楽しむ。 自分の描いた絵（作品）で遊ぶ。 工夫したことや気付いたことを発表する。
4	12/19 本時	○様々な素材等を使って好きな物を作ってみよう！	<ul style="list-style-type: none"> 友達や保育教諭と一緒にイメージを広げ、のびのびと作る楽しさを味わう。 好きな素材を見つけて遊ぶ中で、幼児が体験してきたことを思い出し、素材を何かに見立てて遊ぶことを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達や保育教諭と一緒に様々な素材を使ってイメージを広げながら、好きなものを作って遊ぶ。 作った作品について保育教諭と一緒にみんなに説明する。 作った作品をみんなで見ると。
5	12/23	○自然物を使ってジュースを作ってみよう！	<ul style="list-style-type: none"> どんな自然素材を使うと色のついたジュースに変わるのか（砂、赤土、ホウセンカの花等）を使って試してみる。 どんな工夫をしたら自分の好きな色が作れるのかみんなを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「もっとジュースを作りたい」との声が多かったので、今度は自然物を使ってジュースを作ってみることになった。 ジュース作ったことのある友達から作り方を教えてもらい、一緒に作って遊ぶ。
6	1/8	○どんな思いで作ったのか、保育教諭に伝えてみよう！	<ul style="list-style-type: none"> 写真を見て、様々な素材等で遊んだこと思い出し、作っている時に感じた気持ちや過程の様子を保育教諭に言葉で伝える喜びを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 写真を見ながらその時に思ったことや考えたことを伝える。
7	1/14～	○保護者へアンケート調査 ○本研究での育ちを作成し、保護者に成長を知らせる。	<ul style="list-style-type: none"> 事前の聞き取り調査と比較し、検証を行う。 家庭への調査を基にその変容や課題について考察する。 素材等で遊んだ時の様子（ドキュメンテーション）を掲示する。 個人の保育記録を作成し、保護者等にもコメントを書いてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートの実施 写真で掲示した「ドキュメンテーション」を保護者等に公開し、造形遊びでの学びの育ちを共有する。 本研究での学びの育ちを個人の保育記録にまとめ、3つの資質・能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）に基づき、育ちが見られたところを保護者等に伝えていく。

6 本時までの取り組み（保育実践2より）

好きな色をつくってみよう！

ねらい：目で見て、色が混ざる不思議さ（視覚）を楽しみ、手と指で絵の具の感触を味わう。
 大きな壁紙を使って描く開放感を味わう。
 イメージを膨らませながら、遊ぶ楽しさを味わう。

活動の展開：最初は素材等とじっくり向き合えるように大きな壁紙と絵の具（赤・青・黄色・白）の4色だけを幼児に提供し、自分で色を作る楽しさが味わえるよう工夫した。

幼児の姿

10の姿からとらえた
幼児の育ちの姿

・指に絵の具が付く感覚や壁紙の質感を楽しみながら描いていたA児。描いていくうちにイメージが広がり、ストーリーを（物語）を作りながら遊ぶ姿が見られた。



「先生、花火をしている時に嵐がきてね、大雨になってしまって、その雨で恐竜が倒れたんだよ！」

・描いていくうちに、花火に見えたようでその後嵐が来て大雨を描いている時には全身を動かしてヒューヒューと嵐になりながら表現していた。空想の世界を十分に味わい、友達の前でも自分の思いを言葉で伝えていた。

・健康な心と体

絵の具に触れて開放感を味わう。

・豊かな感性と表現

自由に伸びやかに自分の表現を楽しむ。

・言葉による伝え合い

みんなの前で発表し、自分の思いを伝える。

・水入れを透明の容器にしたことで、段々色が変わっていく変化を友達と一緒に観察していたB児。次はどんな色になるのか実験していくうちに最後は茶色から色があまり変わらないことを発見していた。



「全部の色を水入れに入れた時、茶色になってね、お茶になったよ！苦くない美味しいお茶だよ。ジュースだと甘くて飲めない人もいるけど、お茶ならみんな飲めるからお茶を作ってみみんなにあげたいの。」

・茶色からお茶を想像したB児。祖父母と過ごす時間が長いため、甘い飲み物が苦手なおばあちゃんでも飲めるお茶を作ったことを保育教諭にお話していた。

・協同性

友達と一緒に色水の変化を楽しむ。

・自立心

どの色を混ぜたら茶色になるのか試していた。最後はどの色を入れても茶色から変化しないことを発見する。

・思考力の芽生え

誰でも飲めるお茶を作れるといいなと想像しながらお茶を作る。

【次回への遊びのつなぎ】

- ・遊戯室で大きな壁紙と絵の具を使って大胆に描く楽しさを味わえるよう工夫していく中で、幼児が全身を使って生き活きと絵の具で描く姿があったので、次回は遊戯室の床一面を使って、もっとダイナミックに造形遊びができるよう、工夫していきたい。
- ・手が汚れることを拒む幼児がいたので、次回はローラー等の道具を導入し、汚れることが苦手な幼児も楽しめるような工夫をしていきたい。

7 検証保育 「様々な素材等で好きなものを作ってみよう！」

保育指導案

令和元年 12 月 19 日(木) 9:00~10:00

ひよこ組 男児 10 名 女児 10 名 計 20 名

山里 逸子

(1) 本時のねらい

- ・遊びや生活の中で出会ったことや興味・関心をもったことを様々な素材等を使って楽しく表現する。
- ・素材等や道具を使って、色や大きさ、形等を自由に表現する。
- ・自分なりのイメージを言葉で表しながら、遊ぶことを楽しむ。

(2) 活動の流れ

時間	環境の構成	幼児の姿	保育教諭の援助・留意点
8 : 3 0	<ul style="list-style-type: none"> ・汚れることを予想しテーブルの下にビニールシートを敷いておく。 ・様々な素材等や道具を用意し、使いやすいう導線を考えて配置しておく。 ・それぞれのコーナーを作り、落ち着いた雰囲気の中で造形遊びに取り組めるよう、安全面に気を付けながら、環境構成をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水分補給や排泄などを済ませておく。 ・汚れてもいい服装になり、素足になるなど身支度をする。 ・友達と一緒に今日やることをイメージしながら期待を持って話す姿がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・検証保育が始まる前に、幼児が緊張しないよう、参観する先生方が来ることを知らせておく。 ・今日は何をするのか、準備されている環境からワクワク・ドキドキしている幼児がいるので、その気持ちを受けとめる。
9 : 0 0	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の生活の中から一人一人にあった身近な素材等を用意し、遊びが展開できるよう見守っていく。 	<p>遊戯室に集まる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて座る。 ・手遊びをし、全員が集まるのを待つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児と今日やってみたい事を話し合い、意欲が高まるようにする。 ・様々な素材等や道具があることを伝える。
9 : 1 0	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の今まで遊んできた活動の流れや経緯を表示し、イメージしやすいようにする。 ・幼児がイメージを広げ、自分なりに工夫して作ることができるよう、種類を分けて準備しておく。 ・手に取ってみたいと思えるような素材等の置き方を工夫する。 	<p>予定・約束の話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨日までの遊びの流れを振り返り、今日どんなことをして遊びたいか話し合う。遊び方の約束について確認したり、話し合ったりする。 <p>素材置き場を見学する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな素材や道具があるのか、安全に使って遊ぶにはどのようにしたらいいのか、保育教諭から話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に楽しく遊べるよう、事前に注意事項や約束について再確認する。 ・どこで活動したらいいのかわからない幼児には活動場所を伝え、安心して活動できるようにする。 ・どんな素材があるのか、みんなで見学し、素材が置かれている場所を紹介する。
<p>【安全面の配慮】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コードや配線が足に引っかからないよう、ガムテープで留めておく。 ・プロジェクターは触らないよう、幼児に伝えておく。 ・ストローを使う時には事前に穴を空け、色水が吸えないようにしておく。 ・色水は飲めないことを、幼児に伝えておく。 ・はさみを使いたい時には保育教諭に声を掛けるよう伝える。 ・ICT 機器は絶対に触らないよう、伝えておく。 			

<p>9 : 20</p>	<ul style="list-style-type: none"> いつでも手に取って参考にできるよう、恐竜や動物、乗り物の絵本や図鑑を用意しておく。 支援が必要な幼児もいるため、ICT機器を使って遊びの世界を楽しめるような環境を構成する。 なかなか作れずにいる幼児がいるかもしれないので、個別場所を用意し、安心して描いたり作ったりできるような場を作っておく。 できあがった作品を大事にできるようにテーブルに飾っておく。 集まりのベルを流し、気持ちよく集まれるようにする。 	<p>素材探しをする</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が作りたい場所へ行き、好きなものを作る。 自分の好きな物を作る。  <ul style="list-style-type: none"> 素材を使って遊ぶ中で気付いたこと、考えたことを友達や保育教諭に伝える。 友達や保育教諭と一緒に作った物を飾る。 	<ul style="list-style-type: none"> 事前にやりたいと言っていた遊びで使えるような素材を準備し、幼児のイメージが具体的に表現できるようにする。 どんなモノ（作品）を作りたいのか保育教諭も一緒に考え、意欲が高まるようにする。 「どういう風に工夫したらそうなったの？」等とイメージが滲らむような声掛けをする。 幼児の発見や頑張りを認めていく。 幼児が様々な素材を使って、試行錯誤している姿を見守り、必要に応じて声を掛ける。 セロハンテープの使い方など、個々に応じて援助する。 幼児の力量でできないところは補助しながら、作る楽しさやできた喜びが感じられるようにする。 一旦、手を止めて保育教諭の前に集まり、今日の遊びを振り返る。
<p>9 : 50</p>	<ul style="list-style-type: none"> 友達が発表している時には、静かに話を聞けるよう、話をしている幼児がいることを知らせ、気付けるようにしていく。 片付けがしやすいよう素材や道具を入れるカゴを準備しておく。 	<p>本時の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の作ったものを発表する。 友達の発表にも耳を傾ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児のイメージの世界を大切にし、話を傾ける。 幼児一人一人の頑張りを認め、工夫していたところを全体に伝えていく。 楽しかったことや工夫したことを共感し、周りの幼児に伝えていく。 「またやってみたい」と造形遊びに期待をもって取り組めるようにする。 みんなで一緒に元にあった場所に帰すよう声掛けをする。
<p>10 : 00</p>		<p>片付け</p> <ul style="list-style-type: none"> 使った物は元の場所に返す。 	

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）】から検証保育時に見られた育ち

- ・身支度や片付けの方法を知る。（自立心）
- ・友達と一緒に素材で好きな物を作って遊ぶ。（豊かな感性と表現）
- ・友達のしていることを見たり、真似たり、感じたことを共感したりする。（協同性）
- ・作った色水をいろいろな容器に移し替え、試したり工夫したりしている。（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）
- ・できあがった作品を見て喜ぶ。（健康な心と体）
- ・できあがった作品を見て、保育教諭と一緒に自分の思いを伝える。（言葉による伝え合い）

自然物を使ってジュースを作ってみよう！

ねらい：どんな自然素材を使うと色のついたジュースに変わるのか（砂，赤土，ホウセンカの花等）を使って試してみる。

どうしたら自分の好きな色が作れるのかみんなで考える。

活動の展開：保育教諭と一緒に興味を持った作品を作る。

友達や保育教諭と気付いたことや発見したことを楽しむ。

幼児の姿

**10の姿からとらえた
幼児の育ちの姿**

・絵の具でジュースを作った楽しかった C 児。「またジュースを作ってみよう！」と話していたので、今度はお庭にある自然物を使って色水を作ることになった。仲良しの友達がホウセンカの花を使って青紫の色水を作ったことで、C 児もホウセンカの花を使って色水を作ってみることになった。



C 児 「先生、C のは水色になってる！同じ花なのになんで色が違うんだろう…」と不思議そうにしていた。

D 児 「C さん、ホウセンカを入れる前に何か入れていたでしょ？」と聞かれ、

C 児 「そっか。最初に砂と水を入れたから水色になったんだね」と嬉しそうに話していた。



・砂を入れると色が変化することに気付いた C 児。「もっと砂を入れてきれいな水色になるのかやってみる！」と砂と色水を何度も調合し、納得のいく色が出るまで作り続けていた。



苺の綿あめジュース完成～！！

教諭 「保育教諭が何味のジュースを作ったの？」

との問いに

C 児 「綿あめジュースだよ！」と答えていた。

教諭 「どうして綿あめなの？」と聞くと

C 児 「だって水色の綿あめはフワフワしているでしょ、フワフワする苺の甘～いジュースは最高に美味しいよ！」と創造力を膨らませて話をする姿があった。



・友達の刺激になるよう、この日作ったジュースを玄関の前に飾り、みんなに見てもらえるようにした。

・ 社会生活との関わり

園庭で草花や土，砂等を使って色水を使って遊ぶ。

・ 協同性

友達と一緒にジュース作りを楽しむ。

・ 数量，図形，文字等への関心，感覚

色水をコップに分け，量が増えたり減ったりする変化に気付く。

・ 言葉による伝え合い

工夫したところを保育教諭に伝える。

・ 豊かな感性と表現

自分が経験してきたことを思い出し，イメージを膨らませながら，ジュースを作る。

【次回への遊びのつなぎ】

・ C 児の考えた「フワフワの綿あめジュース」に近づけるよう，今度は石鹸水等を使って本物の綿あめのようにフワフワする色水遊びができるよう，教材研究を行い，C 児のイメージを再現できるようにしていきたい。

・ 絵の具を使った色水とは違い，自然物を使ったジュースは数日後，色水が透明になっていたのでもその様子に気付かせてあげることができなかった。今度作る時には，なぜ色が透明になったのかまで考えられるよう援助の工夫を行う。

Ⅷ 研究の考察

1 作業仮説(1)の検証

幼児のイメージが広がるような絵の具や壁紙、ローラー、廃品の素材等を準備し、大胆に描いたり、作ったりできる場を設けることで、色や形の組み合わせの美しさや面白さに触れ、好奇心を高めることができるであろう。

(1) 幼児のイメージが広がるような環境の工夫について

① 手だて

幼児の好奇心を高めることができるよう、様々な素材等を用意し、形が似ている物や同じ種類の素材等を整理整頓されたカゴの中に入れて並べ、目でも楽しめるよう、薄い色から濃い色へと色彩を意識しながら素材の置き方を工夫した。また以前に描いたローラー遊びの作品を壁に貼り、ICT 機器を使って風景等を映し出すことで、幼児がワクワクドキドキし、何かを作ってみたくなるような環境構成を行った(図4)。



図4 種類別に置き、色彩を意識した素材

② 結果

素材を手にとって遊んでみたくなるよう、置き方を工夫したことで、ウキウキして友達と何を作るか話し合い、幼児が素材等に興味を示し、意欲的に遊ぶ姿が見られた。また、様々な素材を揃えたことで、幼児が自分のイメージにあった遊びを進めることができた(図5)。



「氷(松ぼっくり)を入れるととっても冷たくなって美味しいんだよ！」

図5 氷を松ぼっくりで表現する幼児の姿

③ 考察

以前作った作品を貼り、ICT 機器を使って風景等を映し出したことや素材を豊富に準備したことで、幼児にとって非日常的な空間となり、幼児の好奇心を刺激し、ワクワクドキドキしながら、「作ってみたい」と思うような環境構成を作ることができたと考える(図6)。素材等の中には幼児にとって危険を伴うものがあるので、幼児に素材等を提供する時には安全に使えるのか見極め、安心して遊べるよう配慮する必要がある。



いつもは違う遊びをしてしまう幼児も自分の好きな素材を見つけ、イメージを膨らませて遊ぶ姿が見られた。

図6 自分で好きな遊びを見つけて遊ぶ姿

(2) 幼児がのびのびと表現する環境の工夫

① 手だて

幼児の発達や実態を考慮し、全身を使って素材等の質感を楽しめるよう、広い遊戯室を利用して地域から提供してもらった壁紙を使い、遊戯室全体にブルーきるよう工夫を行った。

② 結果

指で描くことで壁紙の質感を楽しみながら、絵の具の色が混ざる様子を楽しむ姿が見られた(図7)。また、偶然水入れに入っていた色水がこぼれたことで足でも濡れた感触を楽しむことができた(図8)。



「あっ、紫になった！」
「指で色を塗ると気持ちがいいよ！先生もやってみて」と感触を楽しむ姿が見られた。

図7 指で壁紙の質感を楽しむ幼児の姿



足がぬるぬるして気持ちがいいよ！

図8 ぬるぬるした感触を足で確かめる姿

③ 考察

大きな壁紙を使用することで、全身で絵の具の感触を楽しんだり、ダイナミックに表現したりすることができたと考える。壁紙を使用したことで、破れてしまうことなく、薄く色づいていく様子が幼児の感性を高め、イメージを広げることができたと考える（表3）。

表3 幼児のつぶやき

- ・「絵の具を混ぜたらお芋みたいな色になったよ」
- ・「お芋の畑みたい！」
- ・「今度はお芋のはちみつジュース作りたいな」

2 作業仮説(2)の検証

幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画を立て、幼児の思いに寄り添いながら、造形遊びを積み重ねていくことによって、夢中になって素材等で遊ぶようになり、探究心を高めることができるであろう。

(1) 幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画の工夫

① 手だて

幼児の発達段階に応じて、最初は素材等の数を減らし、幼児がじっくりと素材等と向き合って遊べるよう、計画を立て、実践を行った。

② 結果

幼児が好きな絵の具やローラー、壁紙等を計画的に取り入れたことで、手に付いた絵の具や壁紙の凸凹を触った時の感触を楽しみ、夢中になって遊ぶ姿が見られた。地域から提供してもらった壁紙や小学校から借りたローラーを利用することで、あまり体験することができない遊びを経験することができた。

③ 考察

一度に素材等を沢山提供するのではなく、じっくり素材等と関わって遊ぶ時間を設けたことで、幼児が絵の具や壁紙を触った時に感触を十分に味わうことができたと思われる。

(2) 一人一人の思いに寄り添いながら遊びを進めていくための工夫

① 手だて

造形遊びをしていく中で、一人一人の興味関心のある遊びを一緒に見つけ、どんな物を作ってみたいのか幼児の思いに寄り添いながら一緒に考えていった。

② 結果

保育教諭が幼児一人一人の思いや考えを言葉にし、一緒にやってみたい遊びを見つけていったが、友達の影響や環境構成によって、幼児は日々やりたい遊びが変わっていくことが分かった。また、保育教諭は幼児が何に心を動かしているのか目を凝らして見ることで、どのような思いで作品を仕上げたのか詳しく知ることができた。

③ 考察

保育教諭が造形遊びに関する保育計画をもとに何度も幼児の実態に合わせ、修正していったことで、幼児が自ら遊びを見つけ、造形遊びを楽しむことができたように思われる。保育計画を立てることも重要だが、幼児の「やってみたい」遊びが満足できるよう援助していくことも大切だと感じた。また、幼児一人一人の思いを丁寧に聴いていくことで、幼児の考えていたことや思いに気付くことができた。幼児は今まで体験してきたことを思い出しながら自分なりのイメージを膨らませて遊びを進めていることが分かり、個々の思いを受け止めていくことの大切さを改めて実感した。

(3) 幼児が試したり、確かめたりし、夢中に

なって遊ぶ援助の工夫

① 手だて

少しずつ、素材等を使って遊ぶことに慣れてきたので、今度は全員が自分の好きな素材等を見つけて遊ぶことができるよう、カップや容器、コップや布等、様々な素材を用意し、幼児が何度も試すことができるよう、環境の工夫を行い、保育教諭は幼児の「やってみたい」思いを受け止めながら援助していった（図9）。



図9 試してみたくなるような容器の準備

② 結果

絵の具で作った色水で遊んでいたB児。友達と色水を交換して遊んでいくうちに、色の変化と共に形の違う容器に色水を移し替えると色水の量が変わることに気付いた。様々な容器に色水を入れ、量の変化を観察する姿が見られた（図10）。



違う容器に入れると量が増えたように感じ、何度も移し替えをして実験している様子。

図10 何度も容器を移し替えて色水を入れる姿

また、どのようにすればペットボトルに色水を入れることができるのか、保育教諭と一緒にいろいろな容器に色水を入れ、何度も失敗を繰り返しながら、根気よく試して入れる姿も見られた（図11）。



ペットボトルに自分の作った色水をどうしたらうまく入れることができるのか、何度も試す幼児の姿が見られた。入った時には達成感を味わっていた。

図11 色水をペットボトルに入れる為工夫する幼児の姿

③ 考察

じっくり素材等と関わって遊ぶ時間や様々な素材等を使って遊ぶことができる環境構成を工夫したことで、幼児が試したり、確かめたりするには大変有効だったと考えられる。また、幼児にとって少し難しいことでも、保育教諭が側にいて一緒に考えながらヒントを投げかけたり、励ましたりすることによって、途中で投げ出さず、最後まで頑張ってペットボトルに色水を入れることができたように感じる。また、友達の刺激を受け、じっと色水を移し替える様子を見つめる幼児の姿があり、どのようにしたら入れることができるのか興味を持ち、入った時には自分のことのように一緒に喜び、共感する姿が見られ、協同性の芽生えを見取ることができた。

3 本研究を通して

幼児が豊かな感性を育むためには、造形遊びを通して、一人一人がじっくり素材と関わる時間を確保し、その幼児なりの遊びの過程に保育教諭が寄り添い、理解し、受け止めることが大切であることが分かった。

このような環境構成や援助が家庭においても継続して行われることがさらに重要だと考え、保護者等に対して研究保育の様々な援助や成果を保育記録として伝え、共有してきた。すると、10月と1月に行った保護者等アンケートでは家庭で造形遊びをする幼児が55%増え、TV視聴・ゲーム絵本その他が50%減ったことが分かった（図12）。

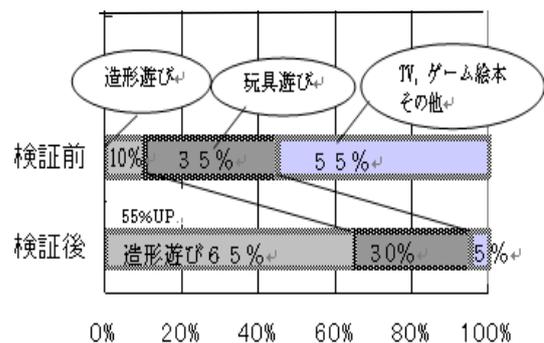


図12 「家庭ではどんな遊びをしますか？」

写真や文字，吹き出しを用いながら，幼児の遊びの過程を可視化し，丁寧に記録していくことで，保育教諭同士が共通理解でき，環境構成や保育計画の見直しになるだけでなく，幼児の成長の歩みを保護者等にも知らせていくことで，保育教諭と保護者等が保育に対する価値観を共有し，家庭でも自分で物を作る楽しさが継続して行われるようになった。今後は，幼児一人一人の学びやストーリーが見やすく，誰でもすぐに活用できる保育記録の工夫について研究していく必要がある。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 幼児のイメージが広がるような環境構成の工夫をしたことで，好奇心を刺激し，一人一人が好き素材等を見つけ，感触遊びや自分なりのイメージを広げて作品を作ることができ，好奇心を高めることができた。
- (2) 保育教諭が幼児の実態に応じた造形遊びに関する保育計画を立て，幼児一人一人の思いに寄り添いながら造形遊びを積み重ねていったことで，幼児が夢中になって素材等と関わり，何度も試したり工夫したりしながら探究して遊ぶことができた。

2 課題

- (1) 幼児が造形遊びを「やりたい」と思った時に，すぐに手に取って遊ぶことができ，いつでも誰でも利用できる空間作りをしていきたい。
- (2) 保育計画を立てた際，実際の幼児の姿と予想される幼児の姿と差異があった

ので，幼児の実態に応じて，多様な関わり方ができるようにしていきたい。

おわりに

幼児がのびのびとイメージを膨らませて自分の思いを表現できる幼児になってほしいという思いで，研究を進めてきました。その中で，日々幼児の想像力や感性の豊かさに触れ，幼児の思いに耳を傾けることの大切さに気付くことができました。幼児は遊びの中で，絶えず考えながら，体験してきたことを思い出し，イメージを膨らませて遊んでいます。言葉に出していないだけで，一人一人が作品に対して思いを抱きながら遊びを進めていることが分かりました。私達保育教諭は，その言葉にならない思いを一つ一つ紡ぎながら言葉にしていくことで幼児の豊かな感性を引き出していくことができるのだと改めて感じました。半年間の研究の中で学んだことや実践をこれからの保育の中で活かし，深めていきたいです。

研究期間中，励まし，ご指導くださいました浦添市教育委員会の平良奈津子指導主事，入所前より事前研修を丁寧にご指導くださいました本研究所の長濱京子所長，仲宗根歩指導主事，井崎重指導主事に深く感謝申し上げます。また，テーマ検討会等で様々な角度からご助言くださいました浦添市教育委員会の諸先生方に心より感謝申し上げます。最後に快く研究所へ送り出してくださいました浦添こども園の松原朝子園長はじめ，いつも温かく声をかけてくださった先生方，半年間の研究を共に支えてくれた研究員の先生方に感謝いたします。本当にありがとうございました。

【主な参考・引用文献】

- ・内閣府 文部科学省 厚生労働省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- ・花原幹夫 編著 (2017) 『保育内容 表現 保育の内容・方法を知る』 新保育ライブラリ 北大路書房
- ・岡健 金澤妙子 編著 (2015) 『演習保育内容 表現』 建帛社
- ・森上史朗 柏女霊峰 編 (2001) 『保育用語辞典』 ミネルヴァ書房
- ・村内哲二 編著 (1993) 『保育内容』 造形表現の指導 建帛社
- ・石上浩美 編著 (2015) 『保育と表現』 嵯峨野書院
- ・中井清津子 著 (2019) 『生活に根ざした3・4・5歳児 かく・つくる・造形遊び』 株式会社サクラクレパス出版部
- ・花城涼子 田島早織 (2018) 「好奇心や探求心をもって物事に取り組む子の育成」平成30年度教育実践研究論文集 第26号 公益財団法人 日本教育公務員弘済会沖縄支部 41ページ

〈小学校 特別活動〉

自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成
—キャリア教育の要である特別活動「学級活動」の実践を通して—



浦添市立 宮城小学校

根間 成美



目次

I	テーマ設定理由	17
II	目指す子ども像	18
III	研究の目標	18
IV	研究仮説	18
1	基本仮説	18
2	作業仮説	18
V	研究構想図	18
VI	研究内容	19
1	キャリア教育の要である「学級活動」	19
2	目指す資質・能力における重要な三つの視点	19
3	自己理解を深める振り返りの在り方	20
4	互いのよさや可能性を発揮できる環境づくり	22
VII	授業実践	23
1	検証の計画	23
2	検証授業第1回目	24
3	検証授業第2回目	25
4	検証授業第3回目	26
VIII	研究の考察	27
1	作業仮説(1)の検証	27
2	作業仮説(2)の検証	28
3	本研究を通して	31
IX	研究の成果と課題	32
1	成果	32
2	課題	32
	おわりに	32
	主な参考・引用文献	32



自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成
—キャリア教育の要である特別活動「学級活動」の実践を通して—

浦添市立宮城小学校 根間 成美

【要 約】

本研究は、キャリア教育の要である特別活動の中でも、その中核となる「学級活動」を通して研究を行う。児童自らが目指す資質・能力における三つの視点を意識化し、自己理解を深める継続した実践を通して、次なる課題解決に向かって互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成を目指したものである。

キーワード □自己理解を深める □互いのよさや可能性を発揮できる

□キャリア教育の要である特別活動 □人間関係形成 □社会参画 □自己実現

I テーマ設定理由

現在の日本では、生産年齢の減少、グローバル化の進展等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測困難な時代となっている。複雑で変化の激しい社会を生き抜くためには、変化に主体的に関わり、自ら考え、互いのよさや可能性を発揮しながら、一人一人がよりよく生きるための「社会で生きて働く力」を育成していく必要がある。学校は、今を生きる児童にとって、「未来の社会に向けた準備段階としての場」であると同時に、「毎日の生活を築き上げていく場」でもある（中央教育審議会答申，2016）。将来、「社会で生きて働く力」を育むために、学校で学ぶことと社会との接続を意識したキャリア教育の視点は、重要なものであるといえる。

小学校学習指導要領解説総則編(2018)(以降、解説総則編)において、特別活動が学校教育全体を通して行う「キャリア教育の要」となることが示された。新設された学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」では、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うことが求められており、一人一人のキャリア形成と特別活動との関連がより明確になってきている。

特別活動の中核となる学級活動において、私自身の実践を振り返ってみると、これまでよりよい学級づくりに向け、計画して話し合い、実践をして振り返るといった学習過程を積み重ねてきた。その結果、児童が学級のために自分に出来

ることはないか考え、行動する姿が見られるようになってきた。しかし、目的意識の差がみられ、振り返りから次の課題解決に向けた実践へとつながっていかないことも多かった。それは、実践において児童自身が目指す資質・能力を意識した取組になっておらず、活動の見通しを持って振り返ることができていなかったためだと考えられる。そこで、目指す資質・能力と実践とを関連づけ、今の学びと働くことや将来をつなぐことで、児童は自己の将来を意識しながら実践を自分事として捉えることができるようにする。そのことにより、見通しを持って振り返ることができ、実践と実践とのつながりを意識して自己理解を深めることができる。また、実践の過程において、児童が自らの学びを振り返り、価値づけ、意味づけることや互いに共有し合うことができるように教師が児童一人一人の学びを的確に見取り、つなぐためのフィードバックを重視していく。このような学びをつなぐフィードバックの工夫をすることで、児童自身が主体的に課題と向き合い、互いのよさや可能性を生かしながら次なる課題解決へとつなげることができるのではないかと考える。

そこで、本研究では、特別活動の中核となる「学級活動」を通して、実践と実践をつなぎ、児童自身が、目指す資質・能力を意識化することを目指す。さらに、児童が課題を見だし、主体的に課題解決に向かって取り組むことができる環境づくりを工夫する。そのことにより、児童が自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮し、多様な他者と協働しながらこれからの社会を生き抜いていくことにつながると考え、本テーマを設定した。

II 目指す子ども像

- 1 自分や他者のよさや可能性に気付き、互いに認め合うことのできる児童
- 2 互いに協働して実践する中で、自己の課題解決に向かって主体的に社会参画することができる児童

III 研究の目標

実践と実践をつなぎ、目指す資質・能力を意識化することや、課題解決に向かって主体的に取り組むことができる環境づくりの工夫をすることで、自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成を目指す。

IV 研究仮説

- 1 基本仮説
キャリア教育の要である特別活動における「学級活動」での実践において、目指す資質・

能力における三つの視点を意識化し、自己理解を深める継続した実践を通して、次なる課題解決に向かって互いのよさや可能性を発揮できる児童を育成することができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 一連の学習過程において、目指す資質・能力における三つの視点を意識した振り返りカードを活用することで、自己の成長や変容を自覚し、自己理解を深めることができるであろう。
- (2) 実践と実践への新たな過程において、学びをつなぐフィードバックの工夫をすることで、自己の課題改善につながる課題を見だし、互いのよさや可能性を生かして主体的に解決しようとするすることができるであろう。

V 研究構想図

《 目指す子ども像 》

- 1 自分や他者のよさや可能性に気付き、互いに認め合うことのできる児童
- 2 互いに協働して実践する中で、自己の課題解決に向かって主体的に社会参画することができる児童

《 研究テーマ 》

自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成
ーキャリア教育の要である特別活動「学級活動」の実践を通してー

《 研究の目標 》

実践と実践をつなぎ、目指す資質・能力を意識化することや、課題解決に向かって主体的に取り組むことができる環境づくりの工夫をすることで、自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成を目指す。

《 研究仮説 》

《 基本仮説 》

キャリア教育の要である特別活動における「学級活動」での実践において、目指す資質・能力における三つの視点を意識化し、自己理解を深める継続した実践を通して、次なる課題解決に向かって互いのよさや可能性を発揮できる児童を育成することができるであろう。

《 作業仮説 (1) 》

一連の学習過程において、目指す資質・能力における三つの視点を意識した振り返りカードを活用することで、自己の成長や変容を自覚し、自己理解を深めることができるであろう。

《 作業仮説 (2) 》

実践と実践への新たな過程において、学びをつなぐフィードバックの工夫をすることで、自己の課題改善につながる課題を見だし、互いのよさや可能性を生かして主体的に解決しようとすることができるであろう。

《 研究内容 》

- 1 キャリア教育の要である「学級活動」
- 2 目指す資質・能力における重要な三つの視点
- 3 自己理解を深める振り返りの在り方
- 4 互いのよさや可能性を発揮できる環境づくり

授業実践・評価

研究のまとめ・成果と課題

VI 研究内容

1 キャリア教育の要である「学級活動」

小学校学習指導要領解説特別活動編（2018）（以降、解説特活編）の中で、特別活動とは、「身近な社会である学校において各教科等で育成した資質・能力について、実践的な活動を通して社会生活に生きて働く汎用的な力として育成する教育活動」と示されている。特別活動は、各教科の見方・考え方を総合的に働かせながら、自己及び集団や社会の問題を捉え、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己実現に向けた実践に結び付けることで、社会生活において重要な働きをする。

一方、キャリア教育とは、「一人一人の社会的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。解説総則編において、キャリア教育を効果的に展開するためには、特別活動の学級活動を要としながら、学校の教育活動全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取組が重要になると示され、キャリア教育と特別活動の関連がより明確になった。特に、学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」は、児童にとってこれからの学びや自己の生き方を見通し、これまでの活動を振り返るなど、教育活動全体の取組を自己の将来や社会づくりにつなげていくための「今」の学びと「将来」をつなぐ役割を果たす。

しかし、安部(2019)は、「学級活動(3)で特定の実践を行うことのみがキャリア教育ではない。キャリア教育は学校教育全体で行うことを前提に、学級活動(1)を基盤とした特別活動における多様な集団活動を通し、多様な他者と関わったり、学級・学校生活の中で役割を果たしたり、振り返りを次の課題解決に生かしたりすることで、子供たちは自己理解を深め、よりよい自分づくりについて考えることができるようになる」と指摘している。

このことから、学級活動(3)と学級活動(1)は、互いに関連し合いながら資質・能力が育まれるものであるといえる。

2 目指す資質・能力における重要な三つの視点 (1) 資質・能力を育むための学習過程

学級活動を通して育成を目指す資質・能力は、「①問題の発見・確認、②解決方法等の話し合い、③解決方法の決定、④決めたことの実践、⑤振り返り」といった基本的な学習過程の中で育まれるということが解説特活編の中で示されている(図1)。

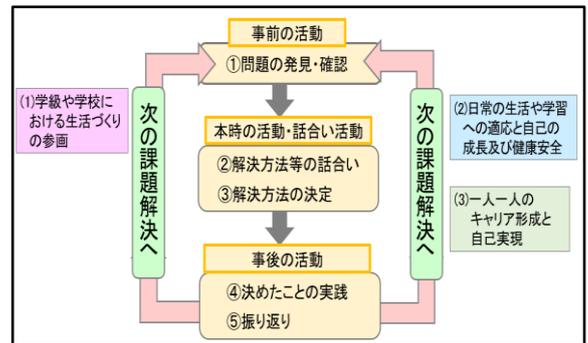


図1 学級活動(1)と(2)(3)の学習過程

しかし、杉田(2019)は「なすことによって学ぶ」を方法原理にしている特別活動は、単に活動するだけでは児童の資質・能力を十分に育成することはできないと指摘している。

特に、学習過程の中でも「振り返り」から「次の課題解決へ」においては、一連の学習過程における取組を振り返り、自己を見つめ直すことができ、実践と実践をつなぐことのできる重要な過程であると考えられる。この過程において、自分を客観的に見つめ、新たな学習や生活の意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることで、継続した学びを積み重ねることができる。

このことから、学習過程を単に繰り返すだけではなく、これまでの実践を振り返って成果や課題を明らかにし、その課題を自分たちで見だし、次なる課題解決に向かうという学習過程を積み重ねる中で資質・能力を育成できるようにすることが大切であると考えられる。児童にどのような資質・

能力を育みたいのかを大事にしながら、児童が新たな価値を創造的に生み出していくことができるようにしていきたい。

- (2) 目指す資質・能力における三つの視点
学級活動で育成を目指す資質・能力として、解説特活編では、次のように例示されている(表1)。

表1 学級活動で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	学級における集団活動に進んで参画することや意識的に健康で安全な生活を送ろうとするなどの意義について理解するとともに、そのために必要となることを理解し身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	学級や自己の生活、人間関係をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	学級における集団活動を通して身に付けたことを生かして、人間関係をよりよく形成し、他者と協働して集団や自己の課題を解決するとともに、将来の生き方を描き、その実現に向けて、日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。

さらに、目指す資質・能力に関わって、それらを育成する学習過程において重要な意味を持つ三つの視点(人間関係形成、社会参画、自己実現)が示された。本研究では、この三つの視点をそれぞれ記号化し、様々な場面で活用していくことにする(表2)。

表2 目指す資質・能力における三つの視点

視点	記号	内容
人間関係形成	♡	集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点
社会参画	◇	よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点
自己実現	☆	集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点

児童は、その時々の「なりたい自分」に近づこうと努力すると同時に、多様な他者とよりよくかかわろうとし、さらには所属する集団の一員としての役割を果たそうとすることから、この三つの視点は、密接に関連しており、明確に区別されるものではなく、学習過程のそれぞれの場面で適切に発揮できるようにしていく。

さらに、安部(2019)は特別活動で育成を目指す資質・能力の三つの視点は、キャリア教育が育成を目指す基礎的・汎用的能力(「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」と軌を一にしており、従前からこの三つの視点の資質・能力を育成してきた特別活動は、キャリア教育の中心的な役割を果たしてきたと指摘している。

そこで、本研究では、目指す資質・能力における三つの視点を照らし合わせ、次のように関連づけることにした(表3)。

表3 目指す資質・能力と三つの視点との関連

知識及び技能	♡多様な他者と協働する ◇合意形成する ☆意思決定する	意義の理解とその方法
思考力、判断力、表現力等	♡互いのよさや可能性を生かす関係づくり ◇課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図る ☆自己の在り方・生き方を考え、意思決定する	
学びに向かう力、人間性等	♡人間関係をよりよいものにしてしようとする ◇日常生活をよりよいものにしてしようとする ☆自己のよさや可能性を発揮しようとする	

このように、目指す資質・能力を人間関係形成(他者)・社会参画(社会)・自己実現(自己)とのかかわりの視点で考えることで、より明確に捉えることができる。そうすることで、学級活動には(1)や(2)、(3)と特質の違いはあるものの、実践と実践とのつながりが見えやすくなり、学びの連続性を実感することができる。

本研究では、以上のように目指す資質・能力を育成するために、三つの視点と資質・能力を関連づけ、集団や自己の課題の解決を図る学級活動の実践に取り組んでいく。

3 自己理解を深める振り返りの在り方

小学校学習指導要領(2018)では、「学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげた

り、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」と示されている。さらに、文部科学省が示した「キャリア・パスポート」例示資料等(2019)において、特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について、学びのプロセスを記述し、振り返ることができるポートフォリオ的な教材「キャリア・パスポート」を作成し、活用することが求められている。この中で、「キャリア・パスポート」の目的について次のように示されている(表4)。

表4 キャリア・パスポートの目的

小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。教師にとっては、その記述をもとに対話的にかかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの。

杉田(2019)は、キャリア・パスポートの取組においては、振り返りを重視しており、児童一人一人の的確な自己認識をすることからスタートするという点が特徴であると指摘している。さらに、その目的として活動を振り返ることや、それらを蓄積することを手段として主体的に学びに向かう力を育み、児童一人一人の自己実現につなげていくことを示している。また、その活用方法として、①児童が自分の成長を実感することができる、②互いの頑張りを交流できるという2つを挙げている。

本研究では、このキャリア・パスポートの目的と活用方法を生かして、自己理解を深める振り返りカードを作成して活用する。特に、事前から本時、事後における学びの変容を自覚することができるよう、学びのプロセスを大切に実践していく。

しかし、特別活動指導資料(2019)において、「一連の活動となるようにするために、各活動を振り返る視点が大切」だと示されている。つまり、学びをただ振り返るのではなく、視点を持って振り返ることが重要となる。そこで、目指す資質・能力における三つの視点「人

間関係形成」「社会参画」「自己実現」を振り返る視点とする。学級活動(1)(2)(3)の目指す資質・能力はそれぞれ異なるが、共通する三つの視点をもとに振り返ることができる。また、児童も教師も実践と実践とのつながりを考える過程において、自己の成長や変容を自覚し、さらに自己理解を深めることができると考える。例えば、資質・能力の一つである「学びに向かう力・人間性等」においては、「人間関係をよりよいものにしようとする(♡)」、「日常生活をよりよいものにしようとする(◇)」、「自己のよさや可能性を發揮しようとする(☆)」という力を高めることができると考える。そのためには、見通しを持った振り返りはもちろんのこと、事前に目標を立てて自分はどうだったかを振り返り、次の課題解決につなげることができるようにしていく必要がある。事前から事後までの学習過程において、三つの視点を意識化し、なりたいた自分を思い描く場面を意図的に準備する必要がある。そこで、事前から事後までの過程における自己理解の深まりを次のように示した(図2)。

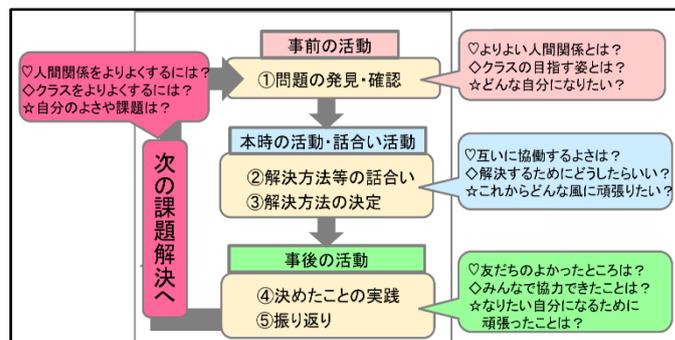


図2 学習過程における振り返りの在り方

その際、児童が気付きや考えを書き留めるだけではなく、教師と児童、児童同士が気付きや考えを共有することも重要である。そうすることで、自分自身のよさに気付き、多面的・多角的に自己理解を深めることができる。

本研究では、振り返りの視点を示し、自己を振り返ることのできる場面をそれぞれ設定し、一連の学習過程を通して自己理解を深めることができるよう実践していく。

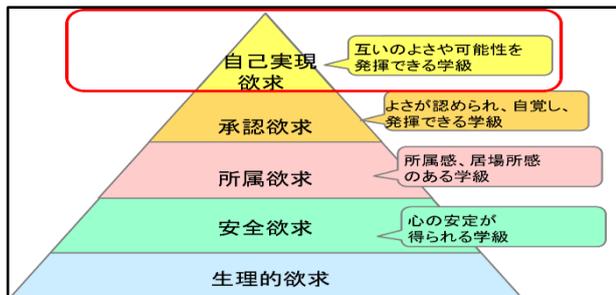
4 互いのよさや可能性を發揮できる環境づくり

(1) 互いのよさや可能性を發揮できる学級

解説特活編では、学級の集団づくりは、児童一人一人のよさや可能性を生かすと同時に、他者の失敗や短所に寛容で共感的な学級の雰囲気醸成するものであり、学級活動を通して、学級経営の充実を図りながら、学びに向かう集団の基盤を形成すると示されている。

杉田(2009)は、マズローの唱える欲求段階説を引用して特別活動の重要性を説明している。本研究では、マズローの唱える欲求段階説と学級活動とのかかわりを関連させて以下のような図を作成した(図3)。

図3 マズローの欲求段階説と学級活動とのかかわり



マズローの唱える自己実現欲求を「互いのよさや可能性を發揮できる学級」と位置づけることにする。まず、学級が児童にとって安心できるものであることが前提となる(安全欲求)。次に、自分の役割があることで自分のよさを發揮することができる(所属欲求)。そして、互いの頑張りを認め合い、価値づけられることで、自分のよさを自覚することができる(承認欲求)。そうすることで、信頼や自信を持って、互いのよさや可能性を發揮できる学級(自己実現欲求)につながると考える。

(2) 学びをつなぐフィードバックの工夫

ジョン・ハッティは、「教育の効果」(2018)で、学力に最も影響を与えるのはフィードバックであることを指摘した。フィードバックは、一連の学習過程や実践と実践をつなぐ過程において、仲間や教師とかわりながら、互いに価値づけ、意味づけ、共有し

合うものである。学びをつなぐフィードバックは、児童のこれまでの学びや今の学びとなりたい自分をつなぐことのできる重要なものであると考える。

そこで、学びをつなぐフィードバックにかかわる以下の取組を行い、互いのよさや可能性を發揮できる児童の育成を目指す

① 実践と実践のつながりの可視化

活動から学んだことを共有し、三つの視点を取り入れた学級のあゆみを掲示する。学びのプロセスが残るような掲示物をもとに実践を振り返ることで、自分の成長を実感し、次の課題につなげることができるようにする。

② なりたい自分を意識した意思決定

児童が主体的に取り組むためには、なりたい自分を意識することが重要だと考える。自己理解の積み重ねが、なりたい自分を意識し、これからの自分にとってどういう意味や価値があるのかを自ら考え、意義や価値について自分の言葉で語れるようになる。なりたい自分を意識した意思決定ができるよう、今の自分を見つめ、これからの学びや生き方を見通すことができるようにする。

③ 互いのよさや頑張りの共有と自覚化

互いのよさや頑張りを共有し、認め合うことで、自分や友達の知らなかったよさに気づき、一人一人の学びの自覚化につながる。そうすることで、児童相互のよりよい人間関係を育み、児童の自己有用感を高めることができるようにする。

④ 学んだことへの価値づけ

教師が言葉を掛けたり、助言したり、コメントを入れ、学んだことを価値づけていくことで、児童一人一人のよさや可能性を引き出すことができる。そうすることで、児童は自身の学びを自覚し、成長を実感し、次の活動への意欲や実践のつながりを見いだすことができる。

Ⅶ 授業実践

1 検証の計画

	日程	活動の内容	指導上の留意点	目指す児童の姿 (評価方法)	
主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用	実践1 題材 「学校図書館を上手に使おう～調べたいことがあるときは～」				
	事前	12/5	学校図書館の利用についてのアンケートを記述する。	<ul style="list-style-type: none"> 自身の取り組みについて振り返り、主体的に図書館を活用することができるようにする。 	【知識及び技能】 ・これまでの自身の図書館とのかかわりについて考える。 (事前振り返りカード)
	本時	12/10	現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えながら、進んで学習や生活に生かそうと意思決定することができる。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの自身の図書館利用を振り返り、現在及び将来の学習につながることに気付き、主体的に取り組むことができるようにする。 	【思考力・判断力・表現力】 ・自己のよさや課題をもとに、なりたい自分に近づくための意思決定をしている。 (話し合い・振り返りカード)
	事後	12/10 ～ 12/14	自分の立てた目標が達成できたのか適宜振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な振り返る場を設定し、継続した取り組みになるよう助言する。 	【学びに向かう力・人間性等】 ・決めたことの実践に向けて取り組もうとしている。 (観察・振り返り)
		12/16	自己を見つめ、これまでの取組を振り返り、よさや新たな課題を出し合い、共有する。	<ul style="list-style-type: none"> 学習したことを振り返り、これまでの取組が将来の自己実現へとつながっていることを確認する。 	【学びに向かう力・人間性等】 ・これまでの取組を振り返り、図書館とのかかわりを考える。 (事後振り返りカード)
学級や学校における生活上の諸問題の解決	実践2 議題 「ステキな先輩になるぞ！1年生とのSUNSUN交流会をしよう」 ◆計画委員会 ◇全員				
	事前	12/13	<ul style="list-style-type: none"> ◆議題を選定する。 ◆提案理由や話し合いの柱を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 本取組が何のために行うのか、全員が共有できるように①クラスの現状(課題)②課題の改善策、③目指すクラスの姿の視点を確認する。 	【知識及び技能】 ・計画委員会の役割や話し合い活動の準備の仕方など、進め方を理解している。 (観察、活動計画書)
		12/16	◇学級会の議題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 選定した議題について全員に知らせて承認を得る。 	【知識及び技能】 ・議題の意義を確認し、目指す姿に向けてこれからみんなで協働して実践していくことを理解する。(観察)
		12/17	◇学級会ノートに自分の考えを記入する。	<ul style="list-style-type: none"> 提案理由を踏まえた自分の考えになっているのか確認するよう助言する。 	【思考力・判断力・表現力】 ・提案理由や条件に合った内容を考え、学級会ノートに書いている。 (学級会ノート)
		12/18	◇ステキな先輩とは、どんな先輩なのか、集会で目指す姿について考える。	<ul style="list-style-type: none"> どんな先輩になりたいのか、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点を確認する。 	【思考力・判断力・表現力】 ・これまでの自分を振り返り、ステキな先輩を目指して、どんな集会の内容がよいか考えている。 (発言・事前振り返りカード)
		12/18	◆全員の学級会ノートを確認して話し合いの準備や仕事内容の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> 児童のワークシートをもとに比較・分類する。 学級会の進行がうまくいくように、話し合いの流れを確認する。 	【知識及び技能】 ・話し合うべきことや計画委員としての役割を理解している。 (観察、活動計画書)
本時	12/19	「1年生とのSUNSUN交流会をしよう」 ◇議題こそって話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 1年生との交流会が、①安全、②楽しく、③仲良くできる内容になっているのか提案理由や三つの視点を確認する。 	【思考力・判断力・表現力】 ・提案理由や条件に合った内容を考え、合意形成を図ろうとしている。 (観察、振り返りカード)	

	事後	12/20 ～ 12/23	◇係ごとに、具体的な活動計画を立てて協力して準備をする。	・協力して活動できるように、役割分担を再確認する。	【学びに向かう力・人間性等】 ・決めたことの実践に向けて進んで取り組もうとしている。(観察)
		12/24	◇一年生との交流会をする。	・集会のねらいを確認して、協力して実践できるように声をかける。	【学びに向かう力・人間性等】 ・集会のねらいを意識して、協働して取り組もうとしている。(観察)
		12/25	◇交流会の振り返りをする。	・自分のよさや互いのよさを自覚できるように、これまでの集会活動への取組を三つの視点をもとに振り返る。	【学びに向かう力・人間性等】 ・一年生との交流会における自他のよさの振り返りをもとに、次の活動に生かそうとしている。(事後振り返りカード)
主体的な学習態度の形成と学校図書館等の利用	実践3 題材「家での学習を見直そう～短い時間でもこつこつと～」				
	事前	1/9	家庭学習についてのアンケートを記述する。	・これまでの自身の家庭学習への取組を振り返ることができるよう、自分の言葉で記述できるようにする。	【知識及び技能】 ・これまでの自身の家庭学習とのかかわりについて考える。(事前振り返りカード)
	本時	1/14 検証3	現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えながら、進んで学習や生活に生かそうと意思決定することができる。	・これまでの自身の家庭学習を振り返り、現在及び将来の学習につながることに気づき、主体的に取り組むことができるようにする。	【思考力・判断力・表現力】 ・自己のよさや課題をもとに、なりたい自分に近づくための意思決定をしている。(話し合い・振り返りカード)
	事後	1/15 ～ 1/20	自分の立てた目標が達成できたのか適宜振り返りをする。	・定期的に取り組む場を設定し、継続した取組がこなせるよう助言する。	【学びに向かう力・人間性等】 ・決めたことの実践に向けて取り組もうとしている。(観察・振り返り)
		1/21	自己を見つめ、これまでの取組を振り返り、よさや新たな課題を出し合い、共有する。	・学習したことを振り返り、これまでの取組が将来の自己実現へとつながっていることを確認する。	【学びに向かう力・人間性等】 ・これまでの取組を振り返り、頑長したことだけでなく、新たな課題に気付く。(事後振り返りカード)

2 検証授業 第1回目 (実施日 2019年12月10日)

(1) 題材「学校図書館を上手に使おう～調べたいことがあるときは～」

学級活動 (3) ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の利用

(2) 本題材のねらい

- ・学校図書館の意義を理解し、主体的に学校図書館を活用しようとする。
- ・これまでの自分を振り返り、現在及び将来とのつながりを考え、自己理解を深めることができる。

(3) 授業の概要

	主な学習内容	○児童の反応	□教師の手だて
導入	1. アンケートの結果を見ながら、自身の図書館利用について振り返る。 2. 話し合いのめあての確認	○図書館に行くとき落ち着く。 ○いろんな世界に出会える。 ○でも、なかなか利用できていない	□アンケートの結果から、良さだけでなく、これまでの自分の課題にも目を向けさせる。
つなぐ	図書館をよりよく利用するためにできることを考えよう。		
展開	3. これまでの自分と学校図書館とのかかわりはどうだったのか振り返る。	○調べるために利用する。 ○6年生みたいに顔や声を想像しながら読むと面白そう。	□自分を振り返ることができるよう、どうして？今の自分は？と他者の意見と比べて聞くことを意識づける。
さぐる	4. 6年生の図書委員の動画を見て、学校図書館の意義を探る。	○6年生みたいに同じ本やシリーズものを読むと、友達とのコミュニケーションにもつながりそう。	

見つける	5. なりたい自分に向かって、どのように利用できるのかグループで話し合う。	○今よりもっと本を読みたい。 ○図書館に行ってから休み時間をする。 ○お友達のオススメの本を聞く。 ○続きを想像しながら読むと、わくわくしそう。 ○友達と一緒に借りると楽しそう。	□これまでの自分を振り返り、どうしたら出来るようになるのか考えさせる。 □振り返りカードをもとに、グループで対話して、何が出来るのか互いに考えを出し合う。
まとめ 決める	6. これからのよりよい取組につながるよう意思決定する。	○目標を決める。 ○返す日は、いつにするのか計画を立てて読む。 ○想像しながら読む。	□何をどのように頑張るのか、見つけたことや友達の話を参考にしながら決める。

3 検証授業 第2回目 (実施日 2019年12月19日)

- (1) 議題「ステキな先輩になるぞ！1年生とのSUNSUN交流会をしよう」
学級活動 (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決
- (2) 本議題のねらい
- ・これまでの自分を振り返り、三つの視点を意識して合意形成を図る。
 - ・ステキな先輩に向かってどのように頑張るのか、なりたい自分に向かって互いのよさや可能性を生かして実践する (図4)。

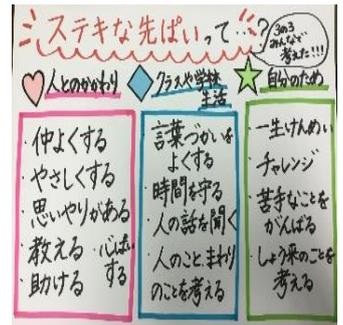


図4 児童の考えをまとめた掲示物

(3) 授業の概要

	主な話合いの順序	○児童の反応	□教師の手立て						
導入	1 はじめの言葉 2 司会グループの紹介 3 議題の確認 4 提案理由やめあての確認条件 ①安全 ②楽しく ③仲良く 決まっていること 交流会：12月24日(水) 5校時 場所：体育館 5 教師の話	議題《ステキな先輩になるぞ！ 1年生とのSUNSUN交流会をしよう》 提案理由 <table border="1"> <thead> <tr> <th>【今の学級】</th> <th>【すること】</th> <th>【目指す姿】</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・クラスの合言葉を意識して取り組んでいるが、相手のことを理解しようとする気持ちが足りない</td> <td>・憧れの6年生のようになれるよう、1年生との交流会をする</td> <td>・1年生と一緒に学んで、相手のことを理解しようとする気持ちが高まり、クラスの合言葉に近づき、憧れの先輩になれる。</td> </tr> </tbody> </table>	【今の学級】	【すること】	【目指す姿】	・クラスの合言葉を意識して取り組んでいるが、相手のことを理解しようとする気持ちが足りない	・憧れの6年生のようになれるよう、1年生との交流会をする	・1年生と一緒に学んで、相手のことを理解しようとする気持ちが高まり、クラスの合言葉に近づき、憧れの先輩になれる。	□めあてをもって自分の役割に臨めるように励まし、自信を持たせる。 □提案理由や条件を確認して、話合いへの意欲付けを図るために、視点を持った話合いができるようにする。
【今の学級】	【すること】	【目指す姿】							
・クラスの合言葉を意識して取り組んでいるが、相手のことを理解しようとする気持ちが足りない	・憧れの6年生のようになれるよう、1年生との交流会をする	・1年生と一緒に学んで、相手のことを理解しようとする気持ちが高まり、クラスの合言葉に近づき、憧れの先輩になれる。							
展開 出し合う 比べ合う まとめる	6 話合い (1)話し合うこと① (図5) 「リレーの内容を決めよう」 	○紙コップタワー ○わなげ ○めいろ ○何でしょうクイズ ○借り物競走 ○エセダイヤさがし ○ボール運び ○新聞運び ○大玉転がし ○手つなぎ ○なわとび ♡わなげだと、教える時に仲良くなれるから人とのかわりもよくなる。 ◇わなげだと、わくわくできるし、ゆずり合いや協力ができる。 ☆言葉づかいがよい自分になりたいから、借り物競走だと、「借りていいですか？」と聞かれたら「いいですよ」と言えるから先輩としていい。	□学級会ノートをもとに、児童の案はあらかじめ整理して掲示しておく。 □どの種目に決まってもいいように、それぞれの意見のよさを理解し、比べ合うことができるように助言する。 □提案理由や条件だけでなく、三つの視点を意識して話し合うことができるように確認する。						

図5 比べ合う場面での児童の様子

出し合う 比べ合う まとめる	(2)話し合うこと② 「どんな役割が必要か」	○メダル係 ○司会係 ○表彰係 ○プログラム係 ○かざりつけ係 ○実況中継係 ○ルール係 ○審判係 ○歌係 ○体そう係 ○工作係	□交流会の会場図を提示して、具体的な役割をイメージできるようにする。
ま と め	7 決まったことの発表 8 話し合いの振り返り 9 先生の話 10 おわりの言葉	○わなげ・借り物競走・新聞でボール運び ○1年生とも仲良く出来て、学級でも仲良くできるよう自分をよりよくしたい。 ○先輩として、よりよい言葉遣いも教えてあげたい。 ○ステキな先輩になれるように頑張る。 ○人とのかわりを高めたいし、自分をよりよくしたいので、みんなで協力したい。	□決まったことを確認し、実践意欲を高める。 □話し合いを通して新たに気付いたことや友達のよさや自分の頑張ったことについて三つの視点をもとに振り返ることができるように助言する。 □これからの実践への見通しを持たせ、事後の活動への意欲が高まるように、児童の頑張りを価値づける。

4 検証授業 第3回目 (実施日 2020年1月14日)

(1) 題材「家での学習を見直そう」

学級活動 (3) ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の利用

(2) 本題材のねらい

- ・家庭学習を通して、学ぶことの意義を理解し、主体的に学ぼうとすることができる。
- ・これまでの自分を振り返り、現在及び将来とのつながりを考え、自己理解を深めることができる。

(3) 展開

	学習内容	○児童の反応	□教師の手だて
導 入 つかむ	1. 事前アンケートから自身の家庭学習についての取組を確認する。 2. 話し合いのめあての確認	○自分のためになる。 ○将来につながる。 ○大切なのは分かっているけど、あまり出来ていない。	□アンケートの結果から、良さだけでなく、これまでの自分の課題にも目を向けさせる。
展 開 さぐる	3. これまでの自分はどのように家庭学習をしてきたのか振り返る。 4. 大谷選手と夜間中学校のおばあさんの話からその意義を探る。	○自分から進んでやっていなかったけど、二人とも自分から進んで学んでいるのがすごい。 ○自分の課題を振り返ることは大切。 ○やり直したら出来るようになる。	□自分を振り返ることができるようどうして? 今の自分は? と他者の意見と比べて聞くことを意識づける。
見 つけ る	5. なりたい自分に向かってどのように家庭学習をするのか話し合う(図6)。 	<p>C1: 家庭学習を自分から出来るようになりたい。今まで習ったことを覚えることができるから。</p> <p>C2: そのためにどんな工夫をするの?</p> <p>○自分から出来るようになりたい。 ○少しでも好きになりたい。 ○そのために時間を決めて取り組む。 ○自分のやり方を見つけるといいね。 ○前向きに取り組む。 ○好きか嫌いかで判断しない。</p>	□これまでの自分を振り返り、どうしたら出来るようになるのか考えさせる。 □振り返りカードをもとに、ペアで考えを伝え合い、助言し合う。
ま と め 決める	6. これからのよりよい取組につながるよう意思決定する。	○自分の悪い所(課題)を振り返る。 ○中途半端こいさないで最後までやる。 ○帰った後すぐに取り組む。	□何をどのように頑張るのか、見つけたことや友達の話参考にしながら決める。

Ⅷ 研究の考察

本研究では、【実践1】学級活動(3)「学校図書館を上手に使おう」、【実践2】学級活動(1)「ステキな先ばいになるぞ！1年生とのSUNSUN 交流会をしよう」、【実践3】学級活動(3)「家での学習を見直そう」の3つの実践を行った。ここでは、3つの実践のつながりを意識しながら、具体的な手だてとその結果及び考察を中心に述べる。

1 作業仮説(1)の検証

一連の学習過程において、目指す資質・能力における三つの視点を意識した振り返りカードを活用することで、自己の成長や変容を自覚し、自己理解を深めることができるであろう。

(1) 今の自分を見つめ、なりたいたい自分に近づく

① 手だて

児童がなりたいたい自分になるためのよりよい意思決定につなげるためには、今の自分を見つめることが重要だと考える。そこで、今の自分を見つめ、なりたいたい自分に近づくことのできるようなバロメーターを活用して実践した(図7)。

図7 今の自分を見つめるバロメーター

② 結果

今の自分を見つめるバロメーターを活用し、今の自分を客観的に見つめ、互いの思いを聞き合うことで、なりたいたい自分を意識した意思決定につなげることができた。このことは、なりたいたい自分を意識して取り組んでいるかの意識調査の結果(3年3組全31名対象、以降同様)から見取ることができる(図8)。

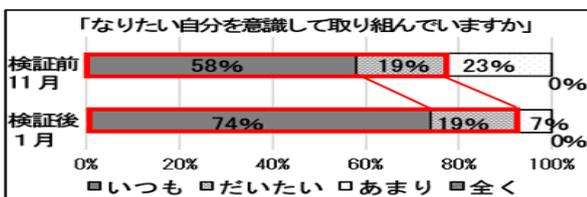


図8 なりたいたい自分の意識調査

③ 考察

児童は、バロメーターを活用しながら、これまでの自分を振り返り、どのくらい出来ているのか、出来るようになるにはどのように頑張ったらよいか、今の自分を深く見つめ、考える姿が見られた。表5のグループでの話し合いでは、バロメーターを見せながら、今の自分を振り返るS1に対して、S3がアドバイスをすることで、S1は、これからどうしたらよいかその解決方法を見つけ、意思決定することにつながった。

表5 今の自分を振り返り話し合うグループでの記録【実践1】

(～前略) 見つける場面 (グループ)
 S1: 今の自分は好きな本を結構読んでるんだけど...好きな本がない時もあってあきらめてしまうことがある。
 S2: あるある。 (友達の考えに共感する) 今の自分を振り返る
 S1: どうすればいいかな?
 S3: 他の本を読んでみたら? 知らない本のよさに気付くかも。
 S1: じゃあ、知らない本があってもおもしろいかもしれないと思って読んでみようかな。 (友達の考えを生かして意思決定につなげる)

また、表6の全体での話し合いでは、S4が「ずっと遊んでいた」とこれまでの自分を伝えると、S5は「自分も同じで全然(出来ていない)」と共感していた。S6の考えを受け、S7が「人とかかわりにつながる」と三つの視点を意識した発言も見られた。今の自分を見つめることで、なりたいたい自分に向けての具体的な取組が明確になり、よりよい意思決定へとつなげることができたと考えられる。今の自分を見つめることは、なりたいたい自分に向けた具体的な取組を意識した意思決定につながる重要なものだといえる。

表6 今の自分を振り返り話し合う全体での記録【実践1】

(～前略) 見つける場面 (全体)
 S4: 図書館の本をたくさん読める自分になりたい。 これまでの自分を振り返る
 T: これまでどうだったの?
 S4: これまでずっと外に遊びに行っていたから、これから休み時間は本を借りてから遊ぶと思う。 友達と自分を比べて、これまでの自分を振り返る
 S5: 自分も同じで今までは出来ていない。全然。 これからの自分を考える
 S6: 友だちと一緒に借りて読むと1人で行くより友だちも面白い本を見つけられるから一石二鳥。 三つの視点を意識
 S7: これは、人とかかわり、コミュニケーションにつながるね。

(2) 三つの視点を意識した振り返りカードの活用

① 手だて

目指す資質・能力における三つの視点である「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を意識した振り返りカードを取り入れ、実践した。それぞれの過程において、身についた力は何だったのか、児童自身が振り返り、自己の成長や変容に気づき、自己理解を深めることができるように実践した。

② 結果

三つの視点を意識した振り返りカードを活用して実践することにより、一連の活動を通して児童が三つの視点を意識し、自己の成長や変容に気づき、自己理解を深めることができた。その結果、取組を通して多くの児童が身につけたい力を意識して取り組んでいることが見えてきた(図9)。

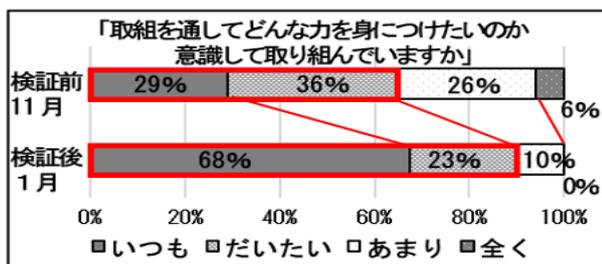


図9 取組に向けての意識調査

さらに、継続して取り組むことで、取り組みを通してどんな力が身についたのか自覚できる児童も増えた(図10)。

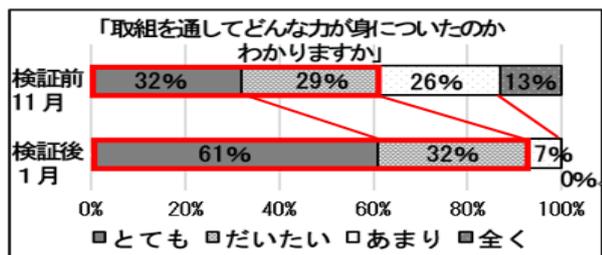


図10 取組を終えての意識調査

③ 考察

事前から事後まで三つの視点を意識化することで、なりたい自分に向かってどうしたらよいのか、身につけたい力を明確にして実践する児童の姿が見られた。表7にある児童の振り返りのように、三つの視点を意識することで、他者や社会、

自己とのかかわりを幅広く考え、自身の成長や変容に気付く振り返りが多く見られた。児童Aは、事後の振り返りにおいて、「自主学习ノートを買うことにした」と記していた。「自分から自主学习をできるようになりたい」と意思決定したことを実践していく中で、友達の自主学习のよさに気づき、さらなる意欲の高まりへとつながり、その後も継続して自主学习に取り組む姿が見られた。このことから、なりたい自分に向けて取り組む中で、三つの視点が相互に関連し合い、自己理解を深めていることが見えてきた。

表7 【実践3】の事後における児童の振り返り

三つの視点	人間関係形成
	社会参画
	自己実現

2 作業仮説(2)の検証

実践と実践への新たな過程において、学びをつなぐフィードバックの工夫をすることで、自己の課題改善につながる課題を見だし、互いのよさや可能性を生かして主体的に解決しようとする事ができるであろう。

(1) 実践と実践をつなげ、課題を見いだす

① 手だて

自己理解を深めることで、自分自身のよさや成長を実感するだけでなく、新たな課題に気付くことができると考える。そこで、次の実践につながるように振り返りをもとに児童同士や教師と児童で対話し、新たな課題を見いだした。

② 結果

【実践1】「学校図書館を上手に使おう」を終え、児童は「図書委員の6年生のようになりたい」「自分たちも後輩から憧れられるような先輩になりたい」と振り返っていた。さらに、児童BやCより「自分たちは3年生として1年生や2年生からステキな先輩だと思われるような取組をしたい」という声が上がった。

そこで、【実践2】「1年生とのSUNSUN交流会」の議題を全体に提案し、「ステキな先輩になるために」という目的意識を明確にして実践に取り組んだ。事前の活動において、ステキな先輩とはどんな先輩なのか、今の自分はどうなのか振り返ることで、なりたい自分に向けて自己の課題を見いだすことができた。

次の取組へとつなげる意識調査においても、取り組んだことを振り返り、よりよくするために次の取組につなげている児童が増えたことがわかる(図11)。

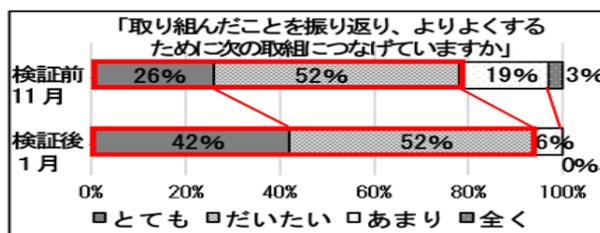


図11 次の取組へとつなげる意識調査

③ 考察

事前の活動において、今の自分を振り返る場面で、児童Dは、ケンカの時に口が悪くなってしまうという言葉遣いが悪い自分に気付き、「自分で自分の気持ちをおさえることができるような自分になりたい」と話していた。今の自分を振り返り、話し合うことにより、課題を見いだすことができたと考えられる。

何のために取り組むのか、その目的を全体で共通確認し、自己の課題と向き合うことで、よりよくするために次の取組につなげることができたと考えられる。

(2) 課題を主体的に解決する

ここでは、3つの実践の中でも特に【実践2】での具体的な取組を中心に述べる。

① 手だて

課題解決に向かって三つの視点を意識し、合意形成を図り、一連の実践において課題解決することを目指した。

② 結果

ア 本時より

学級会において、交流会のリレーの内容について合意形成を図った。しかし、自分のやりたい種目のよさやその根拠を説明する話合いとなってしまう。そこで、三つの視点に目を向けるよう教師が働きかけると、そこから種目のよさではなく、三つの視点を意識した話合いとなった。三つの視点を可視化できるようにした結果、児童は互いの思いや願いに耳を傾け、そのよさを生かした種目にしようと合意形成を図ることができた(図12)。

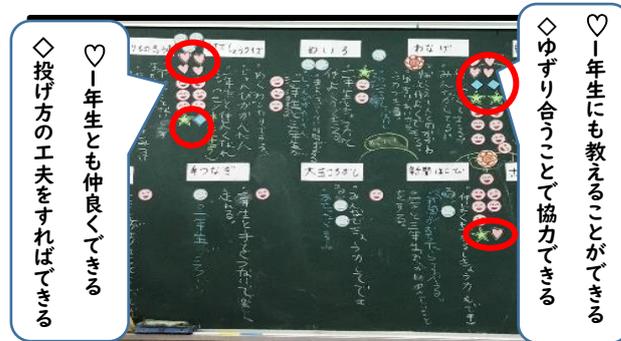


図12 三つの視点を意識した本時の板書

イ 事後より

本時の話合いで、リレーの内容として①わなげ②借り物競走③新聞でボール運びの3つに決まった。自分のよさを生かすことのできる役割分担を行い、実践に向けての準備に取り組んだ。

児童Eは、学級会で「借り物競走が決まっていやでした」と振り返っていた。実践に向けて準備をする中で、「借り物競走のルールの内容を考えたい」とルール係になった。どんな借り物競走だ

ったらみんなが楽しめるのか一生懸命考える姿を見た児童Bは、「私も一緒に考えたい」と児童Eの思いを聞きながら一緒に考えていた。集会後の児童Eの感想には、「借り物競走はやってみると楽しかった」と書かれていた。

共通の目的のもと、一人一人が課題解決に向かって互いのよさや可能性を生かして取り組む姿が見られた交流会となった(図13)。

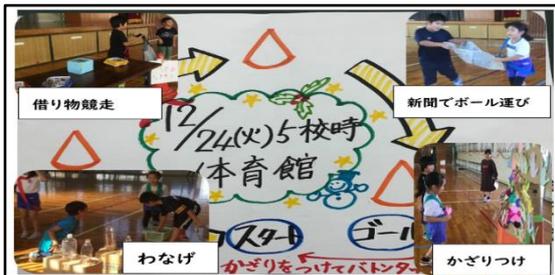


図13 SUNSUN 交流会の様子

事後の振り返りには、「大変だったけど頑張ってたよ良かった」「今よりもよりよい自分になりたい」「一年生のために頑張ったから次は自分の苦手なことにもチャレンジしたい」と次の実践につながる振り返りが多く見られた。【実践3】家での学習を見直そうでも、ステキな先輩を意識し、「1年生にも見せられるような家庭学習にしよう」「勉強でも自慢できる3年生になりたい」という振り返りが見られ、児童の思いの高まりにつながった。

③ 考察

ア 本時より

学級会における合意形成の場面の授業記録である表8を分析すると、S5は事前のワークシートにも「言葉づかいが悪いからよくなりたいたい」という自分の思いを綴っていた。借り物競走をすることで、言葉遣いをよくして仲良くしたいというS5の思いを受け、当初は「持ってくるものが必要だと、忘れていたら出来なくなるからやめた方がいい」

という理由で反対していたS3も「いいね」とつぶやく姿が見られた。仲間の思いを知ることで、その意見の良さにも気付くことができたからだと考える。

このことから、三つの視点を意識することは、条件だけでなく、互いの思いや願いを生かした合意形成につながる重要なものであると考える。

表8 合意形成の場面の授業の記録

(～前略)比べる場面

S1:♡と☆です。人にやさしくなりたいたいから、1年生が入らなくても、わなげだと3年生がコツを教えてあげられるから、人とのかかわりも自分をよりよくするもできるから、わなげがいい。

S2:♡です。借り物競走は、持っている人を探して借りて終わったら返したりするから、友だちになったりできるかもしれないから。

S3いいね。仲間思いを受け、

(～中略) そのよさに気付く場面

S4:わなげで投げ方工夫をすることで、譲り合いをしたり先に投げさせることで♡や☆につながる。

先輩としての自覚を持ちなりたい自分を意識する場面

S5:借り物競走がいいです。「これ借りていいですか?」って言葉づかいをよくして「いいですよ」って言ってあげられる。その後1年生が「さっきありがとう」とか言ってくれたら、人とのかかわりが良くなるかもしれない。先輩としていいことができる。

S6:♡と☆で新聞運びがいいです。わなげで入らない人がいたら悲しくなるけど、新聞運びだと、優しくして1年生と3年生と一緒にできるから。

S7:S6さんに質問です。出来る人が教えてあげたら自分もやさしい気持ちを持てたり、人とのかかわりも良くなると思う。

S1:S6さんに質問です。入らないって言うけど、わなげは入らなくても3年生がアドバイスしてあげれば入るかもしれないよ。

わなげの反対案に対して、その改善策を出し合う場面

イ 事後より

課題解決を目指して、三つの視点を意識して事前から事後まで実践を積み重ねることで、互いのよさや可能性を發揮しながら協働して実践することにつながったと考える。このことは、一人一人の思いや願いを生かして合意形成を図るだけでなく、事後の活動においても、互いの思いや願いを汲み取りながら、さらなる課題解決に向かうことができた児童BやEの姿からもいえる。

特に、事後の活動では課題解決に向かう過程を振り返ることが重要だと考える。児童Fは、事後の振り返りで、役割分担に集中してしまい、ペアの1年生とリレーが出来ず、悔しかったことを話し始めた。すると、頑張ったことだけでなく、もっと自分に出来ることは

なかったのか、自分をより深く見つめ直そうとする児童の姿が見られた。自分の成長を実感するだけでなく、自分の課題にも目を向けることが、次なる実践への意欲につながると考える。

(3) 学びをつなぐフィードバックの工夫

① 手だて

児童がこれまでの取組を振り返り、教師と児童だけでなく、児童同士が互いに価値づけ、意味づけ、共有し合うことで、互いのよさや可能性を発揮できる関係につながるよう実践した。

② 結果

ア 実践と実践のつながりの可視化

実践と実践をつなぐために、事前・本時・事後と三つの視点を意識して、つながりを可視化できる掲示物を作成した。実践の成果や課題をまとめ、児童自身が振り返り、次の実践への課題解決に向けた意欲につながった(図14)。

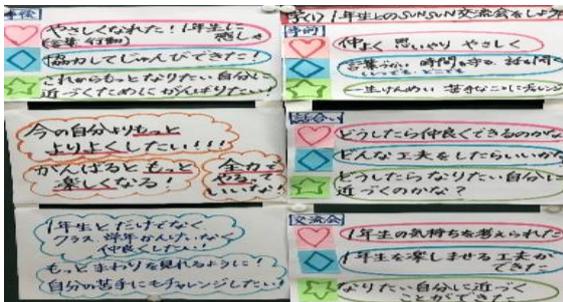


図14 実践のつながりと三つの視点を意識した掲示物

イ なりたい自分を意識した意思決定

「何のために」という目的意識を大切にし、一つ一つの実践において「どんな自分になりたい?」となりたい自分を意識づけた。事後の活動を終え、バロメーターで意思決定した時の自分を振り返り、自分の頑張りや成長を実感する児童の姿が見られた。

ウ 互いのよさや頑張りの共有と自覚化

事後の活動において、互いの役割や意思決定に向けての頑なりに気づき、そのよさを伝え合うことで、互いのよさを実感し、自覚化することができた。

エ 学んだことへの価値づけ

児童のワークシートに教師がコメントを入れ、児童の学びを価値づけ、意味づけた。自身の学びや成長を実感するとともに、次の課題解決に向けた意欲の高まりにつながった。

③ 考察

日頃から自分自身を振り返ることを大切に、学びをつなぐフィードバックを工夫することで、互いのよさや頑なりに認め合い、互いのよさや可能性を発揮できる関係につながったといえる。特に、結果アの実践と実践のつながりを可視化することで、一連の実践だけでなく、実践と実践のつながりを児童自ら見だし、主体的に取り組む姿につながったと考える。また、学級活動(3)の事後の活動は、一人一人の意思決定に基づく取組になるが、互いに共有し、価値づけることで、自分や互いのよさや頑なりに気づき、互いに協働して実践する姿につながっていくということが見えてきた。

3 本研究を通して

本研究は、キャリア教育の要である特別活動における「学級活動」での実践において、児童自身が目指す資質・能力における三つの視点を意識化し、自己理解を深める継続した実践を通して、次なる課題解決に向かって互いのよさや可能性を発揮できる児童を育成することを目的に研究を行った。

「将来のことも大事だけど今頑張ることがとっても大切」「特に、学級会は大切だと思う」「今頑張ることで社会に出てもあきらめずに、ミスしてもくじけずに頑張れるから」と前向きに自分をよりよくしようと取り組む姿が多く見られるようになった。「みんなで協力することが増えた」「相手のことを考えるようになった」と社会参画や人間関係を意識して取り組んできたことが、自己実現意識の高まりにつながったと考える。

学校全体でとったキャリア教育アンケート（「キャリア教育の手引き」2017 参照）における各項目の肯定的な回答の平均を次の表に示した(図 15)。すると、キャリア教育で育成を目指す基礎的・汎用的能力を多くの児童が意識していることが見えてきた。

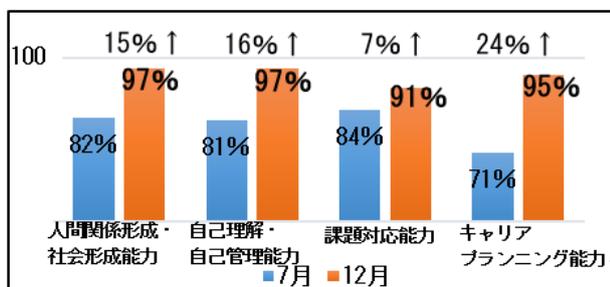


図15 キャリア教育アンケート

以上のことから、キャリア教育の要である「学級活動」の実践において、目指す資質・能力を意識化し、自己理解を深める継続した実践を通して、次なる課題解決に向かって互いのよさや可能性を発揮できる児童の育成につながったと考える。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 目指す資質・能力における三つの視点を記号化し、振り返りカードや学級のあゆみ等で視覚化することで、今の自分を振り返り、身についた力を自覚し、自己理解を深めることにつながった。
- (2) 学びをつなぐフィードバックを可視化し、言語化して価値づけることで、互いのよさや可能性を発揮しながら次なる課題解決へと向かうことができた。

2 課題

- (1) 目指す資質・能力につながる三つの視点による評価の在り方をさらに見いだす。
- (2) 学級活動の実践による学びと特別活動のその他の活動との関連を見いだす。

おわりに

キャリア教育の要である特別活動「学級活動」を通して、自己理解を深め、互いのよさや可能性を発揮できる児童を目指して研究を進めてきました。自分を見つめ、学びを自覚する姿。相手のことを理解しようと話し合う姿。相手の思いや願いを受け入れ、課題解決に向かう姿。振り返りをもとに仲間と対話し、互いのよさを認め合う姿。このような具体的な姿を見取ることを通して、児童一人一人の成長を実感できたことは、私にとって大きな喜びでした。

この研究を通して学んだ半年間は、私自身を見つめ直すことができる貴重な機会となりました。今後は、さらに研鑽を積み、学級が互いのよさや可能性を発揮し、一人一人が輝く場となるよう、児童と共に、学級活動の充実に努めていきます。

研修期間中、また入所前研修から多くのご指導ご助言を頂きました。長濱京子所長をはじめ、教育研究所の先生方、職員の皆様、検証授業や報告書等でご指導ご助言を頂きました浦添市教育委員会の諸先生方へ深く感謝申し上げます。最後に、本研究の機会を与え、快く研究所に送り出して下さった宮城小学校宮國義人校長をはじめ、同校の職員の皆様、そして第48期長期教育研究員として半年間の研修を共に励んだ研究員の先生方に心より感謝申し上げます。

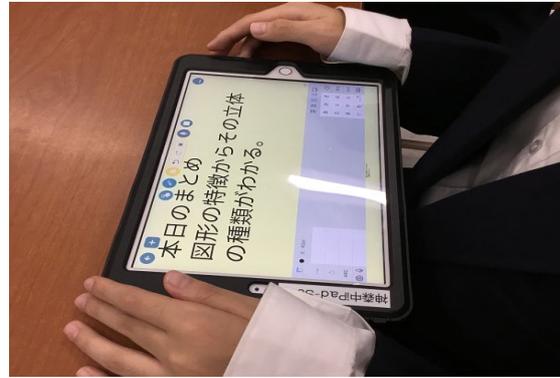
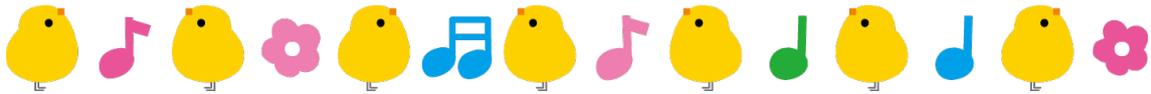
【主な参考・引用文献】

- ・中央教育審議会 文部科学省(2016) “幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- ・文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版社
- ・文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館出版社
- ・安部恭子 (2019) 『新学習指導要領とキャリア教育』『初等教育資料』第977号・2月号 東洋館出版社
- ・杉田洋 (2019) 「「キャリア・パスポート」の導入に向けたQ&A」—「特徴」「活用」「運用」— 『道徳と特別活動』 第36巻第7号・10月号 文溪堂
- ・文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター (2019) 『指導資料 みんなでよりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)』 文溪堂
- ・安部恭子 (2019) 「キャリア教育の要としての特別活動を考える」『初等教育資料』第977号・2月号 東洋館出版社
- ・文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領』 東洋館出版社
- ・文部科学省 (2019) “「キャリア・パスポート」例示資料等について” https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm
- ・杉田洋 (2009) 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化社
- ・ジョン・ハッティ (2018) 『教育の効果』 図書文化社
- ・文部科学省 (2017) 『小学校キャリア教育の手引き(改訂版)』 教育出版

〈 中学校 数 学 〉

数学的な見方・考え方を働かせた思考力，判断力，表現力等の育成

— ICT を活用した数学的活動を通して —



浦添市立 神森中学校

金城 史



目次

I	テーマ設定の理由	33
II	めざす子ども像	34
III	研究の目標	34
IV	研究仮説	34
1	基本仮説	34
2	作業仮説	34
V	研究構想図	35
VI	研究内容	35
1	数学的な思考力、判断力、表現力等について	35
2	数学的な見方・考え方について	35
3	数学的活動について	36
4	ICTの効果的な使い方について	37
VII	授業実践	39
1	単元名	39
2	単元の目標	39
3	単元の評価規準及び評価方法	39
4	単元について	39
5	指導と評価の計画	41
6	本時の学習	41
VIII	研究の考察	43
1	作業仮説(1)の考察	43
2	作業仮説(2)の考察	44
3	本研究を通して	47
IX	研究の成果と課題	48
1	成果	48
2	課題	48
	おわりに	48
	主な参考・引用文献	48



【要約】

思考力、判断力、表現力等を育成するためには、数学的な見方・考え方を働かせながら自分の考えたことを可視化し、お互いで説明し合う必要がある。その手だてとして、数学的活動の中で ICT を効果的に活用し、その成果と課題を検証する。

【キーワード】 思考力、判断力、表現力等 ICT の活用 数学的な見方・考え方 数学的活動

I テーマ設定の理由

子供たちが将来活躍する社会は、厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されており、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や技術革新により、社会構造や雇用環境が大きく変化し、予測困難な時代となっている。このような時代にあつて、学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、情報活用能力が求められている。

学習指導要領総則(2017)には、子どもが身に付けてほしい3つの資質・能力の1つに「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成)」が挙げられた。そのためにも「数学的な見方・考え方を働かせながら「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて授業改善が求められている。

全国学力・学習状況調査(2019)の結果から、本県では「自分の考えを分かりやすく伝える問題」などの正答率が低く、活用力や表現力に課題が見られた。また、学級でのアンケート調査からは、「言葉や数、式を使って説明する」(県57%, 学43%), 「問題の解き方や考え方が分かるように書いている」(県45%, 学58%)の数値が低く、沖縄県の課題と同じ傾向にある。これを改善していくためにも、学習のねらいの達成にむけた交流場面の設定、及び言語活動の充実を図る必要がある。

これまで私の授業を振り返ると、主に教師主導で進めていく傾向にあつた。短時間かつ効率的に問題の解き方を指示し、多くの時間を演習問題に充てることで、知識を問う問題や計算問題における正答率の向上にむすびついてはいたが、数学的な見方・考え方を問う問題になると正答率が下がってしまっていた。そこで、「生徒が自分の考えを表現できること」をめざすために、教師主導の一斉授業からの脱却を図っていききたい。そのためには、数学的活動の中で数学的な見方、考え方を働かせながら、生徒自らが主体的に課題を探究したり解決したりする学習活動を重視していく必要があると考える。

また、ICT 活用については、本校のアンケート結果から「電子黒板やタブレットを使って説明されると分かりやすい」(93%), 「タブレットを使い話し合い活動を行うと分かりやすい」(91%)とあり、有効であることがわかる。ICT 教材を活用し、数学的な見方・考え方を可視化し表現することが容易になり、それらを根拠としてお互いで比較、検討、共有する交流場面を設定することで言語活動を行うことができる。さらに自己解決のみならず、他者との交流によって、さらに見方・考え方を鍛えていくことができる。と考える。

以上のことから、ICT を活用した数学的活動を通して、数学的な見方、考え方を働かせた思考力、判断力、表現力等を育成することができると考え、本テーマを設定した。

II めざす子ども像

- 1 主体的に課題に向き合い、新たな性質や考え方を見いだそうと試行錯誤できる生徒。
- 2 数学的な見方・考え方を働かせながら自分の考えを表現できる生徒。

III 研究の目標

思考力、判断力、表現力等を身につけるために、数学的活動の中で、数学的な見方・考え方を働かせ、生徒が主体的に思考し表現することができる授業の在り方を追究する。

IV 研究の仮説

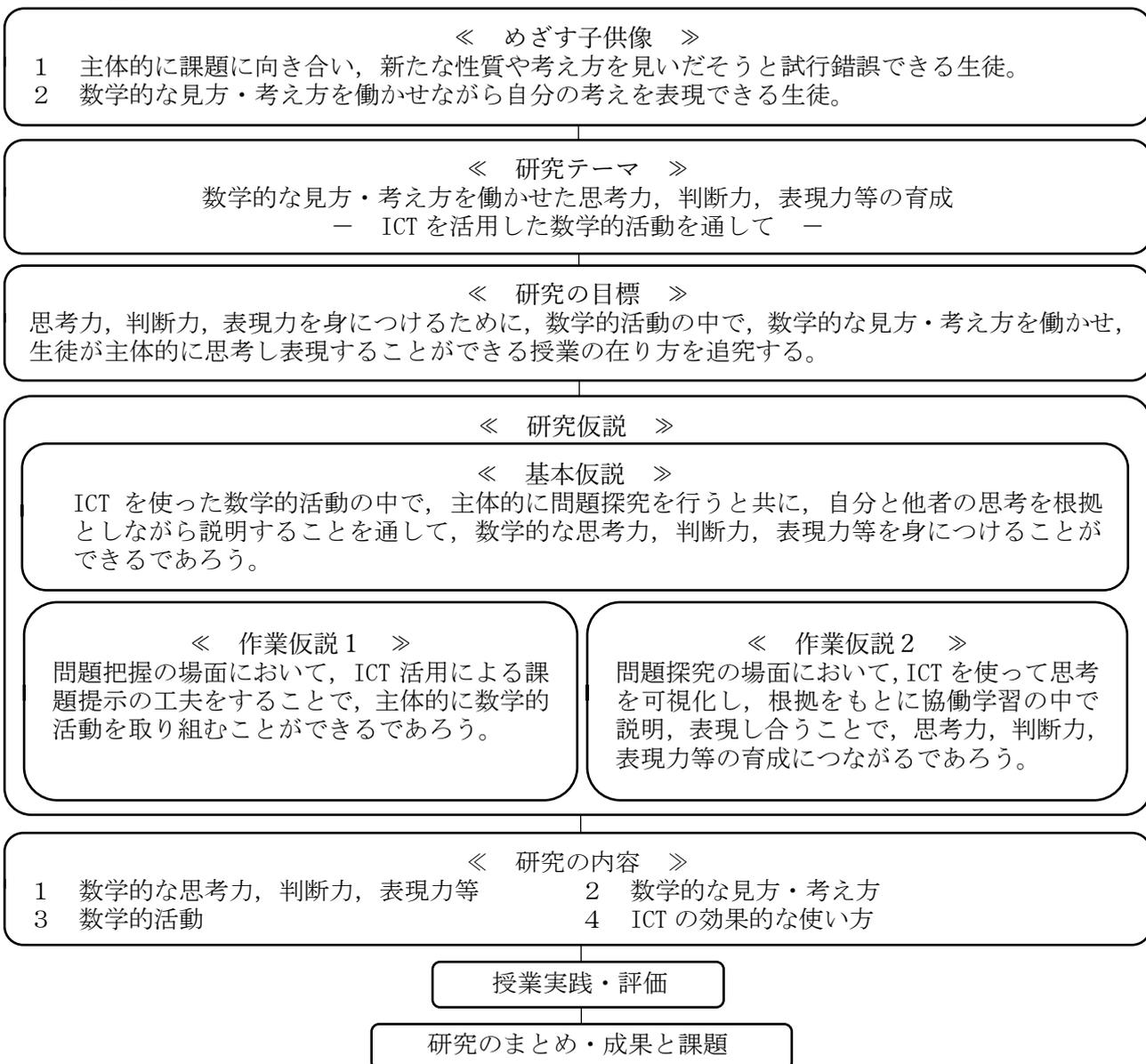
- 1 基本仮説
ICT を使った数学的活動の中で、主体的に問

題探究を行うと共に、自分と他者の思考を根拠としながら説明することを通して、数学的な思考力、判断力、表現力等を身につけることができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 問題把握の場面において、ICT 活用による課題提示の工夫をすることで、主体的に数学的活動に取り組むことができるであろう。
- (2) 問題探究の場面において、ICT を使って思考を可視化し、根拠をもとに協働学習の中で説明、表現し合うことで、思考力、判断力、表現力等の育成につながるであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 数学的な思考力、判断力、表現力等について

(1) 数学的な思考力、判断力、表現力等とは

学校教育法第30条第2項において、思考力、判断力、表現力等について、「知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な力」とある。思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めたい。

中学校学習指導要領解説数学編※以降、解説数学編(2017)では、思考力「(日常の事象を数理的に捉え、)数学を活用して論理的に考察する力」、判断力「(既習の内容を基にして、)数量や図形などの性質を見だし、統合的・発展的に考察する力」、表現力「数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力」と示された(表1)。

表1 数学的な思考力、判断力、表現力等
中学校学習指導要領解説数学編を参考に作成

思考力	数学を活用して論理的に考察する力	・比べる ・生み出す ・関連づける・見通す
判断力	数量や図形などの性質を見だし、統合的・発展的に考察する力	・選ぶ ・確かめる ・分類する・統合する
表現力	数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力	・操作する・説明する ・図、式、言葉で表す

清水(2017)は、「思考したことを表現することで、頭の中が整理され構造化され、より洗練した思考へつなげることができる。」「数学的に表現されたものを観察することにより、発展的な思考に至ることができる。」「思考力、表現力を育てるには、まず、授業で生徒が取り組みたくなるような課題を設定し、その解決に向けてしっかり考えさせることが重要である。」と示している。

(2) 数学的な思考力、判断力、表現力等の見取り

単位授業時間において数学的な思考力、判断力、表現力等を見取るのではなく、単元を通して見取っていききたい(表2)。単位授業時間では、重点的に育成をめざす資質・能力に焦点を当て、授業で取り組む生徒の様子や、ワークシートの

記述、感想、ICTを活用した生徒の思考過程を残していく必要がある。そのためにも、生徒個人に1台のタブレットを活用できるようにし、思考した過程をデータとして蓄積していき、評価につなげることができるようにしたい。

表2 数学的な思考力、判断力、表現力等の例(B領域図形)解説数学編より

第3章 各学年の目標及び内容〔2 第1学年の内容〕B 図形
イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。
(ア) 空間図形を直線や平面図形の運動によって構成されるものと捉えたり、空間図形を平面上に表現して平面上の表現から空間図形の性質を見いだしたりすること。
(イ) 立体図形の表面積や体積の求め方を考察し表現すること。

2 数学的な見方・考え方について

(1) 数学的な見方・考え方とは

解説数学編(2017)では、数学的な見方とは、「事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に着目してその特徴や本質を捉えること」、数学的な考え方とは、「目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、論理的に考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能を関連付けながら、統合的・発展的に考えること」と示している(表3)。

表3 数学的な見方、考え方の例(B領域図形) 解説数学編より

第3章 各学年の目標及び内容〔2 第1学年の内容〕B 図形
イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。
(ア) 図形の性質に着目し、基本的な図形の方法を考察し表現すること。
※「図形の性質に着目し」が見方、「基本的な図形の方法を考察し」が考え方

見方を鍛えることで考え方も鍛えられる相関的な関係であり、深い学びを実現するには「見方・考え方」の育成が欠かせない(図1)。



図1 算数・数学のワーキンググループにおける審議のとりまとめより

また、数学的な見方・考え方を働かせながら知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して探求したりすることにより、生きて働く知識となり、技能の習熟・熟達につながると共に、より広い領域や複雑な事象の問題を解決するための思考力、判断力、表現力等や、自らの学びを振り返って次の学びに向かおうとする力などが育成され、このような学習を通じて、「数学的な見方・考え方」が更に確かで豊かなものとなっていくと考えられる。

こうした「見方・考え方」は、各教科等の学習の中で活用されるだけではなく、社会で生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる。私たちが社会生活の中で、データを見ながら考えたり、アイデアを言葉で表現したりする時には、学校教育を通じて身に付けた「数学的な見方・考え方」や、「言葉による見方・考え方」等が活用されている。

このことから、数学の学びの中で鍛えられた見方・考え方を働かせながら、世の中の様々な物事を理解し思考していくことは、よりよい社会や自らの人生を創り出していくことにつながるであろうと期待される。

(2) 数学的な見方・考え方を育む授業

黒澤(1999)は『『数学的な考え方』とは、子どもの主体的な活動である。なぜならば、創造活動は、誰かの指示や命令によってなされるものではなく、きっかけはどうかあれ、子ども自身の興味・関心によって引き起こされる行為だからである。』と述べている。つまり主体的に取り組むことが数学的な見方・考え方を育むために重要であることが分かる。さらに、「一斉授業の場面で異なる考え方や考えた結果を比較検討する場を意識的に設定することによって、より簡潔に、より明確に、より統合されたものを求める契機が組織的に生まれる」と述べていることから、問題解決の過程で多様な考え方に触れることにより、論理的に考えたり、統合的、発展的に考えたりする力が身についていくということである。

本研究では、事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、それを検証していく過程の中で、具体物や ICT を操作したり、人と対話したりしながら解決する授業の工夫をしていく。

3 数学的活動について

(1) 数学的活動とは

解説数学編(2017)では、数学的活動とは「事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協動的に解決する過程を遂行することである」としている。問題発見・解決の過程を意識し、数学的な問題解決を行うことで、数学的活動の充実が図られると考える。また、「数学的に考える資質・能力を育成する上で、数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して学習を展開することを重視すること」と示された。数学的活動における問題発見・解決の過程には、主として二つの過程を考慮することができる。

- ① 日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察する過程(図2：A1, D1)
- ② 数学の事象から問題を見だし、数学的な推論などによって問題を解決し、解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察する過程(図2：A2, D2)

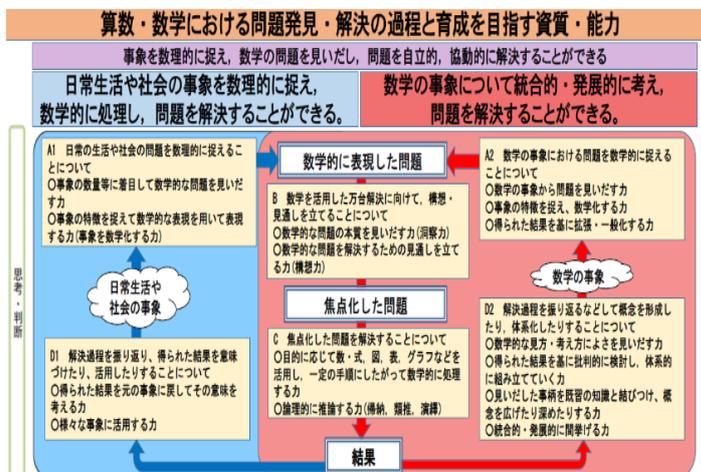


図2 算数・数学における問題発見・解決の過程と育成をめざす資質・能力
これら二つの過程は相互に関わり合って展開される。数学の学習過程においては、これらの二つの過程を意識しつつ、生徒が目的意識をも

って遂行できるようにすることが大切になる。また、各場面で言語活動を充実し、それぞれの過程や結果を振り返り、評価・改善することができるようにすることが大切である、と示されている。

中学校数学科においては、数学的活動を通して主体的・対話的で深い学びを実現するために、その主要な側面として、「日常の事象や社会の事象から問題を見だし解決する活動」、「数学の事象から問題を見だし解決する活動」、「数学的な表現を用いて説明し伝え合う活動」の三つを〔数学的活動〕として各学年の内容として示している(表4)。

表4 数学的活動 学習指導要領解説数学編より

第1学年	
ア 日常の事象や社会の事象から問題を見だし解決する活動 (図2:A1, D1)	日常の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決したり、解決の過程や結果を振り返って考察したりする活動
イ 数学の事象から問題を見だし解決する活動 (図2:A2, D2)	数学の事象から問題を見だし解決したり、解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察したりする活動
ウ 数学的な表現を用いて説明し伝え合う活動	数学的な表現を用いて、筋道を立てて説明し伝え合う活動

(2) 数学的活動の取組

解説数学編より、以下のように数学的活動における配慮が示された。

- ① 数学的活動を楽しみ、数学を学習することの意義や数学の必要性を実感すること
- ② 見通しをもって数学的活動に取り組み、振り返る(評価・改善すること)
- ③ 観察や操作、実験などの活動を通すこと
- ④ 数学的活動の成果(レポートや発表等)を共有すること

本研究ではこれらを取り入れていくために、次の様な授業改善を目指していく。

- ① 日常の事象から生徒が興味を持って取り組みたくなるような課題を設定する。また、視覚的に問題把握につなげることができるよう、ICTの活用方法を工夫する。
- ② 生徒の考えを可視化するためにICTを生徒自らが活用する場面を設定し、それらを根拠としながら説明し合うことで、問

題を見だし課題の解決につなげる。

- ③ 操作や実験を通して体験的な活動を行う。
- ④ 思考過程や取り組んだ問題等について、ICTを通して蓄積しお互いで共有しながら統合的、発展的に考える力の育成をめざす。

4 ICTの効果的な使い方について

(1) 教育の情報化

文部科学白書(第2部文教・科学技術施策の動向と展開)(2017)より、「全ての学校段階において、『情報活用能力(情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して問題を発見・解決したり、自分の考えを形成したりしていくための必要な資質・能力)』が、言語能力などと同様に『学習の基盤となる資質・能力』として位置付けられたことから、学校教育における情報活用の重要性がうかがえる。

このことから、子ども達たちが情報社会に主体的に対応することができるよう、授業の中で積極的にICTを取り入れ、分かりやすい授業の実現をめざしていきたい。

(2) ICTを活用する目的

文部科学省が毎年行っている「教員のICT活用指導力実態調査」から、教師自身がICTを活用して教材研究や評価、授業中に活用する機会は毎年向上しているが、調査5項目のうち最も低いのが「生徒のICT活用を指導する能力」である(図3)。

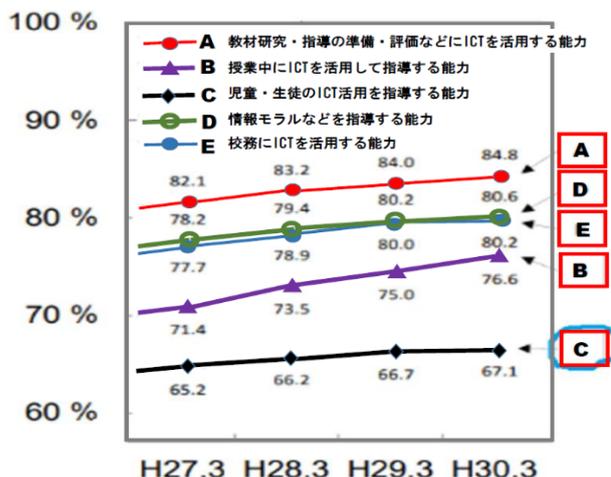


図3 「教員のICT活用指導力実態調査」の5項目より

ジョン・ハッティ(2018)は、コンピュータ利用において、「学習者が自分の学習の仕方(学習の進度調整, 習熟のための時間配分, 教授内容の系列化と進度調整, 反復練習する項目の選択, 復習)を自分でコントロールしている場合に教師がこれらの側面をコントロールしている場合よりも, 効果が大きい。」ということを挙げている。また、「教師ではなく学習者がコンピュータ操作することが重要である。」と結論づけている。

これまで ICT の活用としては, 教師が大型提示装置等を使って視覚的効果をねらい活用することが多かった。これまでの板書中心の学習指導に比べて効果が高く, 今後も必要である活用方法ではあるが, 更に新しい学習の形態として, 生徒が自分の学習の仕方を自分でコントロールしながら ICT を活用することをめざしていきたい。そのためにも, 普段の授業の中で生徒が ICT に触れる機会を計画的に増やす必要がある。

(3) ICT の効果

ジョン・ハッティ(2018)は、コンピュータを学習に利用した効果について、「学習の機会が多面的に与えられる場合にコンピュータ利用の効果が高まる。その代表例として, チュートリアル(入門的な内容の, 個別あるいは小集団 2-3 人の小集団指導)に利用している場合に効果が高い。」と述べている。この多面的とは, 例えば黒板による学習と ICT による学習のように複数の学習のことである。ICT を活用した小集団による学び合いの効果が高いことから, ICT を活用した対話的な協働学習を行う。

また、「コンピュータを利用したドリル(反復練習)の特質の中で高い効果につながることで, 学習者に自身によるコントロールを促進すること, 学習目標を見失わせないようにすること, 正答である場合には正答であることを誤答である場合には正答を即時にフィードバック(進み具合はどうか)すること」を挙げている。ICT を活用することで, 授業の導入や復習, 授業のまとめの時間を利用しての演習等で, 基礎的, 基本的な知識の習得型学習が短時間で可能

となる。

(4) ICT の活用

私がこれまで ICT を活用して授業を行ってきた経験から判断すると, ICT が生徒の学力を向上させるというわけではなく, 「生徒の何を伸ばしたいのか」といった, 教師側の明確な視点に基づいて ICT を活用したときに効果が出ると思われる。本研究においても, 生徒に明確な視点に意識させながら ICT を活用し, 思考力, 判断力, 表現力等の育成をめざしていきたい。そこで, 次の様な視点から ICT の活用を計画していく。

① 問題把握

大型提示装置, タブレットを活用し課題を視覚的にイメージしやすく提示する。また, 生徒が興味を持って取り組めるような教材を工夫する。また, 日常生活や社会の事象を課題としていくためにも, 教室にいながら見ることでできない事象や, 具体物を疑似的に操作するために活用することで, 数学的な見方・考え方を働かせることができると考える。

② 問題探究

タブレットに配布された課題に対して, 直接書き込みながら思考の過程を可視化・構造化し, 思考を整理し, 論理的に説明ができるよう支援していくことで, 数学的な思考力, 判断力, 表現力等の育成につながると考える。

③ 協働学習

生徒が表現した内容を伝え合い, 共有する過程を通じて, 数学的事象を多面的・多角的にとらえ問題解決につなげる力を身に付けることが期待される。そこで, タブレットをコミュニケーションのツールとして使い, 自分の考えを他者に伝え合うことを通して, 問題解決につなげていきたい。

④ 演習問題

タブレットを通して正答が即座に判断できる問題を配布し, 授業で取り組んだ内容のフィードバックを行う。

※これら全てを 1 単位時間で行うのではなく, 内容に適したものを組み合わせていく。

Ⅶ 授業実践

第1学年 数学科学習指導案

令和元年12月23日5校時
神森中学校1年6組34名
指導者 金城 史

【年間指導計画 2学年12月計画】

1 単元名 「6章 空間図形」

2 単元の目標

観察、操作、実験などの数学的活動を通して、空間図形に対する直感的な見方や考え方を深めるとともに、空間図形の性質について論理的に考察する能力を高める。

3 単元の評価規準及び評価方法

(1) 単元の評価規準

身近にあるいろいろな立体を観察することを通して、基本的な立体として、角柱、円柱、角錐、円錐、に分類整理し、展開図や見取り図、投影図を観察、操作、実験を通して理解し、立体の表面積や体積を求めたりすることから基本的な立体についての理解を深める。

関心・意欲・態度	数学的な見方・考え方	数学的な技能	知識・理解
◎身近な立体をいろいろな視点や方法で観察・操作・分類整理しようとしている。	◎立体や見取り図や展開図、投影図でとらえ、立体の特徴を見いだすことができる。	◎立体の見取り図や展開図、投影図を的確にかくことができる。	◎角柱、円柱、角錐、円錐などの用語と立体の見取り図、展開図、投影図の意味を、既習の学習内容と関連付けて理解している。
◎柱体、錐体、球の表面積と体積に関心を持ち、その求め方を考えようとしている。	◎実験などを基にして、柱体、錐体、球の表面積と体積の求め方を考えることができる。	◎柱体、錐体、球の表面積、と体積を求めることができる。	◎柱体、錐体、球の表面積と体積の求め方を理解している。

(2) 評価方法

数学的な見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に考察し、論理的に表現できているかを評価する。また、数学的表現を用いて表現ができるようにする。あらかじめ、評価規準を生徒と確認をしておき、授業における「めあて」と「目標」を確認しながら授業を進めていけるように行う。

4 単元について

(1) 教材観

本単元は、中学校学習指導要領数学第1学年「B 図形 (2)空間図形について、数学的活動を通して、①空間図形を直線や平面図形の運動によって構成されるものと捉えたり、空間図形を平面上に表現して平面上の表現から空間図形の性質を見いだしたりすることができる、②立体図形の表面積や体積の求め方を考察し表現すること、を身に付けるようにする」にあたるものである。小学校での立体図形に関する学習の上に立って、空間図形についての理解を一層深めるとともに、論理的

に考察し表現する力を身に付けさせたい。

小学校では、身近な立体を抽象化した立体図形が考察の対象であったが、中学校では、空間における線や面の一部を組み合わせた空間図形を扱うことを生徒が意識できるようにしたい。また空間図形の性質を理解するために、見取図、展開図、投影図など平面上への表現用いて、1つの表現方法ではなく、複数の表現方法を組み合わせるなど多面的・多角的に調べ、思考を広げていきたい。そして、調べたことをもとに空間図形の性質について論理的に考察し表現できるようにしたい。授業ではICTを活用して、タブレット上で立体をつくり、観察、操作、実験をするなどの数学的活動を通して、空間における平面や直線の位置関係を理解し、平面図形や、直線を実際に動かすことでできる立体とその性質について理解できるよう工夫する。

(2) 生徒観

① 本研究との関わりから

学級(34名)の生徒実態アンケートを実施したところ、「説明は難しいが、解き方を考えるようにしている」93%とあり、生徒の内面では思考活動が行われていることが読み取れる。しかし「数学で、自分の考えたことを話すのは好きですか」34%の結果を見ると、表現することに苦手意識を感じていることが読み取れる。生徒の様子を見ていると、自分は完璧な回答をしなければいけない雰囲気があることと、回答をしたことで笑われることや、みんなの前で間違えることに抵抗があるように感じる。また、「数学で、友達の考えたことを聞くことは好きですか」の項目では76%が肯定的な意見であり、意見は聞きたいけど自分が発表するのは苦手なことが読み取れる。本研究では、答えが1つのみといった完全解答を求めるような発問ではなく、多様な考え方を数学的活動の中で発見できるような発問を意識したい。また学習者全体が、様々な意見を許容できるようにしたい。

② ICT活用の視点から

数学的活動を行う中で、本研究ではICTを媒介としながら生徒相互が自分の思考・判断したことを論理的に表現していけるよう進めていく。生徒実態アンケートから「数学で、大型提示装置やタブレットを使って説明されることは分かりやすいですか」90%、「数学で、タブレットを見ながら話し合い活動を行うと分かりやすいですか」93%と非常に高く評価しており、ICTを活用すると生徒が理解することや生徒が表現することに対して期待が持てる。

(3) 指導観

指導にあたっては、考えたことや工夫したことなどを数学的な表現を用いて説明し伝え合う機会を設け、数学的に表現することのよさを実感できるようにしていきたい。単元を通して、身近にある空間図形に意識を働かせながら生徒の興味を引き出し、実際に触れたり操作したりしながら日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察していく。今回はICTを活用して図形を作ったり操作したりしながら、数学的な見方・考え方を働かせ発見したことと、既習の知識を使って数学的に表現できるよう授業を進めていく。さらに、説明し伝え合うことにより、お互いの考えをよりよいものにしたたり、一人では気付くことのできなかつた新たなことを見いだしたりする機会とし、この活動に生徒が主体的・対話的に取り組むことで深い学びの実現につなげていきたい。1学年においては、はじめからうまく表現したり適切に解釈したりすることを求めるのではなく、数学的な表現に慣れ、筋道立てて説明し伝え合う活動に取り組むことを大切にして、数学的な表現のよさを実感できるようにし、中学校3年間で身に付けていけるものにしていくことを目指す。

5 指導と評価の計画

時	目標	学習活動	手だて(ICT教材)	評価【観点】
1	身近に立体があることに興味を持つ。	○身近な建物、容器から立体を見付ける。 ○見つけた立体から既習の立体の種類が分かる。	タブレット (地図ツール) (インターネット) 言語活動	【関心・意欲・態度】 角柱、角錐、円柱、円錐などの図形を、 既習の内容と関連付けている。
2	立体を作成することで、性質を理解する。	○円柱、円錐、角柱、角錐、球を、タブレットを使って作成する。	タブレット (図形作成ツール) 言語活動	【技能】 角柱、角錐、円柱、円錐、多面体、正多面体などを、 既習の内容と関連付けて理解し作成することができる。
3 本時	立体を分類し、根拠をもとに説明する。	○身近な立体、作った立体(空間図形)について根拠を持って分類する。	タブレット (コミュニケーションツール) 言語活動	【知識・理解】 立体図形の名前を、既習の知識と関連づけて理解している。 【見方・考え方】 角柱、角錐、円柱、円錐などを、根拠を持って分類することができる。
4	立体の性質から、実際の体積を求める。	○身近な立体の体積を求める。 ・小さな実物は実際に計測する ・建物などは、タブレットの写真から計測する	タブレット (図形作成ツール)	【技能】 いろいろな立体の体積を求めることができる。
5	学習内容のたしかめ	単元テスト	タブレット (学習支援ソフト)	

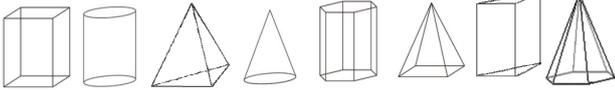
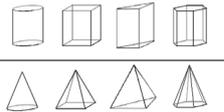
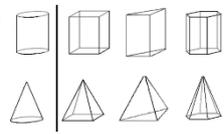
6 本時の学習【3／5時間】

(1) 目標

これまで調べたり作成したりした立体について、ある基準にそって立体を分類し、根拠をもとに説明することができる。

(2) 本時の工夫

- ① 展開①の場面において、図形の分類作業を効率よく行うために、ICT(コミュニケーションツール)による資料提示を行う。
- ② 展開②の場面において、ICT(コミュニケーションツール)を使って、整理・分類した自分の考えを可視化し、それをもとにして根拠をもって説明できるようにする。

	学習活動	学習内容及び指導上の留意点	評価方法
導入	1 前時の学習内容の確認	○前時までの活動で見つけた図形、作成した図形についての確認をする。	
	2 本時の課題の確認	○次の立体を2つに仲間分けしよう。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">発問：もっと細かく分類していくことはできないだろうか？</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">めあて：立体の特徴を探り、仲間分けすることができる</div>	<p>予想される分類1</p>  <p>予想される分類2</p> 

展開 ①	3 グループ分けの説明 ※複数考えられる場合は、シートを資料箱から追加して取り出すことを指示する。	○本時のルールと流れ。 ① ある基準のもと、いくつかグループに分ける。 ② 図形の分け方は1通りではない。 1通り見つけたら他の方法を探す。 ③ どうして、そのように分けたのかという理由が大切。分けた基準を説明できるようにする。 ④ まずは1人で分けてみる。 ⑤ 次にグループで話し合っ、1つに決める。 ⑥ 先生に提出する。	【見方・考え方】 角柱、角錐、円柱、円錐などを、根拠を持って分類することができる。
展開 ②	4 課題への取り組み 5 自分の考えを説明	○タブレットを使って図形の分類を行う。【個人】 ○タブレットを使って共有する。 【グループ】 ○検討した内容を教師用タブレットに送信する。 ○各グループの考えを全体で共有する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">○予想される生徒の反応 ・丸い形とかくかくした形 ・上と下の面の形が同じ ・上に面がない ・先がとがっている ・正面から見ると三角形</div>	【A 評価】 図形の分類ができ、2つ以上の視点を根拠として説明することができる。 【B 評価】 図形の分類ができ、根拠を説明することができる。
展開 ③	6 グループでまとめ、全体への説明 ※比較検討	○他のグループの考えを参考に、整理していく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">・錘と柱 ・立面図と平面図 ・回転体と多面体 など</div>	【知識・理解】 立体図形の名前を、既習の知識と関連づけて理解している。
まとめ	7 振り返り 8 確認テスト	○本時のまとめ【個人】 ・本時で分かったことは何か。 ・目標を達成できたか。 ・タブレットにて、本日のワークシートへ記入	【A 評価】 80%以上の正解 【B 評価】 60%以上正解

(3) 板書計画

めあて：立体の特徴を探り、仲間分けすることができる

①ある基準のもと、いくつかグループに分ける。
②図形の分け方は1通りではない。
③1通り見つけたら他の方法を探す。
③どうして、そのように分けたのかという理由が大切。分けた基準を説明できるようにする。
④まずは1人で分けてみる。
⑤グループで1つに決める。
⑥先生に提出する。

提出時間 ○：○○まで

まとめ
 「立体の特徴から、立体の名前を決めることができる。」

Ⅷ 研究の考察

1 作業仮説(1)の検証

問題把握の場面において、ICTによる課題提示の工夫をすることで、主体的に数学的活動を取り組むことができるであろう。

ICTによる課題提示について

(1) 手だて

生徒が主体的に課題に取り組みたくなるような課題提示の工夫を行った。その手だてとして、ICTの活用と数学的活動を取り入れ、生徒が調べたり操作したりできる環境を整えた。立体図形に興味を持てるように、日常生活にある立体図形を探したり、作成した図形を操作したりできる教材を提示した。

ア 地図ツールで身近にある立体図形を見つける(図4)。

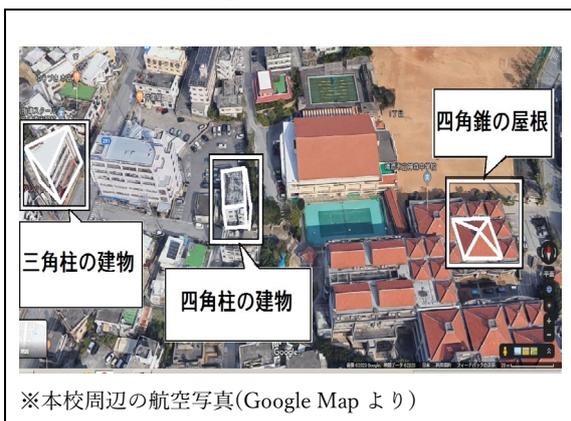


図4 問題提示の工夫A

イ 図形作成ツールで立体図形を作成し、それを操作し観察する(図5)。

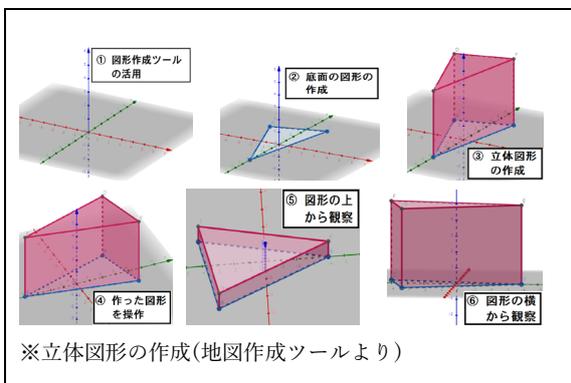


図5 問題提示の工夫B

(2) 結果

ア 教室にしながら自分たちが住む地域の地図から空間図形を探すことに取り組んだ。

見つけた図形は画像データとして取り込み、自身のタブレットに保存した。生徒の中には沖縄県以外から探す姿も見られた(図6)。

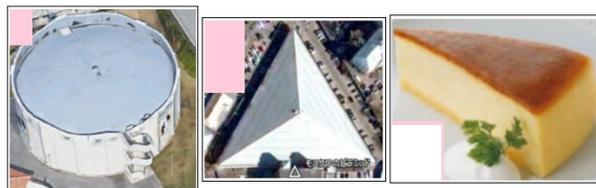


図6 生徒が見つけた立体図形

イ 作成の手順が複雑ではあったが、周りの人と試行錯誤しながら作成することができた。本時の目標である6種類の立体図形の作成に関しては学級全員が達成することができた。正八面体や正四角錐柱などの複雑な図形を作成する生徒も見られた(図7)。

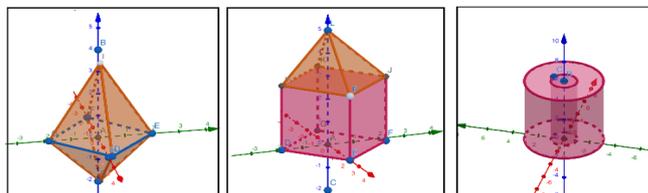


図7 生徒が作成した立体図形

「図8 教科に関する意識調査」を見ると、事前調査では65%の生徒が肯定的な回答であったのに対して、84%に増加している。実際の授業においても、全員が積極的に取り組む様子が見られ、設定した課題より多くの立体を見つけたり、作成したりすることができた。

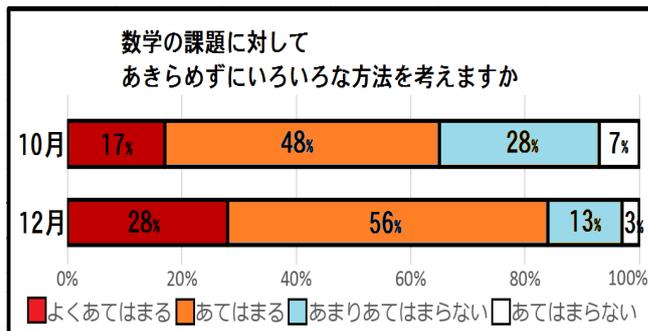


図8 教科に関する意識調査

(3) 考察

タブレットを生徒1人1台準備したことで、生徒全員が自分自身で操作しながら課題に取り組むことができた。また、生徒の取り組んだ過程や進捗状況をデータとして保存されており全て把握することができた。

これまでの授業では、教師側から身近な物

や建物や、模型教材を触らせるなどして立体図形を提示してきたが、生徒にとっては受身的に興味を持つ程度だったように思う。これに対し、タブレットを使うことで、自ら身近な立体図形を見つけたり作成したりすることが容易となり、積極的に課題に取り組むことができた。これらの数学的活動を通して、図形の特徴を確認することができ、数学的な見方の育成にもつながった。

「図8 教科に関する意識調査」から8割以上の生徒が肯定的な回答をしており、生徒自身がICTを活用し自ら課題を解決していく達成感を経ることで、学習に対する意欲が向上していると考えられる。肯定的な回答をした生徒の感想からも、生徒自身が検証授業を通して効果を実感していることがうかがえる(表5)。また、検証授業では周りの人と相談したり教え合ったりする場面が多く見られた。生徒が主体的に取り組み、できたことを誰かに伝えたい、または聞きたいといった興味・関心を高められたからと考えられる。

表5 タブレット活用に関する感想

- (ア) 分かりやすく、楽しく調べることができた。
- (イ) 自分で動かしたりするのが楽しい。
- (ウ) タブレットで見たり動かしたりすると、頭に入りやすかった。
- (エ) 分からない問題をすぐに振り返ることができる。

以上のことから、ICTを活用して生徒が興味・関心を持てる課題提示の工夫をすることで、主体的に取り組める数学的活動につながったと考える

2 作業仮説(2)の検証

問題探究の場面において、ICTを使って思考を可視化し、根拠をもとに協働学習の中で説明、表現し合うことで、思考力、判断力、表現力等の育成につながるであろう。

(1) ICTを活用することについて

① 手だて

第2時で作成した立体図形を、図形の特徴

に基づいて分類する作業を行った。1人1台のタブレットを準備することで、生徒個人で活動することができた。タブレットを使い、資料を直接動かすことで分類、整理した。また、分類の根拠をタブレットに直接書き込める欄を設けることで、自分の考えをあいまいにせず、理由付けるようにした(図9)。



図9 立体図形の分類をしている様子

それをもとに、2~4名のグループでそれぞれの意見を統合したり整理したりして、まとめた内容を教師用のタブレットに送信させた(図10)。



図10 タブレットを使って説明し合っている様子

最後に大型提示装置を介して、全体で共有しながら思考の収束を図った(図11)。



図11 大型提示装置で全体に説明する様子

② 結果

「図12 ICTに関する意識調査B」における事前調査(10月)の段階から、90%以上が肯定的な回答をしている。特に、「よくあてはまる」に回答した生徒が55%(10月)から75%(12月)と大幅な成果が見られた。

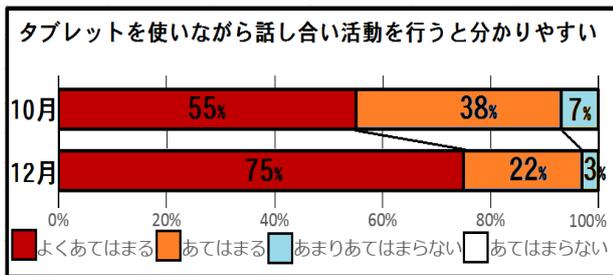


図 12 ICTに関する意識調査 B

「図 13 表現に関する意識調査 A」の質問に対して、事前調査(10月)では34%が肯定的な回答に対して事後調査(12月)では57%に向上する結果となった。しかし検証後においても43%の生徒が「あまりあてはまらない」、または「あてはまらない」と回答している。

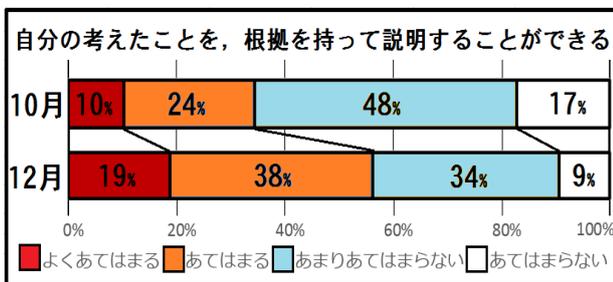


図 13 表現に関する意識調査 A

③ 考察

「図 12 ICTに関する意識調査 B」において、肯定的な回答をした生徒感想から考察してみる(表 6)。これらの感想から、ICT(コミュニケーションツール)を使うことで、自分の考えを整理しまとめることを容易にし、根拠を持って相手に説明すること、または相手から説明を聞くことに効果があることが分かる。これは生徒同士で学び合うことにつながり、お互いの考えを聞くことで生徒自らが課題解決を行い、そのことで数学的な見方・考え方をより深いものとするできると期待できる。

表 6 ICTに関する意識調査における生徒感想

(ア) 写真とかが見やすくて分かりやすい。
(イ) タブレットを使うと、自分の考えたことをまとめやすかった。
(ウ) タブレットでみんなの意見を1つにまとめやすく便利。
(エ) タブレットを使うと、みんなの話を聞きやすい。
(オ) 自分の言葉で説明することは難しいが、タブレットを操作しながらだと説明しやすくて良かった。

また、「図 13 表現に関する意識調査 A」から、「相手に自分の考えを説明する」ことに苦手意識を感じている生徒が非常に多いことが分かる。理由としては、説明することに慣れていないことや自分の意見を伝えることに自信がないことが挙げられる。相手に説明を行う前に、自分の考えを具体的に出させる工夫が必要となる。そこで、タブレットのコミュニケーションツールを使うことで、思考の可視化を行い、生徒が「相手に自分の考えを論理的に説明する」ことができると考えた。

このような活動を行っていくことで、事前調査(10月)では65%の生徒が「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」としていた回答が、事後調査(12月)では43%まで減少しており、「自分の考えを説明する」こと、「根拠を書く」ことに苦手意識を感じる生徒にとって、抵抗感が減少していることが分かる。生徒の思考過程を可視化したタブレットをお互いに見せながら根拠をもって説明することができた。そのことで、より多くの多面的・多角的な思考に触れることを可能にし、それらの思考を統合したり整理したりすることができるようになった。

以上のことから、課題を解決していく過程において自分の思考を表現したり説明したりする時に、ICTを活用することが数学的な見方・考え方を働かせることに効果があることが分かる。しかし、ICTの活用が学習に効果があると実感する生徒は増加したが、根拠を持って説明することに苦手意識を感じる生徒も少なくない。よって、今後もICTを活用した学び合う活動を計画的に継続していくことが課題として挙げられる。

(2) ICTを使った協働学習について

① 手だて

自分の思考を可視化するためにも1人1台のタブレットを準備した。さらに、そのタブレットを合わせることで、お互いの思考したことを視覚的に見せ合い説明し合うことを

容易にできるようにした。自分の考えを説明し、他者の考えを聞くことで、複数の考えを統合したり整理したりできるようにした。

② 結果

「図 14 協働学習の意識調査 A」において事前調査(10月)と事後調査(12月)では大きな変化は見られない。

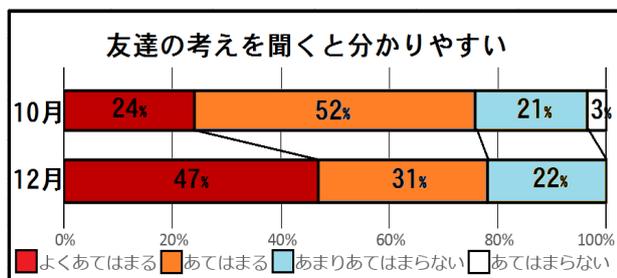


図 14 協働学習に関する意識調査 A

しかしながら、「話し合いながら問題を解決していく学習は必要ですか」に対して、検証後には100%の生徒が肯定的な回答をしている(図 15)。

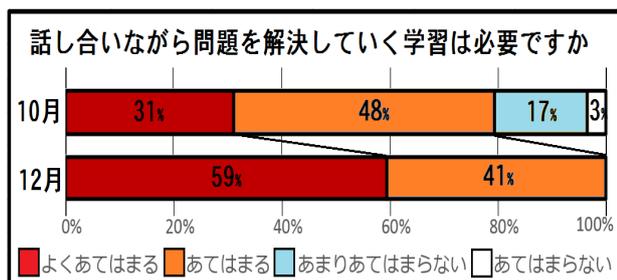


図 15 協働学習に関する意識調査 B

「図 15 協働学習に関する意識調査 B」で肯定的な回答をした生徒から、生徒感想が表出された(表 7)。

表 7 協働学習に関する感想

(ア) いろんなアイデアがあって、みんなすごいと感じた。多角的な見方ができた。
(イ) 自分の考えと似ていることもあったけど、自分では気付かなかったことも、話し合うことで気付くことができた。
(ウ) 自分の意見とは別に他の人の意見を取り入れることで、改めて考えることができた。
(エ) みんな違う意見だったけど、理由を聞くことで納得できたし、1つの結論が出た。
(オ) グループで話し合うことで意味がよく分かった。
(カ) グループで話し合うことは楽しくて意見を聞きやすかった。

③ 考察

「図 14 協働学習に関する意識調査 A」から、事前調査(10月)の時点で周りの人に教えてもらうことに肯定的な割合が高いことが分かる。従来の授業展開に比べて、学び合うことに効果があることがいえる。検証授業後の事後調査(12月)では肯定的な回答が78%という結果であり、10月の意識調査とあまり変化は見られないが、「よくあてはまる」と回答した生徒が24%から47%と大きく増加しており、協働学習を行うことに対して高く評価する生徒が増加した。これまでの協働学習に肯定的であったことに加え、ICTを活用することでより効果を実感したことがうかがえる。また、「あまりあてはまらない」と回答した生徒の割合にも大きな変化は見られない。もともと周りに教えてもらうことや、誰かと学び合うことに苦手意識を感じていることが考えられるため、支持的風土のある学習環境の確立を目指していきたい。

検証授業を通して取り組んだ結果、「図 15 協働学習に関する意識調査 B」において、生徒全員が協働して学び合うことが必要であると回答しており、意識に変化が見られた。「表 7 協働学習に関する感想」からは、自分だけでは気付かないことでも複数で話し合うと気付くこと(ア)(イ)、相手の考えを積極的に受け入れることで新しい考えにつながること(ウ)、説明するだけでなく、お互いの考えを統合したり発展したりすること(エ)、内容を理解することへの助けとなること(オ)(カ)などがあり、学習の効果を実感していることが分かる。

授業で行った際の「生徒のワークシート」から考察すると、協働学習を通して思考の変化の様子を見ることができる(図 16)。①の生徒は底面に着目して分類している。②の生徒は側面に着目して分類している。雖は未習であるため、三角形と表現していることから、まだ習っていない知識を既習の知識を使っ

て自分なりに表現していることが分かる。③と④では、単純に2種類に分類するのではなく、枠を工夫して3種類に分類している。資料を実際に操作することができる ICT の特性を活かすことができたことにより、様々な視点が表出され、思考の深まりを見取ることができる。⑤では、それぞれの考えをまとめるときに4分割で分類する工夫をすることで①と②を整理した。図形の一部の特徴に着目する数学的な見方を働かせ、既習の知識を関連付けながら、統合的、発展的に考えている過程が見られる。

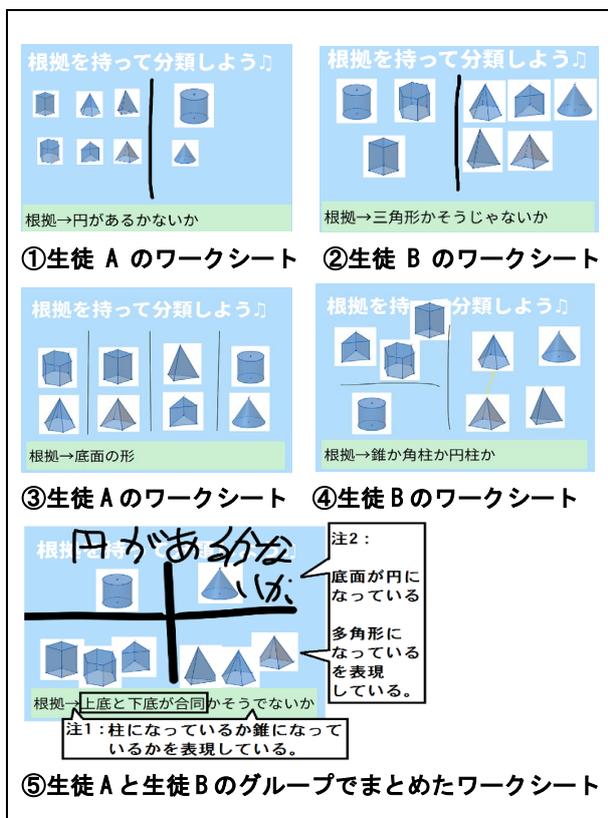


図 16 生徒のワークシート

以上のことから、問題探究の場面において、タブレットを使うことで自分の思考過程の可視化を容易にすることができた。そして、協働学習の場面において論理的に説明し合うことで、より多くの多角的な見方・考え方を身につけることができ、それが思考力、判断力、表現力等の育成につながったと考察できる。

3 本研究を通して

本研究では、思考力、判断力、表現力等を身につけるために、数学的活動の中で数学的な見方・考え方を働かせ、生徒が主体的に思考し表現することができる授業の在り方を工夫した。

「図 17 学習に対する意識調査」から、検証後に学習に対する肯定的な回答が増えていることが分かる。これは、主体的に授業に取り組めるような課題提示の方法や ICT を効果的に活用することで生徒の意欲や興味・関心が向上したからと考える。

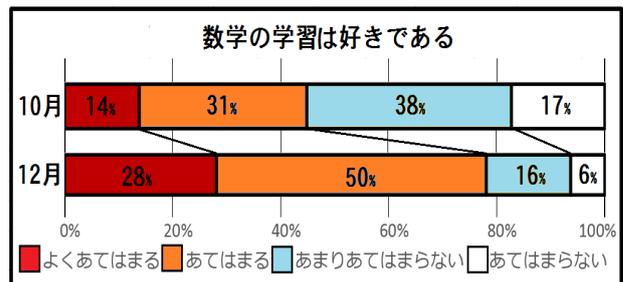


図 17 学習に対する意識調査

「図 18 表現に関する意識調査 B」からは、協働学習の中で自分以外の意見に触れる機会を多く設定したことで多面的・多角的なものの見方の必要性を生徒自身が効果を実感していることが分かる。

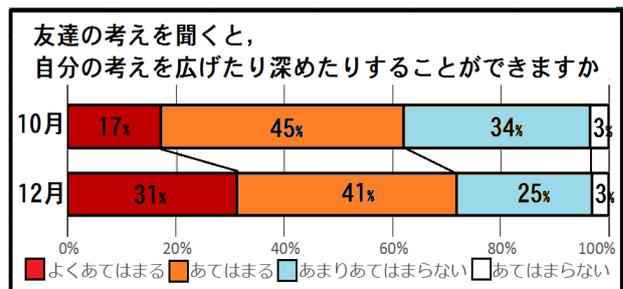


図 18 表現に関する意識調査 B

検証授業を行う以前の生徒たちは、自分の考えたことを相手に伝えたり、課題について深く考えたりすることに苦手意識を感じるが多かった。検証授業を通して自ら試行錯誤しながら課題に取り組もうとする意識の変化が見られた。これらの検証結果を踏まえた上で、今後の授業においては帰納的な学習を計画的に行い、生徒自身が課題解決の道筋に気づき、主体的に学ぶための意欲の向上をめざす。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) ICT を活用することで、生徒の興味・関心・意欲の向上が見られ、主体的に問題に取り組むことができた。また、ICT を活用することで積極的にコミュニケーションを取り合う姿勢が見られた。
- (2) 日常生活にある立体図形を生徒自身が探したり操作したりする数学的な活動を通して、数学的な見方・考え方を働かせることができた。
- (3) ICT を活用し協働学習を行う中で論理的に考える力を育むことができた。その結果、数学的な思考力、判断力、表現力等の育成につながった。

2 課題

- (1) 思考力、判断力、表現力等の育成に向けて、日常の学習において思考の可視化や言語化する協働学習の場面を、計画的に継続的していく必要がある。
- (2) 生徒個々の ICT スキルや活用モラルの格差を是正していくために、日常から積極的に ICT を活用し、学校全体で推進していく必要がある。

おわりに

これからはテクノロジーの更なる進歩と、それに関わる子どもたちの学び方が大きく変わっていくことは容易に想像できます。そんな日々の激しい変化に教師も対応していかなければならず、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善が求められています。そんな中、本研究を通して様々な書籍や授業研修、異なる校種の研究員との交流を通して得られた知識は、大きな財産であり、私自身を大きく成長させてくれました。

検証授業では、生徒が課題に対して真摯に取り組む姿勢や、課題を解決する喜びや成長を感じさせてもらい、教師として非常に素敵な時間を共有することができました。

研修期間中だけでなく、入所前よりご指導ご助言をいただきました長濱京子所長はじめ、教育研究所の先生方、職員の皆様、検討会や検証授業や報告書等で御指導、御助言をいただきました浦添市教育委員会の方々へ深く感謝申し上げます。また、研究の機会に快く送り出して下さった仲盛康治校長先生をはじめ、検証授業をスムーズに行えるよう時間の調整や連絡をていねいにいただきました職員の皆様へ感謝申し上げます。そして、第 48 期長期研究員としてともに励まし合い支え合った研究員に感謝申し上げます。

【主な参考・引用文献】

- | | | |
|--|----------------------|-----------------------------------|
| ・『中学校学習指導要領解説総則編』(2017) | | 文部科学省 |
| ・『中学校学習指導要領解説数学編』(2017) | | 文部科学省 |
| ・清水宏幸(2017)『数学的活動の充実を目指した授業づくり』 | 数学教育 No. 721 p. 4-5 | 明治図書 |
| ・黒澤俊二(1999)『なぜ「算数的活動」なのか』 | | 東洋館出版社 |
| ・『平成 29 年度文部科学白書(第 2 部文教・科学技術施策の動向と展開)』(2018) | | 文部科学省 |
| ・ジョン・ハッティ(2018)『教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』 | | 図書文化 |
| ・地図ツール | 「Google マップ」 | <u>Google Inc.</u> |
| ・図形作成ソフト | 「Geo Gebra」 | <u>GNU General Public License</u> |
| ・コミュニケーションツール | 教育支援アプリ「ロイロノート スクール」 | 株式会社ロイロ |
| ・学習支援ソフト | 「e ライブラリアドバンス」 | 株式会社 LINES |

〈自立支援〉

不登校のケアとサポートの工夫

—学校・地域・関係機関の機能を生かした連携を通して—

特別研究員 自立支援室「ひなた」担当教諭
浦添市立港川小学校 教諭 仲西 謙

目 次

I	テーマ設定理由	49
II	目指す子ども像	49
III	研究目標	49
IV	研究仮説	49
V	研究内容	50
VI	研究の実際	
1	関係機関の機能と役割	50-52
2	要対協（要保護児童対策地域協議会の中の「個別支援会議」）	53
3	関係機関の連携	53
4	関係機関の関わりの事例	54-56
VII	成果と課題	56
VIII	おわりに	56
	おもな参考・引用文献	56

不登校のケアとサポートの工夫

—学校・地域・関係機関の機能を生かした連携を通して—

特別研究員 自立支援室「ひなた」担当教諭
浦添市立港川小学校 教諭 仲西 謙

I テーマ設定理由

文部科学省「不登校への対応について」の中に「学校関係者や家庭，必要に応じて関係機関が情報を共有して，組織的・計画的に支援することが重要である。」とあり，関係機関との連携が不登校への対応に重要視されている。

浦添市の不登校数は，小学校で平成27年度65人から平成30年度には2倍以上の142人，中学校で平成27年度164人から平成28年度156人と一度減少したものの平成30年度179人と年々増加傾向にある。自立支援室「ひなた」の担当教諭として私自身が不登校の児童生徒と関わりながら研修を受けたり，市内小中学校や教育相談室「くくむい」の心理士と会話したりする中で，発達障害や情緒障害・家庭環境や人間関係による二次障害など多種多様な原因が見えてくる。そのため，児童生徒一人一人に応じた個別の支援が必要と感じる。とくに，保護者の置かれている状況（貧困・保護者自身の心因性障害・DV被害など）については，児童生徒の不登校が深刻化する要因とみられるため，家庭への支援の必要性を感じる。

家庭で抱えている問題はさまざまであり，それぞれ専門としている機関に相談することで，問題の改善が期待できると思われる。しかし，抱えている問題は，一つとは限らず，いくつかの問題が絡み合っている家庭が多くみられ，複数の機関が関わっている場合が多い。このことから，関係機関がその家庭の状況や必要な支援について話し合うなどの連携は，不登校や問題行動のある児童生徒の支援を効果的に行う上で重要であると考えられる。

本研究では学校が，児童生徒の家庭環境を把握し，関係機関のそれぞれの機能と役割を確認しどの機関と連携すればよいのか実践の在り方を検討する。必要に応じて，要保護児童対策地域協議会（要対協）の開催を要請し，関係機関との連携を行うことで家庭支援を含めた不登校や問題行動の改善へと向かうことができると考える。不登校や問題行動のある児童生徒への支援の場において，学校・保護者・関係機関・地域の機能を生かした連携をすることによって，不登校や問題行動のある児童生徒への支援が円滑になると考え，本研究テーマを設定した。

II 目指す子ども像

○自らの進路を主体的に考え，社会的な自立をめざす子

III 研究目標

○不登校や問題行動のある子と家庭へのケアとサポートの工夫について研究する。

○各関係機関の機能や役割を学校にわかりやすくする。

IV 研究仮説

関係機関が共通理解の下で連携し，子どもと家庭へのケアとサポートの体制を整えることにより，児童生徒の情緒面が安定へと向かい，不登校や問題行動のある児童生徒が自らの進路を主体的に考え，社会的な自立をめざすであろう。

V 研究内容

- 1 関係機関の機能と役割を一覧表にまとめる。
- 2 要対協（要保護児童対策地域協議会の中の「個別支援会議」）の仕組みをまとめる。
- 3 関係機関の関わりと効果についてまとめる。

VI 研究の実際

1 関係機関の機能や役割

	機関名	機能や役割
浦添市役所	こども青少年課	
	相談室 くくむい	対象：市内の児童生徒、保護者、教師 役割：教育的課題や悩みについての相談に応じ、課題解決に向けた支援。
	自立支援室 ひなた	対象：遊び非行傾向の不登校等の児童生徒 役割：日中の居場所を確保し、学校や社会への適応の促進及び社会的自立・自律に向けた支援等。
	適応指導教室 いまあじ	対象：市内の不登校児童生徒 役割：自立心を育て、集団生活への適応力向上と登校復帰に向けた支援。
	青少年相談員	対象：市内の児童生徒 役割：児童生徒への声かけ、安全確保、不審者対策等（早朝・日中・夕方の巡回）、学校からの搜索依頼・家庭訪問。
	教育相談支援員	対象：児童生徒、保護者、学校職員 役割：悩み相談と不登校児童生徒の家庭訪問や登校支援を行う。
	生徒サポーター	対象：市内中学校の生徒、学校職員 役割：「遊び・非行」傾向不登校等生徒の家庭訪問や登校支援等や屋外体験活動や職場体験等の支援、学習支援や相談。
	学校教育課	対象：準用保護家庭、その他。 役割：生徒指導、特別支援。準要保護申請手続き。
	保護課	対象：要保護・貧困家庭。 役割：生活に困窮する方に対し、その困窮の程度に応じて必要な保護を行うとともに、自立を助長する。無料「てだこ未来塾」の手続き。
	自立サポートセンター てだこ未来	対象：生活に不安を抱えている大人（生活保護世帯を除く） 役割：収入や貯金が少ない生活困窮者の自立相談支援。住居確保給付金の支給。生活困窮世帯一時生活支援事業。生活困窮世帯の子どもの不登校相談や学習支援、放課後こども教室等。「てだこ未来」が窓口になって、保護課やこども家庭課への案内。
	こども家庭課	対象：要対協が必要な児童生徒。母子家庭。 役割：子育て世帯の養育環境を整えていく。児童手当、こども医療費助成、母子扶養手当、母子及び父子家庭等医療費助成、母子生活支援施設（浦和寮）、女性相談、育児相談、児童の心身の発達や学校生活相談、虐待相談、要対協の主催や福祉的家庭支援。
	家庭児童相談室	対象：0～18歳までの児童及び保護者。その他関係者。 役割：育児・子どもの心身の発達・学校生活・虐待に関する相談。その他子どもに関する相談。
	市母子生活支援施設 浦和寮	対象：18歳未満の児童を養育している母と子。 役割：3年間の生活支援、養育支援、相談支援、就労支援、臨床心理士によるカウンセリング。乳幼児期の保育。学童保育。学習支援。アフターケア。保護者の疾病等により家庭での養育が一時的に困難となった場合、2～12歳の児童を預かる。（7日以内） 経済的な理由等により緊急一時的に母子を保護する。（7日以内）
	障害福祉課 障害者(児)基幹相談支援センター	対象：障害（診断の有無は問わない）のある方やその家族、支援者 役割：障がいに関することや障がい者虐待についての相談
こども政策課 てだこ未来応援員	対象：18歳以下で、生活困窮者または就学援助制度の対象者？ 役割：子どもの貧困対策。出向いて子どもの貧困の現状を把握し、学校と関係機関との情報共有や、子供を支援につなげるための調整を行う。居場所の担い手を確保するなどして、新たな子どもの居場所づくり	

		の準備等。
	児童センター	対象：18歳未満の児童及びその保護者。 役割：子どもたちが自由に来館し、遊ぶ場。行事やクラブ活動のほか、親子交流や子育て相談など。
	保育課 ファミリーサポートセンター	対象：小学校6年までの子どもがいる保護者。 役割：子育てを援助してほしい「おねがい会員」と有料で子育ての援助をする「まかせて会員」をつなぐ。【例 未就学児の送迎、保育所、幼稚園の開始前や終了後の子どもの保育。学童保育終了後や保護者の急用 (傷病・看護)時の子どもの預かり。保護者がリフレッシュ(美容室等)する時間の預かり。子育て中 の親が手助けを必要としているとき。】
	浦添市民生委員 児童委員	対象：地域住民。 役割：それぞれの地域において、住民の立場に立って相談に応じ、必要な援助を行う。地域の子どもたちを見 守り、子育ての不安や妊娠中の心配事などの相談・支援等。
	社会福祉協議会 CSW (地域ソーシャルワーカー)	対象：地域に住む子どもから大人まで。 役割：民生委員など地域協力者と共に訪問相談などで支援(地域支援ネットワークづくり)。地域支援会議の 主催(ケア支援体制の確立)。地域への福祉教育と地域の担い手を養成。
県立	中央児童相談所	対象：18歳未満の児童及びその保護者。 役割：家庭での養育が困難な子どもについての相談、子どもの性格行動のしつけについての相談、子どもの虐 待についての相談、非行についての相談、子どもの発達障害についての相談、里親についての相談、その 他、子ども・子育てに関する相談。緊急時の一時保護や児童福祉施設への紹介。
	若夏学院 (児童自立支援施設)	対象：不良行為を為し、または為す恐れのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を 要する児童。児童相談所あるいは家庭裁判所の審判などを経て入所。 役割：個々の児童状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援。退所した者について相談その他の援助。
社会福祉法人	ノアーズ・ガーデン (児童心理治療施設)	対象：学校生活になじめない。行けない。家庭で乱暴になったり、昼夜逆転などがあつたり、生活リズムが整 わない。虐待やいじめを受けて心が傷ついている。情緒面、行動面に課題がある。注意の集中が難しく、 集団での活動に支障がある。ささいな刺激に反応しやすく、すぐに興奮したり乱暴になったりする。スト レスから、身体に不調をきたし、日常に支障がある。場面緘黙やチックがあり、日常生活に支障がある。 などの児童。 役割：入所と通所がある。多くの専門職が協働し、生活支援を基盤とした心理治療を中心に、学校教育との緊 密な連携による総合的な治療・支援。
	石嶺児童園 (児童養護施設)	対象：保護者のない児童、虐待されている児童、環境上養護を要する児童。 役割：擁護し、あわせて退所した者に相談その他の自立のための援助。
	島添の丘 (児童養護施設)	対象：原則として満1歳から17歳までの児童。家庭のいろいろな事情により親元で生活することができない 児童。 役割：家庭に代わる生活の場を与え、児童福祉専門の職員が親に代わって児童を養育する。
国立	那覇少年鑑別所＝ なほ法務少年支援センター (波之上こころの相談所)	対象：非行、犯罪行為、親子関係、職場や学校などでのトラブル、交友関係などで相談したい人。 役割：家庭裁判所の観護措置決定に基づき、非行のあった少年をおおむね4週間収容し、心理学、教育学など の専門的知識や技術を活用しながら、非行の原因を解明し、鑑別結果通知書を家庭裁判所へ送付(「少年 院」「保護観察」「児童自立支援施設」「児童養護施設」「検察官送致」などの審判の資料になる)。地域の非 行・犯罪防止のため、青少年問題を抱える個人や機関を援助。
	沖縄少年院	対象：16歳に満たない者のうち、少年院での矯正教育が有効と認められた少年。警察での取り調べ・被害者 との示談状況・家庭環境や交友関係の調査・少年自身の問題性・反省度合いなどの様々な事項をまとめ、 最終的に社会での更生が困難だと判断された場合に送致 役割：少年院は懲役や禁固などの”刑罰”とは全く異なり、少年を健全な社会生活に適応させるための”矯正 教育”を行う施設であり、前科もつかない。
	浦添警察署 少年課	役割：少年の非行防止・未成年サイバー犯罪対策出張授業。不審者対策。スクールサポーター・大学生少年サ ポーター配置。立直し支援活動。問題行動がある子の保護者への助言。
	スクールサポーター	対象：スクールエリア指定校 役割：学習支援。少年相談。生徒への非行防止講話。巡回活動。
	少年補導員	役割：パン作り等を通じた少年の立直し支援。

	大学生少年サポーター	役割：街頭補導活動。薬物乱用防止及び非行防止教室補助。学習支援活動。少年の居場所づくり活動。
	子ども若者みらい相談プラザ sorae	対象：0歳～39歳まで、社会生活に困難のある子ども・若者。 役割：あらゆる問題を受容して、情報提供、助言、紹介、もしくは他の支援機関との連携による支援をコーディネート。子どもの発達への不安相談、不登校・生活困窮相談、就職・自立への不安相談、ひきこもり・対人不安相談。
	サポートステーション琉球	対象：15歳～39歳くらいまでの就労に向かう若者(中3も相談)、保護者、関係者。 役割：働くことについてさまざまな悩みを抱えている若者への支援サービス。個別相談、ライフスキル集中訓練、就活セミナー、コミュニケーションセミナー、パソコン資格取得対策講座、就労体験ジョブトレ、職場定着・キャリアアップ支援
県職員	学校支援地域本部事業 地域コーディネーター	対象：配置された学校 役割：学校と地域の橋渡し役。学校のニーズに応じた学校支援ボランティアの募集や派遣を行う。(読み聞かせ、プリントの丸つけ、クラブ活動・部活動の指導、環境整備、登下校安全指導、学校行事置補助)
	SSW (スクールソーシャルワーカー)	対象：児童生徒、保護者。 役割：福祉の専門家。子どもの周りの環境に働きかけるのがスクールソーシャルワーカー。いじめ、不登校、暴力行為、児童虐待など生徒指導上の課題に対応するため、様々な環境に働きかけて支援。
	SC (スクールカウンセラー)	対象：児童生徒、保護者、教職員。 役割：心理の専門家。相談面接を受けたり、必要であると認められた子どもや保護者には、積極的に面接を行ったりする。治療的なカウンセリングを行ったり、関係機関や医療機関を紹介したりする。また、心理的観点から保護者や教職員へアドバイスを行う。人格検査。発達検査(見立て)。生徒指導委員会への参加。教職員や保護者、地域へ向けた研修、講話、講演などを行う。予防的対応(ストレスチェック・ストレスマネジメント)。
	小中アシスト相談員	対象：市内小中学校の児童生徒 役割：兄弟姉妹ケースへの支援に有効。不登校や問題行動等の未然防止、早期対応を図るための相談活動や登校支援、学習支援等。
	医療	対象：発達障害(または可能性)がある児童生徒、その保護者。 役割：診断を行う。

※この表は、各ウェブページやリーフレット等を参考に作成しました。

不登校対策連携資料

2019年6月作成

不登校児童生徒への支援を考えると、関係機関との連携が有効である場合が多い。では、どこと連携すればいいのか。参考にしてください。なお、複数の機関と連携が必要な場合、要対協(要保護児童対策地域協議会個別支援会議)を開き、支援を検討するとよい。

要対協を開くときは、学校からこども家庭課へ要請する。

問題行動の毎月の報告は、こども青少年課

1 対象者(不登校児童生徒)が、就学援助(要保護)を受けている。	⇒	保護課(市役所)
2 対象者が、虐待を受けている可能性がある。	⇒	こども家庭課(市役所) 県中央児童相談所
3 対象者が、発達障害または情緒障害等の特性をもっている可能性がある。	⇒	スクールカウンセラー こども青少年課くくむい 病院(心療内科) 障害福祉課
4 保護者との連絡が付きにくい。家庭訪問しても会えない。	⇒	教育相談支援員(各校) スクールソーシャルワーカー(SSW) こども政策課 民生委員・児童員
5 対象者が、中学3年で、進学の意味がない。(就職)	⇒	自立サポートセンター・てだこ未来(市役所1F) Sorae(子ども若者みらい相談プラザ) サポートステーション琉球
6 対象者が、地域の児童館を利用している。	⇒	こども政策課各児童館館長
7 対象者または母親がDVを受けている可能性がある。	⇒	こども家庭課 母子生活支援施設 浦和寮
8 対象者の家庭が、生活困窮している。	⇒	社会福祉協議会
9 対象者が、警察に補導されたことがある。	⇒	警察署少年課 県中央児童相談所

4 関係機関の関わり事例

(1) 事例1

①児童Bさんの事例より

【本児と家庭環境が起因していると思われるケース】

小学6年のBさん(女)は、不登校でほとんど登校していない。本児は、人に慣れるのに時間がかかり、「学校に行こう」と言われることを嫌う。母親は、自身の経験がないことから子どもをどう甘えさせればいいのかわからない。

②関係機関の関わり

- ・学校 … 家庭訪問。母親面談。
- ・こども家庭課(家庭児童相談室) … 家庭訪問。
- ・こども青少年課(自立支援室) … 自立支援週2回。家庭訪問。母親心理士面談。
- ・小中アシスト相談員 … 家庭訪問。
- ・児童センター … 児童の居場所提供

③関係機関の連携の様子

- ・小中アシスト相談員からのBさんに関する情報提供がこども青少年課にあった。
- ・学校からの要請で、こども青少年課(自立支援室)がBさんの支援を週2回と母親とBさんの心理士面談をそれぞれに実施。保護者の了解のもと、学校へ情報提供。

④成果と課題(○成果, ▲課題)

- こども青少年課の心理士が母親と面談を行い、母親の養育歴など家庭環境について母親の承諾を貰い、学校へ情報提供できた。
- こども家庭課と学校、こども青少年課、児童館が連携することにより、虐待などの疑いが見られた場合、迅速に対応ができる。
- 関係機関が関わることで、進学後、中学校への引き継ぎ漏れを減らすことができる。
- こども青少年課の自立支援室に通うことで、家族以外で心を許して話ができる大人が増え、学校では見られない児童の様子を学校へ伝えることができた。
- ▲母親が支援を必要と感じていないため、母親を支援する機関がない。

(2) 事例2

①生徒Cさんの事例より

【本児と家庭環境が起因していると思われるケース】

中学1年のCさん(女)は、不登校でほとんど登校していない。母親は、小学6年の時自死。現在は母方の祖父母と暮らし、校区外から市内中学校に在籍している。本児は、急に激しく喜ぶなど感情の不安定さがあり、さらに、男性がいると緊張した様子が見られる。

②関係機関の関わり

- ・学校 … 家庭訪問。祖母面談。
- ・こども青少年課(自立支援室) … 自立支援週2回。祖母心理士面談。

③関係機関の連携の様子

- ・中学校からの要請で、こども青少年課の自立支援室で生活リズムを整えることとひきこもりを予防する目的で支援を週2回実施。生徒の送迎時なども活用し、学校とこども青少年課でこまめな情報交換を行った。祖母との心理士面談も実施した。

④成果と課題(○成果, ▲課題)

○こども青少年課の心理士が祖母と面談を行い、現在の家庭環境について祖母の承諾を貰い、学校へ情報提供できた。

○入学時からほとんど登校していなかったCさんだが、自立支援のある週2回は中学校で給食を食べ、支援終了後も週3日登校できた。定期テストも受けることができた。

▲市外から通っているため、市役所内の保護課やこども家庭課などとの連携が難しい。

(3) 事例3

①児童Dさんの事例より

【本児と家庭環境が起因していると思われるケース】

小学6年のDさん(女)は、授業妨害、暴力行為、危険行為、喫煙、警察による補導歴がある。就学前にADHDの診断を受けている。母子家庭で、上の兄弟からDVを受けているが、母親には危機意識がない。家には、17歳の兄の嫁(16歳)と子(1歳)、中学生の姉の彼氏、中学生の兄の彼女も入り浸っている。

②関係機関の関わり

- ・学校 … 母親との面談。暴力・危険行為への対応。児童相談所への通告。
登校後過ごす教室確保。
- ・教育相談員 … 登校後の個人対応(週3回)。
- ・保護課 … 生活保護。生活自立支援。
- ・こども家庭課(家庭児童相談室) … 要対協(個別支援会議)の開催。
- ・こども政策課(てだこ未来応援員) … 登校後の個人対応(週1回)。
- ・中央児童相談所 … 一時保護。母親との定期面談。若夏学院への保護委託。
- ・若夏学院 … 児童Dに必要な指導。自立への支援。
- ・小中アシスト相談員 … 母親支援。家庭訪問。
- ・学校教育課 … 児童Dの状況や交友関係の把握と他市町村との連携。
- ・こども青少年課(自立支援室) … 他機関による保護までの週2回支援。家庭訪問。
- ・浦添警察署 … 暴力行為、万引き、飲酒、喫煙等の補導。
母親への助言・指導。
- ・医療 … 発達特性の診断。
- ・児童館 … 登校前の休憩所。(暴れたため、後半は母親同伴時のみ立ち入り可)。
児童Dの妹と弟の居場所づくり。

③関係機関の連携の様子

- ・小学校が校内でのDさんへの対応に苦慮していたため、こども青少年課が学校からの要請を受けて校内で自立支援室の支援員が支援を行った。
- ・小学校からの要対協(個別支援会議)開催要請により、関係機関がDさんの現状とそれぞれの機関の対応を話し合った。その時、Dさんが通っている医療機関へDさんの現状の報告を行った。
- ・小学校からの通告とこども家庭課との連携と警察(少年課)の母親への助言・指導により、中央児童相談所が面談と一時保護を行い若夏学院での自立支援が開始。

④成果と課題(○成果、▲課題)

○要対協開催により、各機関がもっている情報を共有し、悪化していく問題行動や家庭状況を把握できたことから、警察の少年課が母親へ助言を行い、Dさんを危機的状況から保護へとつなぐことができた。

- Dさんが、若夏学院で落ち着いた生活環境の中、漢字検定に向けて学習に取り組むようになった。
- ▲それぞれの機関がもつ権限を互いに理解して連携しなければ、不信感をもつ恐れがあり、第1回目の要対協では、それぞれの機関がもつ権限について簡単に説明する時間をもった方がよいのかもしれない。

Ⅶ 成果と課題

1 成果

- 登校日数が増え、調理実習の試食の時には、一緒に試食する人の食器も準備するなど生活面での社会的な自立の基礎を徐々に身につけてきた。
- 自立支援施設への入所へとつながり、落ち着いた生活環境の中、社会的な自立への一歩として学習に取り組むようになった。

2 課題

- ▲保護者が支援を必要と感じていない場合、こども青少年課や病院などの関係機関が関わるのが難しい。
- ▲生活拠点が市外の場合、保護課やこども家庭課など市役所内の関係機関が関わるのが難しい。

Ⅷ おわりに

不登校や問題行動には、児童生徒の発達特性や精神疾患、保護者の精神疾患やDV被害、家庭の貧困や家庭不和などいろいろな要因があり、どれだけ力のある教員がいたとしても学校だけの対応では改善が難しいこともあるということを感じることができました。

最後に、本研究を行うに当たり、教育関係者や福祉関係者の方々からいろいろなことを教えていただきました。おかげさまで、なんとか1年間の研究をまとめることができました。

本当に、ありがとうございました。

おもな参考・引用文献

- 子ども若者みらい相談プラザ sorae (2019年度版) リーフレット
- 児童相談所のしおり (2019年度版) 発行所 沖縄県中央児童相談所
- 那覇少年鑑別所のしおり (平成31年4月作成) 発行所 那覇少年鑑別所
- 法務省 ホームページ http://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei60_00001.html
- ノアーズ・ガーデンのプレゼン資料 (平成31年度作成) 発行所 ノアーズ・ガーデン
- 福祉保健の概要 編集 浦添市福祉健康部 発行 浦添市福祉健康部
- 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06060513/001/019.htm
- 浦添市役所ホームページ <http://www.city.urasoe.lg.jp/>
- 沖縄県県庁ホームページ <https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kodomo/shonenkodomo/8346.html>
- サポートステーション琉球 ホームページ <http://supportryukyu.info/>
- 沖縄県警察 ホームページ <http://www.police.pref.okinawa.jp/docs/2015022500030/>
- 少年院。Com <http://xn--0et88cix0g.com/>
- 糸満市役所ホームページ <https://www.city.itoman.lg.jp/docs/2018042000054/>
- 島添の丘ホームページ <http://shimazoenuoka.com/>

〈適応指導〉

不登校児童生徒への理解と援助のあり方

—開発的教育相談によるリレーションづくりを通して—

特別研究員 適応指導教室「いまあじ」担当教諭

浦添市立港川中学校 教諭 屋富祖 貴子

目 次

I	テーマ設定理由	57
II	目指す子ども像	57
III	研究の目標	57
IV	研究の仮説	58
V	研究内容	58
VI	研究の実際	
1	『今日の一言タイム』（自己表現力を育成する取組）	59
2	『ふわふわの木を育てよう（葉っぱのプレゼント）』 （自尊感情や自己有用感を高める取組）	60
3	定型文を活用した作文指導	60
4	毎月の自己チェックの実施	61
VII	考察	
1	自尊感情の傾向・変化の分析	61
2	『定型文を活用した作文指導』による生徒の変容	63
3	『ふわふわの木を育てよう』の取組に対する職員アンケートの結果から	63
VIII	成果と課題	64
	主な参考・引用文献	64

不登校児童生徒への理解と援助のあり方

－ 開発的教育相談によるリレーションづくりを通して －

特別研究員 適応指導教室「いまあじ」担当教諭

浦添市立港川中学校 教諭

屋富祖 貴子

I テーマ設定理由

近年、少子化、核家族化、都市化、情報化、国際化など、社会の急激な変化を受けて人々の価値観や生活様式が多様化している一方で、人間関係の希薄化、地域社会のコミュニティー意識の衰退などがみられ、子どもたちを取り巻く環境にも変化がみられるようになってきた。自然や広場などといった遊び場が少なくなり、様々な体験の機会が失われ、代わりにテレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増え、子どもたちの人間関係を構築する力や社会性の減少といった問題も指摘されている。

「平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）」によると、1,000 人当たりの不登校児童生徒数が、沖縄県は小学校が全国で 1 番目、中学校が全国で 3 番目にそれぞれ多く、不登校予防支援は本県の教育課題の 1 つとなっている。また、この調査では小中学校の不登校の要因として「不安感や学校における人間関係」が全体の約 5 割を占めている。そこで、不登校予防支援・登校復帰支援に今必要なのは子どもたちの対人関係能力の育成を図ることだと考える。

適応指導教室に通う児童生徒は、さまざまな事情で不安や悩みを抱えきれなくなり、心のエネルギーが低下し、学校に登校することが難しくなっている。不登校状態にある子どもは社会経験が少ない傾向にあるため、コミュニケーションに必要なスキルが年相応に身につけていないと考えられ、学校に登校できなくなった自分に自信を持てなくなっていることが多い。そのような子どもたちに対し、学校や学級に代わり、児童生徒を援助していく場が適応指導教室である。

適応指導教室の指導教師や指導員にとって、そこに通う子どもたちとのリレーション（人間関係）づくりは重要である。個々の実態を踏まえ、ソーシャルスキルトレーニングをはじめとする「開発的教育相談」を行っていくなかで子どもたちとの信頼関係が構築され、子どもたちの社会的スキルの向上や自己肯定感・自己有用感の向上を図ることができるのであり、さらには子どもたち同士や活動で関わる人たちとの良好な関係の構築や学校生活への復帰にもつながると考える。

以上のことから、子どもたち一人ひとりに寄り添ったリレーションづくりを行い、体験活動や交流活動などを通してその子なりのよさを見つけ、引き出し、認めていき、学校生活への復帰に向けて少しずつでも前に進めるよう、援助の仕方を工夫していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 目指す子ども像

- 1 自分の気持ちを表現できる児童生徒
- 2 お互いに信頼関係を築きながら、明るく前向きに活動できる児童生徒

III 研究の目標

子どもたちが活動を通して他者と関わりながらコミュニケーションスキルを身につけ、達成感を味わうことで「自信」につなげ、お互いの信頼関係を深めることができるようにする。

IV 研究の仮説

児童生徒に対して個々の実態に応じ、「開発的教育相談」を活用したリレーションづくりを行うことで、子どもたちが活動を通して他者と関わりながらコミュニケーションスキルを身につけ、自分の気持ちを表現できるようになり、自己肯定感・自己有用感を高めることができるであろう。

V 研究内容

1 開発的教育相談とは

開発的教育相談とは、春日井敏之（2011）によると、「学級、学年などのすべての子どもに対して、キャリア・ガイダンス、ソーシャルスキル・トレーニング、構成的グループエンカウンター、ピア・サポートなどを通して行う人間関係・信頼関係の形成や人としてのあり方・生き方などにかかわる心理教育的指導・支援」と述べている。上記のグループアプローチのほか、アサーショントレーニング・アンガーマネジメント・ライフスキルトレーニング・キャリアカウンセリングなども挙げられ、開発的教育相談は授業だけでなく、授業以外の活動として実施することも可能であり、その工夫が求められている。

2 ソーシャルスキルトレーニング

(1) ソーシャルスキルトレーニングとは

石黒康夫・星雄一郎（2018）は「ソーシャルスキルとは、『よりよい人間関係を築くために必要な能力や技術』のことで、「子どもたちが学校の中で、上手に対人関係や集団生活を営むために必要な能力であり、将来、社会に出たときのためにも身につけておきたいスキル」であり、「このようなスキルを身につけるためのコツを学び、状況に応じて使えるようにすることを『ソーシャルスキルトレーニング』」であると述べている。また、「応用行動分析学では何らかの問題行動があった場合、その原因を性格や能力、やる気などではなく、行動の過程に見つけ、改善策を立てるが、「ソーシャルスキルトレーニングも同じで、人とうまく人間関係が築けないのは、その人の内面に原因があるのではなく、必要なスキルがまだ身につけていないからだと考え」、「スキルさえ身につけられれば、誰もがよい人間関係を築ける」と述べている。

少子化・核家族化が進んだ現在、地域社会に代わり、あいさつをする・聴く・話すなど、生活していく上で必要なスキルを子どもたちに学ばせる場として学校が大きな役割を担う。小中学校でも人間関係でトラブルを起こす生徒が見られるが、「どうして改善されないのだろう」と子どもたちの行動や自分の指導力をマイナス思考で捉えるのではなく、「子どもたちにスキルをつけていこう」とプラス思考で捉えることが大切であると考えられる。

(2) ソーシャルスキルトレーニング（以下「SST」）の進め方

最初にどんなスキルについて学ぶのか目的を伝え（「インストラクション」）、次に教師または子どもに協力してもらい、良い例や悪い例の実演を手本として見せ（「モデリング」）、実際に2人一組やグループになって交代で子どもたちに練習させて（「リハーサル」）、練習の後にはお互いで感想や意見を言い合い、最後にトレーニングの振り返り（「フィードバック」）として自己評価やトレーニング全体の感想を確認する（図1）。



図1 SSTの進め方

3 教室へ行けない子どもたちへの「対人関係能力育成」のための段階的な対応

教室へ行けない子どもたちへの対応として、河村茂雄（2002）は、「3つの段階を踏んで、その子どもにあったペースで対応」し、「子どもが一つ一つの発達面の課題を着実に進み、自ら乗り越えられる力をつけていけるよう援助すること」と述べている。

(1) 第1段階「子どもとのリレーションの形成」

適応指導教室に通う子どもたちは心のパワーの充電を必要としている。「ほかの子どもとかかわりたい」という動機がでてくるためには、自分には心強いサポートがあると感じる必要があるとあり、そのようなサポートをしてくれる特定の相手が必要となってくる。それが適応指導教室の教師であり、教師に十分に受け入れてもらい、緊張や不安をとまなわれない関係を教師との間で体験することで、心のパワーが充電され、人とかかわることへの不安が軽減される。

(2) 第2段階「心の問題の整理」

子どもの好みや嫌いなこと、得意なことや苦手なことを子どもと一緒に確認し、少しずつ話題を内面に近づけていく。心の問題を自分の「考え方」「感じ方」「行動の仕方」に焦点化し整理していくことで、このような「クセ」をもっているから人とうまくかかわれないのだということに気づかせ、子ども自身にそのクセをできる範囲から変えていこうという意欲を持たせる。

(3) 第3段階「新しい考え方・行動の仕方の練習」

友達とかかわる場面や、学校生活で日常的に起こり得る場面を意図的に設定し、ロールプレイ方式で練習する。この時点では、ほかに数人の子どもたちを交えながら、いくつかの課題に取り組む体験をさせる。一つ一つの体験を十分に積み重ねていくことが自信になっていく。

4 自尊感情と自己有用感

「自尊感情」とは、生徒指導リーフ（2015）では、「心理学用語 Self Esteem の訳語として定着した概念」であり、「一般的には『自己肯定感』『自己存在感』『自己効力感』等の語などと、ほぼ同じ意味合いで用いられ」、「自分に対する自己評価が中心」と示されている。

一方、「自己有用感」は、生徒指導リーフ（2015）では「他人の役に立った、他人に喜んでもらった、・・・等、相手の存在なしには生まれてこない点で、『自尊感情』や『自己肯定感』等の語とは異なり」、「自分に対する他者からの評価が中心」であり、「自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされる」と示されている。「自己有用感」は自他共に肯定的に受け入れられることで生まれ、人とのつながり（＝社会性）を築くことにつながるといえる。

VI 研究の実際

1 『今日の一言タイム』（自己表現力を育成する取組）

毎日の朝の会での「今日の一言タイム」コーナーで自己表現力を育成する取組を行った。筑波大学附属大塚特別支援学校の教諭特別支援学校の教諭が考案したカードゲーム「すきなのだっち？」や「トーキングゲーム」を活用した。

この活動は生徒だけでなく指導教師・指導員も一緒に行った。ルールとして「話すスキル」「聴くスキル」を設定し（図2）、当たりくじを引いた人は「話すスキル」を意識して発表し、当たりくじを引かな

話すスキル
・わかりやすく話す <small>内容の整理・話す順番・言い方・話す速さ</small>
・表情・身振り・手振りを工夫する
・相手の気持ちを考えて話す <small>一方的でないか、いやな気持ちにさせていないか</small>

聴くスキル
・相手に体を向ける
・相手の目を見る
・うなずく、相づちを打つ
・最後まで話を聴く

図2 話す・聴くスキル

かった人は「聴くスキル」を意識して発表を聴くことを心がけさせた。

(1) 初期（2ヶ月）の取組

「すきなのどっち」（図3）を用い、カードに描かれた2つのイラストを見て好きな方を選択し、「どっちが好きなのか」「なぜ好きなのか」について説明できるようにトレーニングを行った。



図3 すきなのどっち

(2) 中期（2ヶ月）の取組

「トーキングゲーム」（図4）を用い、カードに記された質問に対し、「質問に対する答え」「そう答えた理由」等について説明できるようにトレーニングを行った。

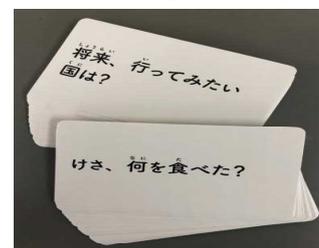


図4 トーキングゲーム

(3) 後期の取組

カードは用いずに、本人が自由にテーマを考えて自分の言葉で発表できるよう支援した。

2 『ふわふわの木を育てよう（葉っぱのプレゼント）』（自尊感情や自己有用感を高める取組）

行事等での活動後、指導教師や指導員が葉っぱの付箋紙に子どもたちの良かったところやがんばったところ、激励の言葉や感謝の言葉等を「ふわふわ言葉」を活用して記入、その場でプレゼントし、教室内の木に貼ってもらった（図5）。「ふわふわ言葉」とは、相手を認め、ほめ、励まし、元気にすることができる言葉、自分が言われたらうれしい言葉もあり、「ありがとう」「上手だね」「その調子だよ」「楽しいね」などが挙げられる。



行事や週1回のスポーツ活動・学習活動には適応指導教室に通っている子どもたちだけでなく、その前段階の定期相談を受けている不登校の子どもたちが参加することもあり、その子たちにも葉っぱをプレゼントすることで、自尊感情や自己有用感を高め、自分に自信を持たせる支援を行った。指導教師や指導員が子どもたちに直接渡せなかった場合には、定期相談の際に担当相談員を通して渡してもらい、教室と一緒に来て貼ってもらう等の協力もお願いした。



図5 ふわふわの木を育てようの掲示風景

3 定型文を活用した作文指導

スポーツ活動後のふり返しシートにおける感想文記入の際に「考えたり記入するのに時間のかかる生徒」「一行（一言）しか書けない生徒」がいる。このような生徒のほとんどが小学校の頃から不登校のため作文指導が十分されないまま中学生となり、作文を書くことに自信がなく、不安や抵抗を抱いている生徒である。そこで、作文を書く際にホワイトボードを用いて定型文を提示することで、限られた時間の中で生徒自身で考えながら作文を構成し、記入できるよう支援した（図6）。

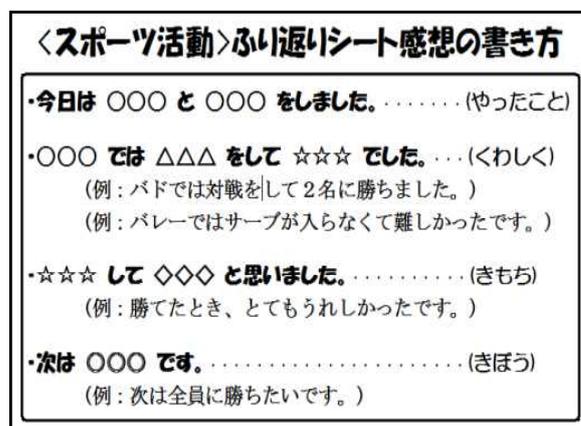


図6 定型文の提示

4 毎月の自己チェックの実施

自己をふり返り、次につなげることを目的に「自尊感情」および「自分の行い・人とのつきあい・登校」に関する自己チェックを毎月行った。

「自尊感情」のチェックには東京都教職員研修センターと慶応義塾大学との共同研究で開発した「自尊感情測定尺度（東京都版）」（表1）を、その他の自己チェックには毎年利用しているシートを活用し、結果をレーダーチャート化し、分析した。

表1 自尊感情測定尺度の質問項目

1	私は今の自分に満足している	13	私は今の自分は嫌いだ
2	人の意見を素直に聞くことができる	14	人に迷惑がかからないよう、いったん決めたことには責任を持って取り組む
3	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる		
4	私は自分のことが好きである	15	私には誰にも負けないもの（こと）がある
5	私は人のために力を尽くしたい	16	自分には良いところがある
6	自分の中には様々な可能性がある		
7	自分はダメな人間だと思ふことがある	17	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している
8	私はほかの人の気持ちになることができる	18	私は自分のことは自分で決めたいと思う
9	私は自分の判断や行動を信じていることができる	19	自分は誰の役にも立っていないと思う
10	私は自分という存在を大切に思える	20	私には自分のことを必要としてくれる人がいる
11	私には自分のことを理解してくれる人がいる	21	私は自分の個性を大事にしたい
12	私は自分の長所も短所もよく分かっている	22	私は人と同じくらい価値のある人間である

自尊感情測定尺度（東京都版）より

Ⅶ 考察

1 自尊感情の傾向・変化の分析（図7）

(1) レーダーチャートの「大きさ」から見る通級生W（中3生）の自尊感情の傾向

入級時は大きさが「中」程度であり、自尊感情は高いわけでも低いわけでもない。しかし、10月になると大きさが「小さく」なり、自尊感情が急激に低くなっている。その後、11月には大きさが元に戻り、12月以降は大きさを維持していた。

10月の大きさが「小さく」なった理由として、「高校受検に向けて進路先を考えようとするのが希望が見いだせなかった」こと、「受検した定期テストで力を出せなかった」こと、「提出課題の範囲が広く思うように進められなかった」ことが考えられる。現に、これらの状況が重なり、気持ちの急激な落ち込みが見られ、欠席が続いた時期でもあった。一方、11月以降の大きさが元に戻り、維持できた理由として、「一定期間、午前中だけの活動に切り替え、本人のペースで活動させた」こと、「担当教諭が本人面談・保護者面談を重ねることで、進路への理解を深めた」こと、「本人の良さを見つけ、それを発揮できる活動を取り入れたこと」「本人がもつ良さに気づかせ、それを進路先決定に結びつけた」ことが考えられる。

(2) レーダーチャートの「形」から見る通級生 W（中3生）の自尊感情の傾向

入級時は「自己主張・自己決定」が極端に高く、「関係の中での自己」が低かったが、9月には両者が徐々に逆転していき、10月には「関係の中での自己」が極端に高くなった。また、「自己評価・自己受容」は急激に低くなり、アンバランスの状況になった。しかし、11月には「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」三者バランスのとれた状況となり、12月以降は極端な変動もなく、「関係の中での自己」がやや高いながらも、バランスのとれた形を維持した。

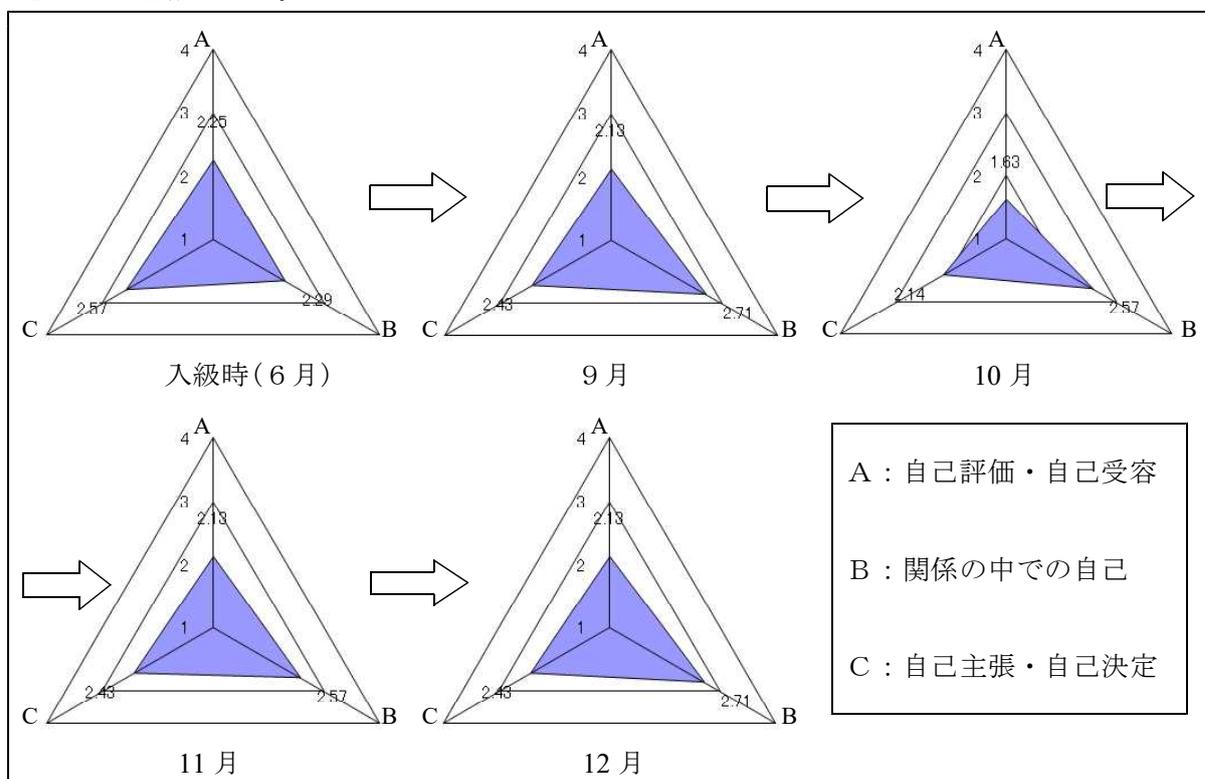


図7 毎月の自尊感情レーダーチャート（通級生W）

「形」の変化からわかることとして、入級時はやや自己中心的で、他者の助言より自分の考えが一番よい方法だと考える傾向が強かったと思われる。不登校が続き、学校生活を送ることができなかつたため、クラスメイトなど他者との関わりがほとんどなく、自分中心の生活を送ってきたことからそのようになったと考えられる。しかし、適応指導教室に通級し、他者との関わりが少しずつ増え、定期テストを受検したり、進路に向けて考えるようになると、「全体の中の自分」「他者と自分」をかなり意識するようになったと思われる。また、先述した「高校受検に向けて進路先を考えようとするが希望が見いだせなかつた」こと、「受検した定期テストで力を出せなかつた」こと、「提出課題の範囲が広く思うように進められなかつた」ことは、「自己評価・自己受容」の低下を招いてしまったとも考えられる。しかし、先述した「本人の良さを見つけ、それを発揮できる活動を取り入れたこと」「本人がもつ良さに気づかせ、それを進路先決定に結びつけた」ことで、「自己評価・自己受容」「自己主張・自己決定」を高めることにつながり、12月にはバランスのとれた状況をつくり出すことができたと考えられる。さらに、毎日の活動『今日の一言タイム』（自己表現力を育成する取組）により「自己主張・自己決定」を高めたり、毎週行われる集団活動（スポーツ活動）を通して「関係の中での自己」をやや高めながらも、自尊感情をバランス良く維持することができたのではないかとと思われる。

2 『定型文を活用した作文指導』による生徒の変容

初回は少しだけ時間がかかったが、2回、3回と回を重ねる毎に短い時間で作文を書くことができるようになった。隣で考え込んでいる仲間に「〇〇って書いたら？」とアドバイスする通級生Wの姿や励ましの言葉をかける交流生の姿もみられた。書けたことが自信へとつながり、他とのコミュニケーションにも発展したといえる。また、中3生においては、入試出願出書類である自己申告書を自分の言葉で書くことができ、より前向きな姿になっている交流生もいた。

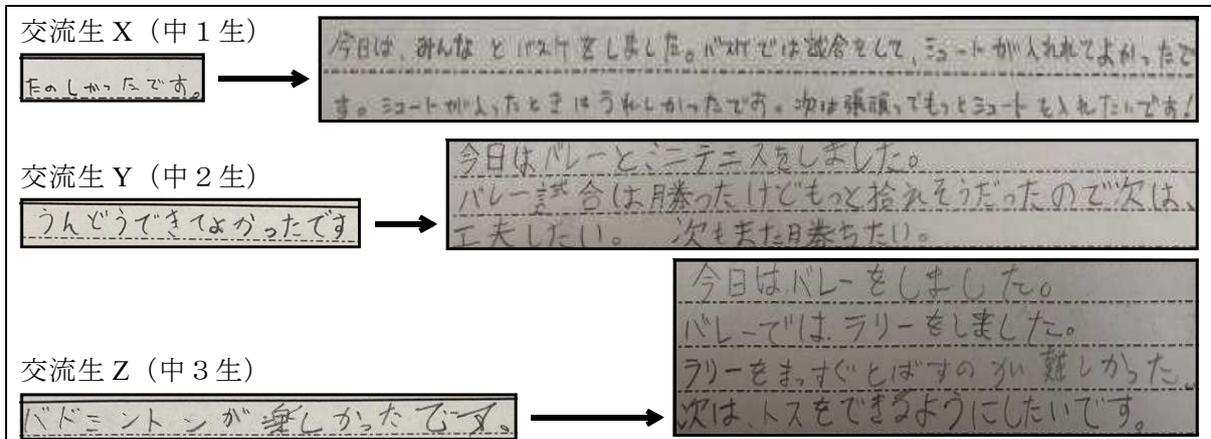


図8 交流生X・Y・Zの作文の変化

3 『ふわふわの木を育てよう』の取組に対する職員アンケートの結果から

子どもたちに関わっている適応指導員・臨床心理士・教育相談員を対象にアンケートを行ったところ、『「ふわふわの木を育てよう（葉っぱのプレゼント）」の取組は子どもたちに有効である』と『葉っぱをプレゼントするタイミングや回数・対象人物等は適切である』について、すべて肯定的な結果が見られた（図9）。

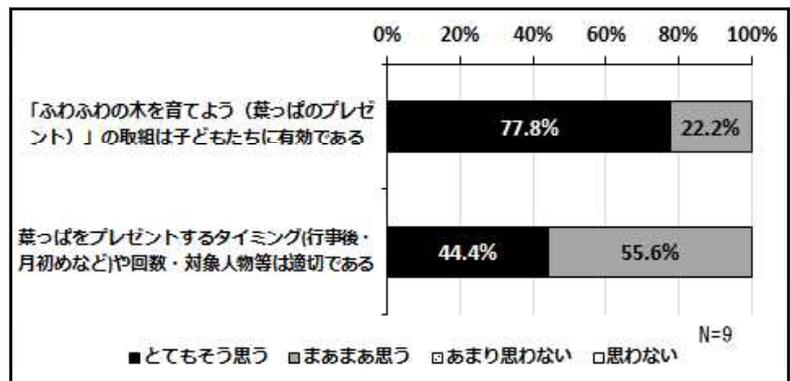


図9 職員対象アンケート結果

子どもたちに有効である理由として、「自分の頑張りを認めてもらい、形に残すことで、いつでも振り返ることができ、また激励のメッセージをもらうことで、自信につながる」「人からどう思われているかを知る良い機会となり、意識していなかった自分や自分では気づいていないことを言葉にしてもらえ」「誰かが見てくれている体験を得ることができる」などを挙げていた。また、「目に見えて葉っぱが増えていき、子どもたちの頑張りが職員との関わりを視覚的に捉えやすく、自尊感情や自己有用感が育っていく様子を直観的に感じる事ができた」との意見もあった。

葉っぱをプレゼントするタイミングについては、「活動直後に渡すと、子どもたちもうれしそうだった」「行事後だとすぐに振り返りができ、活動に対し、相談員としても早い段階でフィードバックを得ることができる」などの意見があり、「間が空くとピンとこなかったりすることも多いので、こまめにプレゼントすることが効果的」との意見もみられた。葉っぱをプレゼントしたときの子どもたちの様子として、「照れたり、恥ずかしそうに受け取るが、メッセージを読み、うれしそうに笑っていた」「何度か読み返していた」「大切に持っている」などがみられ、「普段は

感情や言語で表現するのが苦手な子でも、メッセージを読むことで表情が緩み、表情が豊かになっていく様子が見られる」など、子どもたちに良い変化が見られ、「保護者に子どもの頑張りが伝わり、親子の会話のきっかけとなり、親子に良い影響をもたらすのでは」との意見も見られた。

適応指導教室への毎月の通級状況は表2のようになっており、今年度の特徴として、適応指導教室への入級児童生徒は少ないが、スポーツ活動や学習活動への体験交流生が次第に増え、年度後半には参加状況がほぼ安定し、活動が定着していたという点が挙げられる。体験交流生の顔ぶれがいつも同じになることで、子どもたち同士が安心して交流を深めることができ、毎回、笑い声が聞こえる楽しい活動となっていた。そのような活動の後に葉っぱをプレゼントすることは、子どもたちにとって「次がんばろう！」と自信や意欲を高める効果を及ぼしていたといえる。

表2 適応指導教室「いまあじ」毎月の通級状況（1月末日現在）

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	年間計
新規入級生	0	1	1	1	1	2	4	4	4	4
体験通級・交流生	4	6	6	0	9	12	14	9	17	20
計	4	7	7	1	10	14	18	13	21	24

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 毎日の活動『今日の一言タイム』を通し、生徒個々の実態に応じた「開発的教育相談」を活用したリレーションづくりを行うことで、他者と関わりながらコミュニケーションスキルを身につけ、自分の気持ちを表現できるようになった。
- (2) 『ふわふわの木を育てよう』の取組として葉っぱのプレゼントを通し、自分の頑張りを認めてもらったり、新しい自分の発見があったり、誰かが自分を見てくれていることに気づくことにより、自己肯定感や自己有用感を向上させ、さらなる自信や意欲につなげることができた。
- (3) 通級生と体験交流生（相談生）が一緒に活動が多くなることで、子どもたち同士のコミュニケーションが広がり、そのことが自己肯定感・自己有用感をさらに高めることにもつながった。

2 課題

- (1) 通級生が少なく、それぞれの出席状況が安定しないことが多く、全員が揃うことがほとんどなかったため、教室での小集団による SST の活動を行うことができなかった。
- (2) 声を発することができない生徒に対して、保護者と情報共有・連携を密にし、その子の特性を活かした効果的な関わり方や SST の工夫が必要である。

【主な参考・引用文献】

- ・やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズよくわかる教育相談 春日井敏之・伊藤美奈子編
ミネルヴァ書房 2011年
- ・自律心を育む！生徒が変わる 中学生のソーシャルスキル指導法 石黒康夫・星雄一郎
ナツメ社 2017年
- ・ワークシートによる教室復帰エクササイズ 保健室・相談室・適応指導教室での「教室に行けない子」の支援 河村茂雄編 図書文化社 2002年

令和元年度 浦添市立教育研究所職員名簿

所 属 ・ 職 名	氏 名
所 長	長 濱 京 子
研 究 係 長	比 嘉 健
指 導 主 事	仲 宗 根 歩
指 導 主 事	井 崎 重
一 般 事 務	上 間 えりな
事 務 兼 図 書 司 書	我 如 古 佳 代
IT 指 導 員	國 吉 伸 明 石 嶺 さとみ

研 究 報 告 集 録 (第48号)

令 和 2 年 3 月 発 行

発行人	長 濱 京 子
発行所	浦 添 市 立 教 育 研 究 所
所在地	〒901-2103 沖 縄 県 浦 添 市 仲 間 2 丁 目 47 番 3 号
	電 話 (098)876-7522
	FAX (098)876-7222
	URL http://www.urasoe.ed.jp/uraken/
	ウラケンゼロ
	E-mail uraken0@urasoe.ed.jp
